

---

# ヤテのごとく、ヒナギクのごとく～Super Combat Butler Story?～

156million

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハヤテのごとく、ヒナギクのごとく〜Super Combat Butler Story?〜

### 【Nコード】

N62160

### 【作者名】

156million

### 【あらすじ】

週刊少年サンデー（小学館）絶賛連最中の「ハヤテのごとく」の二次創作と言うか、なんというか……。

一応、設定としては、高校2年生になったハヤテたちからスタートです。

また、メインは、ハヤテ、ヒナギクだったりします。

## **1. 新学期（前書き）**

えっと、初投稿ですが、暖かい目で見てください。

## 1. 新学期

新学期。屋敷にはいつもの声が響き渡っていた。

「お嬢様、起きてください。」

「ううーん、今日くらい休ませてくれ……。」

……、今日くらいって、今日から新学期なのにな、とかハヤテが思っている、

「ナギには困りましたね。」と。

「あ、マリアさん、おはようございます。なかなかお嬢様が……」

「わかりました、私が起こしておきますから、もしだったら先に学校に行っていてください。」

「わかりました。それでは。」

と言うわけで、ハヤテは先に行くことに。

ここで、ちょっと説明しよう。

この話は、東京都練馬区の某所のお屋敷に住む主、三千院ナギと、親の借金、1億5680万4000円を負わされて、金を返すためにナギを誘拐しようと思っていたら、なんだかんだでナギを助け、かつ、なんかすごいことになってしまったハヤテも助けられ、

執事にまでなっちゃった挙句、借金を肩代わりしてもらったり、学校に行かせてもらったり、と。  
そんな執事、綾崎ハヤテの、超、コンバットバトラーストーリー、とか言う話です。

そんなわけで場所は変わって白皇学院。

「はあ、結局お嬢様来てくれなかった。」とぼやくハヤテ。

「おはよう、ハヤテ君。」

「あ、ヒナギクさん。」

話しかけてきたのは、白皇学院生徒会長、桂ヒナギク。  
完全無欠の生徒会長、そしてみんなの人気者。

だけど、ハヤテのことが好きで好きでしょうがない……

「作者さん、余計なことは言わないの。」  
すいませんでした。

「どうしたんですか、ヒナギクさん。」

「べ、別に、どうもしないわよ。それよりハヤテ君、ナギは？」

「あ、お嬢様は、……」

「……、察するに、『今日くらい休ませてくれ』とか言ってサボった、てところかな？」

驚異的洞察力。おそろしい、と感じたハヤテ。

「まあ、そんな感じです。」

「もう、ナギったら……（でも、ハヤテ君に話しかけられるし、邪魔されずに済むから、いつか。）」

「あ、そういえば、ヒナギクさんは、クラス分け見に行きましたか？」

「ううん、まだよ。」

「じゃあ、一緒に見に行きませんか？」

「えっ、ハヤテ君……」

顔を真っ赤にして煮えあがるヒナギク。

「あれ、どうしたんですか、顔が赤いですよ。」

（まったく、相変わらず鈍いんだから……）  
ヒナギクの悩みは当分続きそうだ。

「もうっ、いくわよ、ハヤテ君。」

「あっ、まってくださいよ」

「ねえ、理沙ちゃん、あれは？」

いいんちよさんれっどこと、瀬川 泉。

「あれ、ヒナ、なんでハヤ太君と一緒になんだろう。」

えっと、風紀委員ブラック、朝風 理沙。

「ううーん。（さて、ヒナ、今年はアタックするつもりなのか、頑張れ！）」

副委員長ブルーこと花菱 美希。

「何かあったのかな？」 泉が心配そうに言うと、

「まあ、少し気をつけて観察するか。」と美希。

「「「ラジャー」」」

玄関前には、人だかりが。毎年の光景。

（ううーん、どうやって行こうか）とハヤテが迷っていると、

「ほら、ハヤテ君、そんなところに、突っ立ってないで、いくわよ。」

「え、でも人だかりが……」

「まあ、任せて。」

ヒナギクが通ると、そこには道が。

（ヒナギクさんってすごいな）とかハヤテも思いながら、その後ろに行く。

もちろん、他の男子からは猛烈な批判の視線が。

もちろん、その人だかりの中にはヘタレこと東宮も「だれがヘタレ

だ！」

なんか聞こえたけどとりあえずスルー。

（それにしても、綾崎のやろう、なんで、桂さんと一緒にいるんだ、むかつくな……）

へたれは無視と言うことで、とりあえず主人公にカメラを戻しましょう。

「あつ、ありましたよ、ヒナギクさん。今年も同じクラスですね」

「えっ、あ、本当だ。よろしくね。」

（やった、今年も同じクラス♪）と喜ぶヒナギク。

さて、これからのハヤテとナギの運命やいかに？

つづく。



## **1. 新学期（後書き）**

感想、下馬評、批評、ありましたら、どうぞ。

## 2. 運命は（以下略）（前書き）

早くも次話投稿かな？（西澤風）

## 2. 運命は（以下略）

教室に着くと、もうすでに半分以上の人たちが来ていた。

「みんな早いわね、さて、私の席はつと、……えええええ！？」

しーん。

（しまった、あまりに驚いて大きな声だしちゃった。）

そう、実は、ヒナギクは、

ハヤテの隣になってしまったのだ。

（えっ、えっと、とっても嬉しいけど、これじゃあ、授業、集中で  
きないじゃないの／＼／＼）

そして、そのハヤテは、というと、

案の定、他の男子生徒に虐げ「られてません！」

失礼、他の男子生徒に責められていた。

「なんで、おまえが桂さんと一緒なんだよ！」

「桂さんは俺のものだ！」

（それ、本人に聞かれたらまずいんじゃないの？）と思うハヤテ。  
それから抜け出して、ようやく教室に到着。

席を確認して、座ると、

「あ、ヒナギクさん、となりなんですネ。宜しくお願いします。」  
なんて、余裕こいていたり。

（まったく、何でハヤテ君は気がついてくれないんだろう……。）  
すると、

「やつほ〜ハヤ太君にヒナちゃん♪」

「おはよう、ヒナにハヤ太君。」

「……、朝からどうした、ヒナ。顔が赤いぞ。」

上から、泉、理沙、美希。

「おはようございます、皆さん。」

「おはよう、別に何も無いわよ、美希。（全然何も無いけど）」

「……、なるほど。そういうことか。」

とか美希が小声でつぶやいていたり、つぶやいていなかったり……。

ちなみに、美希は、一応気づいています。

そこで、泉が、ふと、

「そういえば、ナギぼんは？」

「いつも通り、「サボってるんだね♪」」

割り込んだのは、勿論、泉。

「もう、途中で割り込まないで下さい。最後までいえないじゃないですかあ。」

「にはは、ごめんごめん。」

とか話していると、

「はいみんな、HR始めるよ」

相も変わらず、担任の雪路。

そして、相も変わらず、無駄話。

そんな中、ヒナギクは、妄想に浸っていた。

（でも、なんか、ハヤテ君となりだなんて、今年は初めからついてるな。

今年こそ、ハヤテ君と……／＼／＼）

「ヒナギクさん、貴女のことか、」

「ハヤテ君、、、」

＜某ヒナギクの「頭の悪い夢」を思い浮かべてください＜

「…」

「…さん」

「…ギクさん」

「…ナギクさん」

「ヒナギクさん」

「へ？」

妄想終了。

「もう終わりましたよ、HR。」

「え、あ、ほんとだ。」

「どうしたんですか？」

「いや、ちょっとね、」

妄想してま「うるさい！」

「それで、ヒナギクさん。」

「え、なに？」

「これからお屋敷に来ませんか？」

いろいろ、妄想してしまったヒナギク、顔が赤くなる。でも、すぐ、  
(あ、そういえば、きょうナギ来ていないんだっけ、)  
と思い出して、

「ふーん、私にナギを説得させて、行かせようとか？」

「いやっ、あの、その……。すいません。」

「もう、しょうがないわね。」

そういつて、二人は、お屋敷に向かった。

あ、そうだ、ナギは、ハヤテの前の席だったり。

## 2. 運命は（以下略）（後書き）

同じく、感想、批評、下馬評、お願いします。



### 3. シラヌイと始まり（前書き）

えっと、アクセス解析をみたら、もう何人もみてくださってうれしいです。

今後もどんどん書いていきたいと思っています。

### 3. シラヌイと始まり

二人は屋敷に到着した。

「ただいま帰りました!」

「おじゃまします♪」

「あら、二人ご一緒とは……、何があつたのですか?」  
マリアが疑惑の目をハヤテに向ける。

「いや、ナギが新学期早々からこないから、どうしたのかなって気になって、

ハヤテ君に頼んで……」

と、ヒナギクが必死に焦りながら弁解する。

（ふーん、まあ、確かにそれもあるみたいですが、ヒナギクさん、何か隠していますね。）

しかし、ここで掘り返すのも……。と思い、その疑問はおくびにも出さず、

「あら、すいませんねえ、いつも。

なら、ハヤテ君、ナギの部屋にヒナギクさんをご案内してあげてください。」

「あ、はい、わかりました。」

そういつて、ヒナギクさんに行った後、

（ううーん、もしや、ヒナギクさん……、まさか、そんなことないですよ。）

と一人考え込んでいるマリアであった。

コンコン、

「お嬢様。ハヤテです。」

「おー、ハヤテ、入っていいぞ。」

ガチャツ。

「ただいま帰りました。」

「おじゃまするわ。」

P○Pをしながらのんびり横になって、いや、ごろごろしているナギ。

「ああ、お帰り……、って、ヒナギク!？」

あせるナギ。P○Pを隠そうとするが、ヒナギクが腕をつかんだ。

「ナゝギ、いま、その手に持っているものはなに？」

ヒナギクの後ろからは炎がめらめらと。

「え、えっと、あの、その、……」

「明日は学校に来るよね?もちろん。」

手には木刀・正宗が。

「わ、わかった、行くから、落ち着いてくれ、ヒナギクっっ」

「今言ったわね、行くって。約束よ。」  
ヒナギクが問う。

「わ、わかったよう。」  
ナギはうなだれながら、ああ、明日は行かなければならない、と一人憂鬱な気分浸っていた。

そのとき、

「にゃーん」

「「あ、シラヌイ!!」「」」  
ヒナギク、ハヤテ、ナギが同時に反応する。

ここで、知らない人のために説明しよう。シラヌイ（漢字表記…白野威）は、アニメ第7話でハヤテがヒナギクの家に泊まったときに、西沢さんと一緒にヒナギクに拾われた猫でして、しかし、ヒナギクの母が猫アレルギーだったため、飼えなく、まさに泣く泣く手放し、現在三千院家で飼われている猫なのです。

その後も、ヒナギクは生徒会で忙しくて、とても見に来られなかったため、久しぶりにみた、と言うわけだ。

「あー、シラヌイかわいい……」  
ヒナギクは完全にシラヌイに夢中。笑顔も全開。

それをみていたハヤテは、

ドキン

（へ、今のドキン、ってなに？なんだ？）

ドキン

（なんか、何でだろう、）

ドキン

（胸が苦しい……）

そう、ハヤテは恋をしてしまった。まあ、鈍いハヤテにはまだまだ気がつくことはないだろう。

### 3. シラヌイと始まり（後書き）

ぜひ、見た方は、感想、批評、などなど、お願いします。

#### **4. 生徒会（前書き）**

すこし、変な感じですが、許してください。

#### 4. 生徒会

「そういえば、ヒナギク、もう6時だが、帰らなくて大丈夫か？」  
ナギが少し遠慮がちに尋ねた。

「あっ……、もうそんな時間？」  
ヒナギクは、寂しそうに言った。

そう。ヒナギクがシラヌイと戯れているうちに、時間は無情にも過ぎてしまったのだ。

「じゃあ、帰るね。あ、ナギ、明日は来なさいよ。」

「うっ、最後までそれを言うか……」  
ナギが、やられた、といわんばかりの顔をして言った。

「あ、ヒナギクさん、今日は遅いので、家まで送りますよ。」  
ハヤテがそう申し出た。

「あ、うん、じゃあ、お願いね。」  
ヒナギクは、内心の喜びを隠さずにはいられないくらいだった。

そして、送る道中、何を思いついたのか、ハヤテが、  
「そういえばヒナギクさん、」

「は、はい、えっと、なに？」

「もうすぐ生徒会の任期が切れますが、また、二期連続で生徒会長



をやるんですか？」

ヒナギクは、少し迷ったが、

「うん、やるわよ。」

そのとき、ふと、ヒナギクの頭には名案が浮かんだ。

（そうだ、ハヤテ君を生徒会に誘うことはできないだろうか？ そうすれば、ハヤテ君といられる時間も長くなるし、……。）

（よし、そうと決まったら、）

「ねえ、ハヤテ君。」

「何でしょうか？」

「あの、その、……い、一緒に、生徒会やらない？」

「え？」

「いや、あの、だから、よくハヤテ君、あの三人がこないとき、手伝ってくれたから、今度は正式にどうか？ っておもって。」

ハヤテは、迷った。

ここで引き受けて、お屋敷の仕事がおろそかにならないか、とか。マリアさんに聞いてからにしようとか。

しかし、なぜか、口が勝手に動いてしまい、

「いいですよ。」

と言ってしまった。

「え、ほんと？よかったあ、うれしい♪」

ヒナギクは上機嫌。

（やった、これで、ハヤテ君といられる時間が増える！）

その後、お屋敷に帰ったあと。

「あの、マリアさん、ちょっといいですか？」

ハヤテは、困った顔をして、マリアに聞いた。

「え、はい、いいですよ。どうかしたんですか？」

マリアは少し不思議そうな顔をしてハヤテに聞いた。

「あの、ヒナギクさんに勧められて、今期生徒会に立候補ことになったんですけど、大丈夫ですかね？」

マリアは、

（また妙なものぶら下げて帰ってきましたね。困りましたね。）  
と思いながらも、

「まあ、私は平気ですよ、ただ、ナギが……」

「あ、お嬢様にまだ話してないです。今から話してきます。」  
と、ハヤテはナギのところへ行くとした。

「待ってください、ハヤテ君。きっとハヤテ君にも何か理由があって立候補したのだと思いますから、ナギには私から話しておきます。」

「

「あ、は、はい。ありがとうございます。」

別に理由なんて、ないんだけどな、と思うハヤテだった。

（困りましたね、ハヤテ君は。どうしましょう。）  
マリアの悩みも増える一方だった。

続く

#### 4. 生徒会（後書き）

いつもと同じくです。

でも、少し展開が早いですかね？ぜひ皆さんの感想を聞きたいです。

## 5. **Mission**（こちらスネーク）（前書き）

今回は少し短いですが、許してください。

## 5. Mission（こちらスネーク。）

翌日。

ナギも、しぶしぶながらも、学校に来た。

「あゝナギぼん来たね〜♪」

「おゝ本当だ。さすがはヒナギク。」  
「そうだな。」

上から泉、美希、理沙。

「あ、皆さん、おはようございます。」

「ったく、朝からうるさいやつらだ。」

ナギはすでに不機嫌モード。

「にやゝ、ひどいよおゝ」

「みんなおはよう。ナギも来たね。」

「「ヒナ！」」

美希、理沙。

「ヒナちゃん！」

泉。

「「ヒナギク（さん）！」」  
ハヤテ、ナギ。

「まったく、なぜ学校なんかに来なければならないのだ！」  
ナギは相変わらず。

「もう、そういう事いわないの。」

キンコンカーンコン。

「はいはいはい、はじめるよ」

雪路も来た。

、とまあ、そんなこんなで時間が過ぎ、放課後。

「ハヤテ、帰るぞ！」

「はい、お嬢……、ん？」

プルルル、プルルル

「あ、マリアさん。もしもし。」

「ハヤテ君ですか？ お願いがあるんですけど。」

「あ、はい、何でしょう？」

「あの、またコーヒー豆を切らしてしまったので、買ってきてもらえませんか？」

「あ、わかりました。」

「ナギには帰ってくるようにいっておいてください。」

「はい。」

プツッ。プー、プー、プー、……

「どうした？ ハヤテ。」

「お嬢様は先に帰っててください。コーヒー豆を買ってくるので。」

「あ、そうか、わかった。気をつけるのだぞ、ハヤテ。」

「はい、わかりました。」

と言うと、ハヤテはコーヒー豆を買いにいつもの店に行った。

さて、ハヤテは無事、コーヒー豆を買いえるのか？

続く



## 5. Mission(こちらスネーク。)(後書き)

そういえば、本当に申し訳ないことに、誤植がありました。

美希↓美紀になってたり、

理沙↓里沙になってたり……、

直すついでに、少し話もいじったので、見ておいてください。  
本当にすいません。

## 6. Mission（こちらスネーク）舞台裏（前書き）

はい。最新話です

## 6. Mission ～こちらスネーク～舞台裏

ハヤテの行方も気になるが、とりあえず、sideナギ。

「帰ったのだ。」

「お帰りなさい、ナギ。」

「それにしても、学校は疲れる。」

ナギがいつものようにぼやきだす。

（まったく、またいつものが始まってしまいましたね。）

「だからといって、明日学校に行かない理由にはなりませんからね。」

マリアが釘を差しておく。

「うっ……。」

ナギがまたも、やられた、と言わんばかりの顔をする。

（そういえば、ナギに、ハヤテ君が生徒会に入る話、しなければいけませんねえ……。）

「ん、マリア、どうしたのだ？ そんな難しい顔をして。」

ナギは気がついたようだ。

マリアも、これ以上は隠せない、と思い、

「ナギ、よく聞いてください。」

「どうしたのだ？」

「ハヤテ君が、今期生徒会に立候補したいと言っているのですが……。」

「何だと、ハヤテが!？」

「はい、そうなんです。」

「ハ、ハヤテは、わ、私といたくないのか？」  
と半泣きのナギ。

ただ、マリアとしては、今回はハヤテ君に折れてもらいたくなかった。

それは、自分が生徒会長だったからかもしれないが……  
(理事長の陰謀を止めるのには、ぜひ、ハヤテ君に生徒会に入ってもらわないと……)

そう。いままで、散々その陰謀に振り回されたマリアにはよく分かる。

しかも、それは、ナギのためにもなる。

ただ……

「だめだ、絶対だめだ、ハヤテを生徒会になど!」  
とナギは許さない。

(しょうがないですね。これは、ナギに話しましょう。)

「ナギ、一回落ち着いて」  
マリアが諭すように言うと、

「うるさい！マリアは分かってな「落ち着きなさい！」」  
マリアが珍しく怒鳴った。

ナギはもちろん、驚いて口が開いたまま閉じない。

この間に言ってしまったなければ、と、マリアは口を開いた。

「実はですね、かくかくしかじかで……」  
以下説明略。

「……。そうだったのか。すまん、マリア。」  
話を聞いたナギもやっと状況が掴めたようだ。

「確かに、ヒナギクとハヤテが並んで、理事長に当たれば、災害スクリンプラーも止まるかもしれない。」

「やっと分かりましたか、ナギ。」  
マリアもホッとした。

（これで、少しは学園も平和になりますけど……ね。ハヤテ君がまた面倒なものをぶら下げて来なければいいのですけどね。）

やはりマリアは鋭い。第三話の件で、ヒナギクがハヤテのことを好きなのが分かったからだ。

（まあ、でも、ハヤテ君は鈍いから、しばらくは大丈夫でしょう。）

「マリア。ハヤテに、生徒会に入ってよいと伝えてくれ。」

「ナギ、自分で言いなさい。あなたの執事なんだから。」

「うっ、わ、わかった。」

ナギは最初あんなに暴れたのがバカバカしくて恥ずかしくならしい。

「だがマリア。」

ナギが真面目な顔で言う。

「ハヤテが生徒会に入ったら、その分、ハヤテの代わりに頑張ってくれ。ハヤテ、頑張りすぎて自爆すると思うからな。」

確かに、と思ったマリア。

「分かってますよ、ナギ。」

「お嬢様、私を忘れていませんか？」

「お、クラウド、生きてたのか。」

「あら、クラウドさん。いつ生き返ったんですか？」

クラウド、本名倉臼征史郎。

三千院家の執事長。

こんな扱いです。

いつも通り落ち込むクラウド。

さて、ハヤテは？

次回へ続く。

「つて、作者さん！しっかり書いてくださいよ！」

## 6. Mission（こちらスネーク舞台裏（後書き））

### 次回予告

「はい、マリアです。なんか次回予告をしろって言われました。次回、ハヤテのごとくは、ハヤテくんが、相変わらず不幸に……。慰めてあげてください。」



**7. Mission** ～こちらスネーク～今日は雨の替わりにタコが降りました。

ハヤテの行方です。

## 7. Mission（こちらスネーク）今日は雨の替わりにタコが降りました。

さて、その頃ハヤテは？

……と言うと……。

やっと店にたどり着いたものの、精神的に疲れていた。

側溝に落ちそうになった回数、24回、

ペンキをかぶりそうになった回数、19回、

タコが降ってきた（！？）回数、35回、など……。

「ふう、やっと店に着いた……。」

カランコロン。

「はい、いらっしやい。」

「あの、三千院家の者ですが。」

「あ、少々お待ちください。」

……。待つこと一分。

「お待たせしました。ありがとうございました。」

カランコロン。

終了。

（よし、後は無事に屋敷まで持っていくことだけだ！）

と思い、少し走って向かった。

さて、ハヤテは無事に帰れるのか？

そのとき。

ブーン、キイツ。

明らかに高級そうな車が、いや、高級な車が止まった。

「ハヤ太くん、ヤッホー♪」

「あ、瀬川さん、こんにちは。」

生徒会三人娘の一人、瀬川 泉。ソ〇ーの社長の娘。

「ねえねえ、そんなに急いでどうしたの？」

「いまからお屋敷に帰るところです。コーヒー豆を頼まれましたので。」

そういう瀬川さんこそ……、って、帰るところですよね。」

そう、実はもう空は暗いのだ。

「もちろん、帰るところ。あ、もしだったら、乗せてってあげるよ」  
♪

「あ、じゃあ、ぜひ。前みたいなことになるのも、困りますからね。」

」

前みたいなこと……。

そう、ミックスベリーミルフィーユカスターならぬアイスを買に行ったときの話。

（知らない人は、すぐに『ハヤテのごとく!! キャラクターCD 2nd series 4. 綾崎ハヤテ starring 白石涼子（GNCA-1224）』を購入だ!）

「あ、は、にはは、そ、そうだね……／／／」

あの時、泉は、なんと、

自分の部屋のベッドにハヤテを寝かせたのだ。

それを思い出した泉は夕日より紅く顔が真っ赤に染まった。

実は、あの日、ハヤテが帰った後、自分が寝るとき、そこにハヤテが寝てたと思うと、全然寝れなかったのだ。

「と、とりあえず、いこうか……／／／」

ハヤテは、どうしたのだろうか?とか思いながらも、

「では、失礼します。」

と言って乗った。

まあ、さすがに瀬川家の車の中で悲劇が起きる訳もなく、無事、お屋敷に到着した。

「ただ今帰りました。」

「ハヤテ君、ありがとうございました。大丈夫でしたか？」

「ま、まあ、それなりに……。」

マリアはすぐに勘付いたみたいらしく……

「ん〜と、すなわち、側溝に落ちたり、ペンキをかぶりそうになったり、タコが降ってきたり、みたいな感じですかね。」

……。驚異的洞察力。

「あ、あはははは……。そんな感じです。」

「まあ、お疲れ様でした。」

そこに……、

「ハヤテー、帰ってきたのか！」

ナギが走りながら来た。

「あ、そうだ、ハヤテ。生徒会のことだが、別に、いいぞ。」  
ナギが照れながら言う。

「え、いいんですか？」

ハヤテがびっくりして聞き返した。

「ま、あ、そ、その、とりあえず、頑張ってくれ。」  
お茶をにごす、ナギ。

「?、ま、また、ありがとうございます。」  
ハヤテは疑問に思いながらも、許可が降りたことに、少しホツとしていたり。

とりあえず、無事、お使いは終わったとき。

## 7. Mission こちらスネーク今日は雨の替わりにタコが降りました。

### 次回予告

「やつほ〜♪いいんちよさんだよ〜♪  
なんか、ハヤ太君に次回予告して、って頼まれちゃった。

次回、ハヤテのごとくは、『ある春の日のこと』だよ♪」

## 8, 春のある日のこと（前書き）

第一章の山場の説に入りました。



## 8、春のある日のこと

さて、そんな春のある日。

「じゃあハヤテ君、気をつけてくださいね。」

「はい……。」

と言いながら、ハヤテは二百万を持って屋敷を出た。

何があったのか？

まあ、簡単に言うと、

「し、しばらく恥ずかしくてハヤテの顔を見ることができないのだ  
……／＼／＼」

ってことをナギがしてしまい。

「まあ、そういうわけで、しばらく外に泊まってもらいたいのです  
が……。」

と言うことだ。

ただ、前回（2nd Season 第6話）、ハヤテは百万を1  
日で使い果たしてしまった。よってマリアは二百万渡したわけだ。

回想終了。

と言うわけで、

（今度こそ、使い果たさないようにしなくちゃ。）  
と思うハヤテだった。

だが、現実は甘くない。

P M 7・00、負け犬公園。

そこには、1人ベンチにぽつんとハヤテがいた。

今回の残金…49円

（……。前よりは成長したな……。）

そのとき、

タッタッタッタッ。

桃色の髪少女が、ランニングをしていた。桂ヒナギク、16歳。

「あれ、ハヤテ君、どうしたの？こんなところで。」

「あの、その、実は……。」

ハヤテはここに至るまでの過程をかいつまんで話した。

「……、なんか、前もこんなこと、なかった？」

ヒナギクは半ば呆れて言った。

「とりあえず、春とは言っても、まだ夜は冷え込むわよ。家において。」

と言ってヒナギクは、また、ハヤテを家に連れ込んだ。

場所は変わって、ヒナギクの家。

「ただいま、……。あれ？おかしいな、誰もいないわ。」

よくみると、メモが落ちていた。

そこには……

『ヒナちゃんへ

急なことに、1週間ばかり、出張に行くことになりました。

まあ、頑張ってるね。

P・S、あの離れは、ゴキブリ、シロアリ、その他もろもろが大  
量発生したから、しばらくは使えないって雪ちゃんに言っておいて  
ね。』

……。

（え、えっと、すなわち、ハ、ハヤテ君と、ふ、二人っきり……／＼

「どうしたんですか？」  
ハヤテが聞く。

「あ、なんかね、……。」  
ヒナギクがどもりながら、説明をする。

「あの、もし迷惑でしたら、一度お屋敷に戻りますけど……。」「  
ハヤテが少し困った顔で言う。

「い、いや、別に、迷惑とかじゃないわよ。第一、お屋敷に戻れないんでしょ？ だから、あの、その……。と、泊まっていきなさいよ。」

最後のほうはもはや顔を真っ赤にしてヒナギクは言った。

「そ、そうですか。わかりました。では、お言葉に甘えて……。」「  
とハヤテは家に上がった。

コポポポポ。コトン。

「ごめんね、すぐに出せるのが紅茶しかなくて。」

「いいえ、べつにかまいませんよ。」

ハヤテは紅茶でとりあえず一息つく。

「それにしても、相変わらず、ナギは気まぐれね。今回は何日間なの？」

そう、ハヤテは、ヒナギクには、ナギがハヤテに暇を出した理由を言っていない。

「えっと、……、一週間くらい、ってことだそうです。」

ヒナギクは半ば呆れていた。

「まったく、それで初日からあれじゃあ……。」

「ほんとにすいません。」

ハヤテは申し訳なさそうな顔をする。

「べ、別に、謝らなくてもいいわよ。困ったときはお互い様でしょ？」

「ヒナギクさん……。」

「あ、とりあえず、ハヤテ君、お風呂に入って体を温めておいでよ。」

「あ、はい、わかりました。」

つづく。

## 8, 春のある日のこと（後書き）

※「春のある日のこと」の間は、次回予告をお休みさせていただきます。

## 9、春のある日のこと（2）（前書き）

※作者急用のため、予約掲載にしています。あしからず。

## 9、春のある日のこと(2)

ハヤテは、風呂に入った。

カポーン。

「ふう、あたたまる。」

とハヤテがいつているとき……。

ヒナギクは食器を洗いながら、考え事をしていた。

(まだ寝る時間まで時間があるわね。なにしようかしら?)

(あ、でも、定期試験、そろそろわね。勉強教えてあげようかしら。  
)

「お風呂あがりました」

ハヤテがさわやかにあがってきた。

「服、大丈夫? お義父さんの服出しておいたけど。」

「あ、大丈夫でしたよ。ありがとうございます。」

「そう、よかった。じゃあ、私もお風呂入ってくるから、少し待ってて。」

「あ、はい、わかりました。」



そういつて、ヒナギクは風呂に入りに行った。

「もしもし、マリアさんですか？……はい、……まあ、そうでした。  
……あ、前回と同じでして、……はい、わかりました。」

ハヤテはとりあえず、前回のようなことを避けるために、マリアさんに電話をしていた。

そして、ヒナギクも風呂から上がり……。

「ハヤテ君、勉強の方は大丈夫？」

「あ、まあまあでして……。」「  
少しハヤテが困った顔をする。

「見てあげようか？」

「あ、お願いしてもいいですか？」

「いいわよ。」

ハヤテはうれしそうな顔をした。

「じゃあ、今日は離れは使えないから、私の部屋に行こうか。」

さて、ヒナギクの部屋は、  
その後、二人だけの空間となった。

そして、三時間後。

「ふう、じゃあ今日はここまで。」

「ありがとうございます、ヒナギクさん。」

「明日もしごくわよ。」

「お願いします。」

「あ、そういえば……。」

ハヤテが、ふと気がついたように聞いた。

「今日、僕はどこで寝ればいいのでしょうか・」

「あ、そうだった。でも布団とかないのよね。

うちはあくまで桂家の分家だから、お客様は本家の方にいくから、  
そういうものを置いてないらしいの。」

「え、じゃあ……。」

ハヤテは、まさか……と思って聞いた。

「うん、使えるのは私のベッドだけなの。」

ヒナギクは顔を赤らめながらいった。

「あの、だから、……」

い、一緒に、寝ない？」

しばらく沈黙が続いた。

二人とも顔は赤かった。

そして、ハヤテがくちを開いた。

「い、いいですよ。」

「へ？」

「あ、あの、ヒナギクさんと、その、い、一緒に寝ましょう。」

さらに、二人は真っ赤になった。

「じ、じゃあ、そうしようか。」

もちろん、ヒナギクのベッドは一人用。

それに二人で寝るということは、相当一人あたりの面積は狭い。

でも、ふたりは仲良く寝た。

ハヤテは、一分とたたずに、スースーと寝息を立てて寝た。

ところがヒナギクは……

（と、となりにハヤテ君なんて……／＼／＼）

そのとき、ふと思った。

（今なら、

抱きついても、ばれないかな……。）

そしてヒナギクは……

ハヤテに、抱きついた。

そして、そのまま静かに、寝た。

## 9、春のある日のこと（2）（後書き）

※「春のある日のこと」の間は、次回予告をお休みさせていただきます。

## 10、春のある日のこと(3) (前書き)

※作者急用のため、予約掲載にしています。あしからず。

## 10、春のある日のこと(3)

AM5..30。

「んゝ、ん？」

疾風は起きた。ヒナギクはまだ寝てた。しかも、ハヤテに抱きついたらまま。

ハヤテは、すぐに爆睡してしまったから、知らなかったわけだ。

(それにしても、ヒナギクさん、かわいいな……／＼)

完全に安心しきった顔で、ハヤテの胸の中で、スースーとかわいらしい寝息を立てながら、寝ている。

(これなら、もうすこし、横になっててもいいかな……。)

そして、AM6..00。

「んゝ、よく寝た。」

「おはようございます、ヒナギクさん。」

頭の上から声が聞こえて、見ると、ハヤテはもう起きていた。

「へ……あ、あ……／＼／」

(ハヤテ君より早く起きるつもりだったのに……／＼)

「い、いつから起きてたの？」

「5時半です。でも、あまりにヒナギクさんが、その……、か、かわいかったので、ついつい見とれてしまって……／＼／」  
ハヤテが珍しく耳まで真っ赤になっていた。

「あっ……／＼／」

（ハヤテ君がかわいって言ってくれた♪）

「じ、じゃあ、朝ごはんにしようか。」

ヒナギクは、赤くなりながら、そういった。

「そういえば、ハヤテ君、制服は？」

ヒナギクが聞いた。

「あ、大丈夫です。制服と執事服のスペアが二着ずつ生徒会室に……」

「どこに隠してんのよ……。」

相変わらずだな、と思うヒナギク。

「じゃあ、いきましようか。」

「うん♪」

そして、その後、校門には、朝から仲良く登校する二人の姿が。

もちろん、ナギは知るゆえもない。

チーン、ガラガラ。

「ハヤテ君、私の家に泊まっていることは秘密だからね。」



「わかってますよ、ヒナギクさん。」

と、二人でひそひそと会話していると、

「おはよう、ヒナに……ハヤ太君。朝から二人でどうしたのか？」

まさかの美希登場。

「み、み、美希、おはよう」

ヒナギクが動揺している。

「は、花菱さん、べ、別に、何もないですよ！」

ハヤテも動揺していた。

（本当にわかりやすいな、2人とも）

「そうか……。」

と、美希が意味ありげな返事をした。

もうすでに、このとき、

ハヤテの中では、時限爆弾のスイッチが入っていた。

もちろん、本人は知らない。

そして、ヒナギクはもちろんのこと、なぎ、マリア、三人娘、そし

て、

ハヤテ自身も驚く結果が来るとは、

———誰も予想していなかった。

続く。

## 10, 春のある日のこと (3) (後書き)

※「春のある日のこと」の間は、次回予告をお休みさせていただきます。

## 11. 春のある日のこと(4) (前書き)

すいませんでした、きょうから、またがんばります！

## 11. 春のある日のこと(4)

そして、屋敷に帰る前日の放課後、

2人はそのまま夕食などの食材を買いに行った。

「どうでしょうか？今日の夕食は。」

「んーと、また、カレーとか……。」「

少し顔を赤くして応えるヒナギク。

「わかりました、そうしましょう。」

といって、どんどん購入していく2人だった。

「じゃあ、帰りますか。」

「うん、あっ！」

ヒナギクが、しまった、という顔をする。

「どうしたんですか？」

「生徒会室にノート忘れちゃった……。一緒に取りに行ってくれる？」

ヒナギクが、申し訳なさそうにいう。

「いいですよ、行きましょう。」

ガーデン・ゲート  
時計塔に2人はついた。

「もう暗いですね。」

今はPM6:00。5月といえど、暗い。

「そうわね、とつとつすませて、早く行こうか。」

2人はエレベータに乗ると、生徒会室のある天球の間に行った。

ガサガサ。

「あっ、あった！」

ヒナギクが叫んだ。

「よかったですね！」

ハヤテも喜んで、その後、ふと思い出したように言った。

「そういえば、ここで調理できましたよね？」

ヒナギクは不思議ながらも、

「まあ、使えるわよ。」といった。

「じゃあ、ここで作って、ここで食べませんか？せっかくですし。」  
と、ハヤテが提案した。

「それもいいわね。」

とヒナギクも賛成した。

「じゃあ、作ってきますね。」

とハヤテは、足早にキッチンに向かった。

（たまには、何もしないで待ってみるのも、いいかもね。）  
と思うヒナギク。

そして、ハヤテのほうは？

ドキン……、ドキン……、

（ま、まただ……）

そう、最近になって、急に胸が苦しくなることが増えてきたのだ。  
だから、ここで食べていこう、といったわけだ。

ただ、そんなことで集中力を切らして、まずい飯を食わせるほど、  
三千院家の執事は落ちぶれていない。

何も気にせず、作ったとき。

そんな待っている間、ふとヒナギクは思い出した。

（そういえば、ひな祭り祭りのとき、テラスから外見たっけ……）

（もう一度、見たいな……）

そんなことを考えていると、

「ヒナギクさん、できましたよ。」

ハヤテが食事を持ってきた。

「あ、じゃあ、食べましょ。」

そういつて、食べ始めた。

食べながら、2人はいろいろと話をしていた。

ナギのこと、三人娘のこと、雪路のこと、剣道部のこと、そして、……、ハヤテのこと。

そして、2人とも食事を平らげ、話が落ち着いたとき、

「ねえ、ハヤテ君、ひな祭り祭りのときのこと、覚えてる？」  
ヒナギクが唐突に聞いた。

「もちろん、覚えてますよ。あの日は、本当にいろいろありましたからね。」

ハヤテが遠い目をしていった。

「あのさ、も、もう一度、あの風景、見たいんだけど……。」  
と、ヒナギクが少しうつむいていった。

ドキン……、ドキン……

「いいですよ、あのときのように、つかんでた方がいいですか？」  
ハヤテが、そう聞いた。

「うん、まだ少し、怖い……。」



「わかりました、行きましょう。」

そういつて、ハヤテはヒナギクを支えながら、テラスへ行った。

ドキン……、ドキン……

（本当に何なんだ、これ？）

そう思いながら、テラスに出た。

「わぁ、やっぱり、きれい……」

ヒナギクは、感動のあまり、涙を流していた。

「どうしたんですか？ヒナギクさん。」

少し涙声になりながら、ヒナギクは、言った。

「あの日、ハヤテ君が私に気づかせてくれたこと、思い出したら、なんか、涙が、止まらなくて……。」

ドキン……、ドキン……

ヒナギクは、ハヤテのほうを見て、言った。

「あの時、ハヤテ君は、私に、大切なものは、すぐ近くにあるものだって、教えてくれたわ。そして、幸せも、……」

そういうと、ヒナギクは、涙が溢れ出し、

ハヤテの胸に顔をうずめた。時折、嗚咽を漏らしながら。

ドキン！

そのとき、

ハヤテの心の中で、

時限爆弾が、爆発した。

そして、

ずっとロックされていた、ハヤテの心が、

ロックが外れて、現れた。

そして、ハヤテは、気がついた。

この胸の苦しい感じ、それは、

——恋であること。

そして、

綾崎 ハヤテは、

——桂 ヒナギクのことが、

好きだ、ということに。

そして、それは、

彼の、本当の物語の幕開けであつた。

## **11. 春のある日のこと(4) (後書き)**

※春のある日のこと、の間は、次回予告をお休みします。

## **12. 春のある日(5)、変化(前書き)**

春のある日 シリーズクライマックス！

## 12. 春のある日(5)、変化

ハヤテは混乱していた。

あのと、ヒナギクの家に帰って、それぞれ風呂に入って、寝た。

ヒナギクは、早くも寝付いた。

しかし、ハヤテは起きていた。

現れた自分の感情に、混乱しているのだ。

でも、何度自分の心に問うても、

……、自分は、ヒナギクさんのことが、好きらしいのだ。

実際、そう思って、ヒナギクを見ると、ドキドキしてしまう自分がいる。

(恋、か。もう二度としないと思っていたんだけどな……。)

そう、もう二度と。

そう決めたのは、アーたん(天王州 アテネ)に王族の庭城を追い出された、あの日。

そうして、ハヤテは、心にロックをかけた。

「恋愛」という感情を、人を愛する、という感情を捨てて、そのよ

うな感情に対して、鈍くした。

そして、そのロックは、今まで、何があっても外れることはなかった。

たとえば、西沢さんが抱きついてきても、告白されても。

しかし、外れてしまった、いや、壊れてしまった。

ハヤテは、その心を再びロックすることができない。

――実は、ハヤテの心がロックされた原因は、

アテネが、感情が高まったときに、神様の真似事をしていた、アテネが、本意にも、ハヤテを洗脳したかのように、心にロックをかけてしまったのだ。

ところが、ヒナギクは、そのロックを解き放った。

ハヤテも、疲れて、そのまま、眠りについた。

2人、抱き合ったまま。

ピピピピ、ピピピピ、



「ん、朝だ。」

「ん、今日もよく寝た。」

その瞬間、2人はお互いに、お互いを抱きしめていたことに気がついた。

「「あっ……／＼／＼」」

朝から二人そろって、耳までまっかつか。

とりあえず、朝食を食べよう、ということになって、ハヤテは、自分の体の変化に気がついた。

心が、読めるのだ。あの、鈍いハヤテが。

（昨日の、後遺症かな？）

場面は変わって、学校。

席に座っていると……、

「やっほ、ハヤ太君♪」

「おはよう、ハヤ太君。」

「おはよう、ハヤ太君、なんか変だぞ、」

上から、泉、理沙、美希。

「おはようございます、皆さん。」  
ハヤテは、普通に挨拶した。

「そういえば、ここのことろどうしたの？」  
泉が聞く。

「へ？何がですか？」

「だって、ナギポンこないし、最近ヒナちゃんと一緒にいること多いし……」

（や、やばい、なんて答えよう……）

とあせっていると、

プルルルル、プルルルル

「あ、電話だ（誰だか知らないけど、ありがとう）。」  
といって、抜け出した。

相手はマリアだった。珍しく、声が動揺している。

「ハヤテ君ですか、実はですね、帝おじいさまが、お話があるそうなのです。」

ハヤテは腰を抜かした。

「え、えええ！？何ですか！？」

「いや、おじい様は、『大至急、綾崎ハヤテを、本宅につれて来い』

としか。とりあえず、すぐにお屋敷に戻ってきてください。」

「わっ、わかりました！」

そういうと、電話を切って、一応委員長の泉に事情を話して、屋敷に戻った。

## 12. 春のある日(5)、変化(後書き)

次回予告!

「はいはい、瀬川泉で〜す♪  
それにしても、ハヤ太君、どうしたんだろう?

さて、次回、ハヤテのごとく、ヒナギクのごとく、は、  
『変化(2)』です。  
ここで、いろいろな真相が明らかに!」

### 13. 変化(2)

ハヤテは、三千院家のへりの中にいた。  
―首には王玉を下げて。

少し時間を戻して、屋敷にて。

「ただいま戻りました、どういふことですか、マリアさん！」  
ハヤテが、息を切らせながら、聞いた。

「ハヤテ君、時間がないので、すぐに、はっきり答えてください。」

「最近、何か、体、もしくは思考などに劇的な変化はありましたか？」

マリアが、珍しくとても真剣な表情で訊いた。

「……、いま、お嬢様は？」

「ハヤテ君の口から何が出てくるかわからないので、咲夜さんのお屋敷においていきました。」

「そうですか、わかりました。実はですね、……。」「  
といって、昨夜のことを話しはじめた。」

マリアは、全部聞くと、沈痛な表情をしながら、  
「……、私としては、微妙な心境ですね……」

といって、

「ならば、必ず、王玉を持っていってください。」

「？、わかりました。」

ハヤテは不思議な表情をした。

ハヤテが準備に行った後、マリアは、

（だから、おじいさまが、本宅につれて来いっていったんですね…  
…）

そう、実は、この王玉、

帝は、「これを綾崎ハヤテから奪ったものは、遺産を……」  
といったが、

―真っ赤なうそ。

そもそも、帝は、王玉をハヤテから奪えるものはいない、と踏んでいた。

しかも、いくつもの王玉のうち、2つだけ、本物があるという。

ハヤテのは、……まぎれもなく、本物。

本物の光を失っていない王玉は、3つの効果がある。

1、王玉の呪いにより、不幸を呼び寄せる。

2、王玉自体の効果として、不幸、試練を与える。

そして、……

3、もうひとつの、光を失った王玉の持ち主の洗脳を、ひとつだけ、与えられる。

そう、

当然、白皇学院の理事長がアテネで、その理事の中に、帝がいて、そこにつながるがないわけではない。

もうひとつの、光を失った王玉の持ち主は、帝。

しかし、帝の予想しないことに、

1、の呪いは、消された。鷲ノ宮伊澄によって。

その証拠に、ハヤテの王玉には、紋章が入っている。

そして、3、の帝がかけた（というよりは、実質上、アテネのかけた）洗脳も、昨日、解けた。

―ヒナギクによって。

ハヤテはまだ気がついていないが、その証拠として、青く透き通る王玉の光は、さらにまして、輝いている。

そして、本宅、帝の部屋。

「おお、よくきてくれたの。」

帝が、硬い表情で言う。

「で、来たばかりで悪いがの、少し王玉を見せてくれんかい。」

「あ、はい。」

というと、帝に渡した。

「……、そうか、おぬしはやはり、すごいな。正解だった。」

「へ!？」

ハヤテが、わけがわからない、という顔をする。

「とうとう、話すときが来たようだ。」

といって、帝は、王玉について、ハヤテに話した。

「……、そうだったんですか。」

ハヤテも真剣な表情だった。

「さっき、王玉を渡してもらっただろう、そのときに、もう一度、洗脳をかけたんじゃない。ところがのう、」

帝は、重々しく、

「かからんのじゃ。」

「だがら、わしは、お主はすごい、といったのじゃ。」

ハヤテは、なんと答えればいいのか、わからなかった。

「他の遺産相続候補には言っておく。お主らの負けだ、とな。」

そして、帝は笑顔になってこういった。



「お主が、執事としてあの屋敷にいる限り、わしの遺産は、ナギに与えるでしょう。」

さらに、

「そして、綾崎。自分に自身を持て。お前の人生は、これによって、これからは、充実したものになる。」

「ただし、」

真剣な表情に戻って、

「後一個だけ、試練が残っている。それは、お前の苦手を克服することだ。」

まあ、洗脳も解けたし、簡単だと思うが、と帝は言った。

「今後は、好きにわしに電話をするがよい、綾崎。」

そういうと、帝は、ハヤテに王玉を返し、帰ってよい、と言った。

### 13. 変化(2) (後書き)

#### 次回予告

「花菱美希だ。

次回、ハヤテのごとく、ヒナギクのごとくは、

『変化(3)』だ。楽しみにしておくといいぞ。」

## 14. 変化(3)

ハヤテはマリアと話をしていた。  
帝に言われたことを。

「やはり、そうでしたか。先程、咲夜さんから、『借金執事にありますが、と伝えています』とお電話がありました。」

「ただ、ハヤテ君、気をつけてくださいね。」

「へ？」

ハヤテは不思議そうな顔をした。

「おそらく、ギルバードさんは大丈夫だと思いますが、世の中には、ハヤテ君を殺せば、遺産は……っていう人もいますから」

「……、分かりました。」

改めて、決意を固める。

そのとき、

ガチャッ。

「おー、ハヤテ、久しぶりだな。」

ナギが帰ってきた。

「お嬢様、お久しぶりです。元気になさっていましたか？」

「もちろんだ、あ、そうだ、ハヤテ。」

ナギが真剣な表情になって、

「遺産の相続が決まったそうだな。ありがとう。」  
とナギが礼を述べた。

「お嬢様、顔を上げてください。」  
とハヤテが言った。

「僕も、改めてお嬢様にお願ひしなければならないことがあるんです。」

それを聞いたナギは、一人妄想に走っていた。

(な、なんだと……／／まさか、こ、告白……／／)

すると、マリアが、

「ナギが、何を考えているかは容易に想像できますが、違いますよ。」

とこっそり言った。

ハヤテはこう言った。

「遺産をお嬢様が相続する条件は、僕を執事として、雇っているかぎり、だそうなんです。なので、」

と言って、ハヤテは正座をして、

「至らないことも多く有ると思いますが、何があっても、貴女の命は僕の命をかけてお守りします。以後も、僕を三千院ナギお嬢様の執事として雇ってください。」

と土下座をした。

ナギも、マリアも焦っていた。

「そ、そんな、土下座なんか、しなくても、なあ、マリア。」

「そ、そうですよ、ハヤテ君、ですよ、クラウドさん。」

クラウド登場。

「もちろんだ、綾崎。」

ハヤテは、クラウドさんを見上げた。

「く、クラウドさん？」

「おまえは、お嬢様をしっかり守ってくれた。だから、こうして遺産の相続も決まった。これで、お嬢様の生活も安泰だ。もう、おまえを追い出すことはない。」

そこで、マリアも、

「もちろんですわ、たとえばハヤテ君が誰かと結婚しても、ね。」

もちろん、マリアは、ヒナギクと、という意味で言ったのだが、ナギはてっきり自分のことかと勘違いして顔を赤くする。

ハヤテは、

「ありがとうございます！」

と、泣きながらお礼を言った。

その首には、とてもきれいに輝く王玉が、さがっていた。

そのとき、

ピンポン、

「あら、お客様、……、あ、ヒナギクさんですね。」

「ヒナギクだと？」

ナギが不思議そうな顔をしている。

「まあいい。客間に通してやれ。」

「ナギ、ききたいことがあるんだけど、今日どうしたの？」

ヒナギクは皮張りの高級ソファーに座るや否や、聞いてきた。

「ああ、ちょっと、ハヤテが帝の爺さんに呼ばれてな、本宅に行っていた。」

とナギが説明する。

「あ、そうだったの、よかった、無事で。」

ヒナギクがホッとしていた。

「ん？なぜだ？」

「いや、だって、ハヤテ君が、すごく急いで屋敷に帰るって聞いたから、てっきり、ナギの身に何かあったのか、って思っちゃって。」

「心配するな、この通り、ピンピンしている。」  
とナギが言うと、

「なら、明日からはちゃんとまた来るわね？」  
とヒナギク。

「も、もちろんだとも！」  
もはややくそのナギ。

それを見ていたマリアとハヤテは笑っていた。

これで、屋敷とナギ達に平和は戻った……のか？

そして、ヒナギクが帰るときにこっそりマリアに、ありがとうごさ  
いました、といったのは、また別の話。

つづく

## 14. 変化(3) (後書き)

### 次回予告

「ヒナギクよ。

さて、次回、ハヤテのごとく、ヒナギクのごとくは、『高校生の宿命』わよ。新シリーズ突入！お楽しみに！」



## 15. 高校生の宿命

AM 4..00。

「ん、ふう。」

執事の朝は早い。ただ、最近は妙に早起きになった。

そう、ハヤテには定期考査（もとい定期試験）が近づいてきている。

（このままだと、まずいかもな……）

そして、マリアに見事朝から、まさにそのことでつつかれた。

「そういえば、ハヤテ君、考査近いですけど、大丈夫ですか？」

「うっ……。」

ハヤテが、やられた、という顔をして、

「あまり……、芳しくないです。」

マリアが、やっぱり、という顔をする。

「じゃあ、また今回も5日ばかり、仕事は休んでいいですから、その間に、勉強してください。」

「わ、わかりました。いつもすいません。」

すると、マリアは、

「謝るくらいなら、結果を出さなくてはいいけませんよ。」  
と言った。

「わ、わかりました……。」

ハヤテの運命やいかに？

まあ、それはさておき、学校。

「もう、桜が散っているぞ、ハヤテ。」

「……、お嬢様がお休みしている間に、とっくに葉桜になりましたよ。」

ハヤテが苦笑いする。

するち、

「あ、ナギぼんだ♪」

「やっときたな、まったく。」

「ハヤ太君も帰っちゃうしな。」

生徒会三人娘、登場。

「あ、おはようございます。その節はすいません。」

「まったく、相変わらず、うるさいやつらだな。」  
ナギは不機嫌に。

「まあまあ、そう言わずに」

そこで、美希が、

「そういえば、時にハヤ太君、確か、生徒会に立候補するんだよね？」

と聞いた。

「そ、そうですけど、どうしたんですか？」  
とハヤテ。

「ヒナギクが読んでいたぞ。今日は立候補受付の日らしいからな。」  
と美希。

「あ、はい、わかりました。」

そこに、ナギが、

「そういえば、お前らは立候補しないのか？」  
と聞いた。

すると、理沙が、

「ふふふ、よく聞いてくれた。」

（聞くんじゃなかった）と思うナギ。

「もちろん、「立候補するさ！」（♪）」

「あ、そうなんですか、お三方もがんばってください。」  
とハヤテは、言い残して、教室に行った。

「大丈夫なのか、お前ら。」  
ナギは疑問形だ。

「「もちろん!」」

「だって、わたしたち、生徒会役員枠ではいるからね♪」

「選挙など、気にしないでいいのさ!」  
と、泉、理沙。

「んん?じゃあ、ハヤテは?」

「あれ?ナギぽん知らないの?」

「ハヤ太君は、副会長だよ。」

そして、そのハヤテは、ヒナギクさんと立候補の受付に行っていた。

「ハヤテ君、最後にもう一度確認するわよ。いいの?副会長で。」

「もちろんです、ヒナギクさん。」

「そう、じゃあ、行きましょう。」

受付も終わり、

「じゃあ、ハヤテ君、お互いがんばりましょう♪」

といって、笑顔になった。

「は、はい、ヒナギクさん。」

笑顔がかわいくて、一瞬見とれたハヤテだった。

そして、ふとヒナギクが聞いた。

「そういえば、ハヤテ君、考査大丈夫？」

ハヤテは沈痛な表情になって、

「朝、マリアさんにも大丈夫か、って言われました……。」「と肩を落とす。」

（まったく、もっと自信もっているのに……）

「と言うことは、休みもらえたのね？」と聞く。

「あ、はい。テスト前5日間だそうです。」

「なら、教えてあげる。」

「え、本当ですか！ありがとうございます！」とハヤテはうれしそう。

（そんな笑顔見せられたら、こっちまでうれしくなっちゃおうよ……。）

と思うヒナギク。

「あ、マリアさんですか？ヒナギクです。……、あ、あの、ハヤテ君の勉強を見ることになったんですけど……、あ、はい、ありがとうございます。」

そのあと、ヒナギクはマリアさんに電話していた。

さて、何があった？

つづく。

## 16. 高校生の宿命(2)

そして、その日の夜。

「ハヤテ、紅茶を持ってきてくれ。」

「はい、お嬢様。」

コトリ。

ゴクン。

「ふう〜、あ、ハヤテ。マリアから聞いたぞ。テスト前5日間は、勉強に専念してくれ。」

とナギ。

「あ、ありがとうございます。」

「さて、私は寝るとするか。」

「では、お嬢様、おやすみなさい。」

……。

「ナギは寝ましたね。」  
背後にはマリアが。

「ま、マリアさん!」

「先ほど、ヒナギクさんから電話がありまして、勉強はハヤテ君の

部屋まで来てくれるそうなので。」

「あ、は、はい。わかりました。」

そこで、マリアは唐突に、

「ヒナギクさんには、いつ気持ちを伝えるんですか・」

もちろん、ハヤテはびっくりして、顔を赤くして、

「へ、え、い、いきなり、何ですか？」

マリアはくすつと笑った。

（まったく、いじりがいがありますね。）

「で、どうするんですか？」

「……、テストが終わった日の午後、しようと思います。」

「そうですか、頑張ってくださいね。」

そういうと、耳まで真っ赤にして、部屋に足早に走り去っていった。

（でも、困りましたわね。）

そう、もちろん、ナギはハヤテと相思相愛だと思っている。

（ま、そのときに誤解を解けばいいのですかね？）



（でも、ハヤテ君まで恋をしてしまいましたか……。）

マリアは、「灰色の青春」をこのまま送ってしまうのか……と思うと悲しくなってきた。

そして、テスト5日前、学校が終わって……。

「ハヤテ、私は今日から放課後ワタルの勉強を見てやらなければならぬから、先に帰っててくれ。」

「あ、はい。」

そういうと、ナギは図書館へ行った。

「ハヤテ君。」

「あ、ヒナギクさん！」

「じゃあ、私たちも勉強しようか。」

「そうですね。」

というと、2人は屋敷へ向かった。

場所は変わって、屋敷のハヤテの部屋。

「じゃあ、始めるわよ。」

「お願いします。」

そうして、ハヤテはヒナギクに教えてもらいながら、勉強をしていた。

そして、図書館でやっている二人も、よろしく勉強していた。

……3時間経過。

「そろそろ休もうかしら。私がそろそろ限界。」  
とヒナギクが伸びをした。

「じゃあ、そうしましょう。」

とその時、

コンコン。

「マリアです。」

ガチャッ。

「そろそろ休んだらどうですか？」

「ちょうど、今、休もうか、ってはなしをしていたところです。」

「あら、じゃあ、丁度よかったですね。」

といって、紅茶とおにぎりを持ってきてくれた。

「あ、ありがとうございます！」

「じゃあ、お二人とも頑張ってくださいね。」

と言って、マリアは戻った。

「ふゝ、落ち着くわね。」

「そうですね。」

2人はリラックスしていた。

「それにしても、ハヤテ君、覚えるの早いわね。」  
とヒナギクが感心したように言う。

「そうですか？」

「うん、だって……、」

というと、ヒナギクはハヤテのノートを持ってきて、

「ほら、だって、昨日は、高次方程式、こんなにひどかったのに、  
ペラッともくって、さっきやったところを開くと、

「さっきなんか、私が5回やってやっとできた発展問題、1回で  
きたじゃん。」

そういわれると、ハヤテは、

「いや、それは、ヒナギクさんの教え方がいいからですよ。」

と言うと、

「お、おだてたって、何も出てこないわよ／＼／＼」  
と、照れ隠し。

（また、そういうところもかわいいな……）

とか思うハヤテだった。

続く。

## 16. 高校生の宿命(2) (後書き)

### 次回予告

「あ、やっとつきました。えっと、鷺ノ宮伊澄です。

次回、ハヤテのごとく、ヒナギクのごとくは、『高校生の宿命(3)』です。」

## 17. 高校生の宿命(3)

そして、さらに時間が過ぎて、PM6:30。

2人は勉強していると、

コンコン、

「マリアです。」

ガチャッ。

「そろそろお夕食の時間ですけど、どうしますか？」  
とマリアが聞く。

「あ、じゃあ、そろそろ。ヒナギクさんはどうしますか？」

「へ、わ、私!？」

ヒナギクは突然話を当てられて、困っていた。

「ヒナギクさんも召し上がったらどうですか？」  
と、マリア。

「じ、じゃあ、そうします。」  
と、ヒナギク。

「じゃあ、さっきナギも帰ってきたことですし、食べますか。」

「はい。」

といって、食堂に向かった。

食堂にはいると、すでにナギは待っていた。

「あれ、ヒナギク、なぜいるのだ？」

すると、マリアが、

「ヒナギクさんには、ハヤテ君の勉強を教えてもらっているんですよ。」

「マリアが教えられるいいではないか。」  
と反論すると、

「じゃあ、ハヤテ君と私の代わりに、爆発オチのロボを雇いますか？」

とマリア。

「そ、それは嫌だな……まあ、やむおえないか。」  
とナギが、しょうがない、といわんばかりの顔をする。

「ただし、」

といって、ヒナギクに顔を近づけ、

「ハヤテの身に何かあったら、ただじゃあ、許さないからな。」  
といった。

「わ、わかってるわよ。第一、私が、そんなことするわけないですよ？」  
とヒナギク。

「まあ、それもそうだな。」

というと、ふと、そういえば、といって、

「それなら、ヒナギク。せっかくだから泊まっていくとよい。その方が楽だろう。」

と言った。

すると、ヒナギクが何か言う前に、

「そうですね、じゃあ、もしだったら、必要なものをすべてこっちに持ってきてましょう。」

とマリアが言った。

(たぶん、ヒナギクさんが答えると、自爆しますね……)

「あ、は、はい。じゃあ、持ってきます。」

とヒナギク。

「あ、じゃあ、僕も手伝います。」

と言って、二人は食べ終わると、荷物を運び始めた。

そして、荷物をすべて運び終わると、……

「ヒナギクさん、ちょっときてください。」  
とマリアが呼んだ。

「はい、何でしょうか？」



「どちらで寝ますか？」

そういうと、ヒナギクは顔を赤くして、

「あ、えっと……。」「

マリアは笑顔で、

「ハヤテ君の部屋で寝ますか？」

「……、いいですか？／＼／＼」

「いいですよ。じゃあ、勉強、がんばってくださいね。」

「は、はい……。」「

と言うと、ヒナギクは、煮え上がった。

結局、二人は、12…00間で粘り、そして、寝た。

それは、いつだかヒナギクの家で見た光景とまるで同じだった。

ピピピピ、カチッ。

AM4…00、ヒナギク起床。

（ハヤテ君、まだ寝ている。起こさないよね。）

「ハヤテ君、ハヤテ君。」

「んー、あっ、おはようございます、ヒナギクさん。」  
ハヤテは眠そうな目をこすりながら、いった。

「よし、走るわよ。」

「はい。」

さて、なぜ二人は走るのか？それは、昨日寝る前に交わされた会話にあった。

「でも、こう5日間も仕事をしないと、体がなまりそうですね。」  
と、ハヤテがいう。

「そうねえ、わたしも、どうしようかしら……、あつ、そうだ！」  
ヒナギクがポン、と手を打つ。

「朝早く起きて走る、なんてどう？朝から走れば、頭の回転も、よくなるし。」

と、提案した。

もちろん、ハヤテは賛同し、朝4…00に起きることになった。

マリアは、2人が走っている様子を、朝食を作りながら、窓からみていたとか。

（まったく、ハヤテ君は……ナギがみたら、なんていうでしょうかね……。）

と思っていた。

AM6:00、  
2人は走り込みを終えると、ヒナギクはシャワー、ハヤテは部屋に行った。

そして、ナギが起きたのは、さらに1時間後。2人のことは知る由もなし。

そして、3人は、そろって学校に行った。

そのころ、桂家では、  
お義母さんがほほえんでいた。

（ヒナちゃんも青春ね。この様子だと、出張中に連れ込んだのかな？）

と、外見からはわからない鋭い洞察力で（？）ヒナギクの行動の分析をしていた。

（まったく、雪ちゃんもお酒を飲む前は、ヒナちゃんと同じくらいかわいかったのにね……。）

と、少し残念がっていた。

そして、花菱家では、  
美希が頭を抱え込んでいた。

（政治家の娘だから、調べるのは得意だが……）

はあ、とため息をついて、

（この情報は、いくら何でも苦しいかな……）

報告書には……

―桂ヒナギクと綾崎ハヤテについての報告書

隣には、至急、という赤いはんこが。

つづく。

## 17. 高校生の宿命(3) (後書き)

※今回は、次回予告をするとネタばれになるので、いたしません。

## 18. 高校生の宿命(4)

そして、時間は飛び、テスト当日。もとい、1日目。

ハヤテは、今までにないくらい意気揚々と学校へ行った。

それは、昨夜、最後のつめをしていたときのこと。

「うん、大丈夫ね。」

とヒナギクは笑った。

「だ、大丈夫ですかね……。」

とまだ、ハヤテは心配していた。

「大丈夫わよ。……でも、心配？」  
とヒナギクは聞いた。

「はい、少し、心配……ですね。」  
ハヤテは下を向きながらいった。

その瞬間、

ヒナギクは、後ろから抱きついた。

「へ!？」

もちろん、ハヤテはびっくりした。

「こ、これでも、不安？」

ヒナギクは聞いてきた。

「……、少し、安心してきました。」

というと、ヒナギクは離れた。

「ご、ごめんね、いきなり、その、だ、抱きついて……／＼／＼  
耳まで赤くなるヒナギク。

……、そんなことがあったわけだ。

もちろん、ハヤテにとって、そんなことをヒナギクさんにされて、  
――不安になど、なるはずがない。

ちなみに、ヒナギクは、しばらく（小一時間）悶絶していた。

キンコーンカーンコーン。

「開始！」

鉛筆で紙に書く音が空間を支配している中、

（おっ、解ける！）

ハヤテの頭は、珍しく、回転がよかった。

びっくりすることに、ハヤテは今回のテスト、ほとんどの教科で満点に近い自信があった。

ヒナギクの効果だろうか（笑）

2日目もそうだった。

そして、3日目、最終日前日の夜。

「ハヤテ君、ではどうですか？」

マリアが少し心配そうに聞く。

「大丈夫ですよ、ヒナギクさんのおかげもあって。」

と、ハヤテが珍しく自信を持って言った。

「当たり前だ、私の執事だ。できないはずがない。」

と、ナギが、自分のことでもないのに、威張りくさっている。

マリアは、ナギの言ったことは華麗にスルーして、

「そうですか、なら、明日は最終日ですから、気を抜かずにがんばってください。」

と、励ました。

「はい、ありがとうございます。」

そこで、マリアがふと思い出したように、

「明日の午後は、お休みにしますから、少し羽を伸ばしてきてください。」

といった。



「は、はい。」

そして、ハヤテは思い出して、顔を真っ赤にした。

「どうしたのだ、ハヤテ。顔が赤いぞ？」

ナギは本当に鋭い。そう思ったハヤテだった。

「いや、少し、血が上がっただけですよ。」

とごまかした。ナギは、疑り深く、探ったが、あきらめたのか、

「それじゃあ、私は寝る。」

といって、寝てしまった。

そして、3日目の最終日。

今日の教科は、数？、化学？。

それぞれ100分のテスト。

「開始！」

そして、問題をみて、びっくりした。

（この問題は、あのときやった高次方程式……）

ヒナギクも、

（あれ、この問題、確か、ハヤテ君が一発で解いちゃった高次方程式……）

と、気がついていていた。

……そうして、テストは終わった。

テストの結果なんかも、今日返ってくる。

なぜなら、スパコン並みの頭を持つ牧村主任がばらばらみて、どんな点数を言ってるってしまってるから。

というわけで、ハヤテもちろん、結果表が渡されたわけだが、それを、開いたとたん、ハヤテは叫びそうになった。

総合得点 1400点満点中、1330点。

順位 3位

「……へ？」

最初、ハヤテは叫びそうになった。どうにか抑えて、ヒナギクのところへ見せると、

「ハヤテ君、すごいじゃん、自信持ちなよ！」

そう、ハヤテは、ナギ、ヒナギクの次により成績を取ったのだ。

「これも、一概にヒナギクさんのおかげです。ありがとうございます。」

と、ハヤテはお礼を言った。

「いや、そんなこと、……」

といって、自分のしたことを思い出したヒナギクは、真っ赤っかに。

そこに、ハヤテが、

「それで、ヒナギクさん、これから、お暇ですか？」

「へ！？あ、う、ひ、暇だけど……」

「あの、お礼をしたいのですが、……」

「え、そんな、悪いよ……」

とヒナギクは少しきまりの悪そうな顔をしていたが、

「でも、僕の気が済まないんです。お願いします。」

というと、

「じゃあ、お言葉に甘えさせてもらおうかしら。」  
と、言って、

さっそく、出かけた。

ヒナギクは、とてもうれしそうだった。

続く。

## **18. 高校生の宿命（4）（後書き）**

※同じく、ネタバレ防止のため、次回予告はお休みします。

## 19. Garden Gate

「とりあえず、お昼をどこかで食べましょう。」  
とハヤテが言った。

（ち、ちょっと、これって、デ、デート!?／＼／＼）

ヒナギクは完全に心臓バクバクに。

「ヒナギクさん？」

「は、はいっ！」

「お昼、どこで食べますか？」

「あつ、うーんと……、あの店とか、どう？」

「あ、いいですね、そこにしましょう。」

そんなこんなで食事をしながら、

「このあと、どこ行って見たいですか？」

「うーん、い、一回、水族館に行ってみたい……な。」  
（いいわよね、これくらいの役得／＼／＼）

「そうですか、じゃあ、そうしましょう。」

食事を済ませたご一行は、水族館へ、あちこちよりながら、向かった。

本屋、ジュエリーショップ、CDショップ、ゲームセンター……ect

水族館に着いたのは、3時ごろだった。

チケットを買って、二人は入っていった。

中は、なぜかとても混雑していたが……

「ねえ、ハヤテ君、あれって、なんて魚？」

「あ、あれですか？あれは、ブラックバスですよ。」

「あれがブラックバスなの？本物は初めてみたわ。」

と言う感じで、二人はすでにMY Worldを形成していたり……

水族館を出るときは、ヒナギクはとても笑顔だった。思わず、ハヤテは顔が赤くなった。

「も、もう、5時なんですね。」

空は茜色に染まっている。

「うん……。 (もう、5時……か。)」

「ちょっと、夕日もきれいですし、そこの草原で少し休みましょう。」

そこは、川沿いの野原。

「うん、そうね。」

二人は草原に寝そべっていた。

「なんか、こうやって、空を見ていると、色々思い出すわね。」  
とヒナギク。

「そうですね。初めて会ったときは、まだ僕は白皇の生徒じゃなかったですね。」

「あ、そういえば、そうだったわね。しかも、一度、不合格になったしね。」

「あ、そういえば、そんなこともありましたね。」

二人は、そうして、思い出話に花を咲かせ、笑っていた。

そうして、夕日も沈んで、暗くなってきたころ。

「ヒナギクさん。」

「ん、どうしたの？」

「最後に、どうしても行きたいところがあるんです。いいですか？」  
ハヤテは真剣な顔をして、ヒナギクにそう聞いた。

「え、別にいいわよ。」

ヒナギクは、さっきまで話で盛り上がっていたこともあり、とても上機嫌だった。

そして、

「ハヤテ君、ここって、が、学校よね？」

「そうですよ。」

ハヤテは、さも当然かのように、学校に入っていく。

（何でだろう、忘れ物かしら？）

ヒナギクは、不思議でしやうがなかった。

チーン、ガラガラ。

白皇学院時計塔、ガーデン・ゲート 生徒会室 天球の間。

「どうしたの、生徒会室になんか。」



すると、ハヤテは笑顔で、

「ヒナギクさんに、とても大事な話をしたかったからです。」

「へ、へ!?!」

ヒナギクは、大事な話ってなんだろうと思案をめぐらせたが……

―わからない。

「こっちにきてください。また、しっかり支えていますから。」

と、テラスのほうに誘った。

「う、うん……」

といって、ハヤテに支えられながら、テラスに行った。

「さっきも、ここの話が出ましたね。」

「そ、そうね。(うっかり、ハヤテ君のことが好きなこと、漏らしそうになったけど。)」

「つい、一ヶ月前に、ココに来たとき、ヒナギクさん、言ったことを覚えていますか?」

と、ハヤテが聞く。

「うん、勿論覚えているわよ。」

「僕も、あの日、ヒナギクさんに同じことを教わりました。」

すると、ハヤテは、深呼吸をして、

「ヒナギクさん、こっちを向いてもらえますか？」

「うん。」

ヒナギクは、ハヤテのほうを向いた。

「ヒナギクさん、よく聞いてください。」

僕、綾崎ハヤテは、

桂ヒナギクさん、のことが、あなたのことが、……

す、

好きです！

その、ぼ、僕と、お付き合いしていただだけませんか？」

ヒナギクが、その言葉を理解するのには、少し時間がかかった。

そして、理解すると、

「え、へ、あ……／＼／＼」

顔を耳まで真っ赤にして、返答に困った。

「あの、ヒナギクさん、

で、できたら、お返事を頂きたいのですが……。」

とハヤテ。

ヒナギクも深呼吸をして、

（わ、ワタシも、言わなきゃ！）

「は、ハヤテ君、あのね、わ、私ね……、そ、そのね、

ず、ずっと前から、あ、あ、あなたのことが、その……

す、す、好き、です……／＼／＼」

すると、ヒナギクはハヤテに抱きついて、

「私、ずっと待ってたの……」

すると、ヒナギクは顔を上げて、

「わ、私でよければ、お願いします／＼／＼」  
と言うと、

―ハヤテのほうから抱きついてきた。

「ふえ、へ!?!」

「私でよければ、じゃないですよ、ヒナギクさん。

あなたじゃないと……だめなんです。」

そして、ハヤテは、

「ヒナギクさん、お待たせしました。こんな僕ですが、よろしくお願ひします。」

そういうと、二人は、抱き合った。

その眼下には、東京の町並みが、輝いていた。

―二人は、その瞬間は永遠のように感じた。

二人が離れたとき、ヒナギクが何かに気がついた。

「ハヤテ君、なにか、光ってない?」

「へ?、あ!」

そう、首から下がっていた王玉。取り出して、ト、とつつく。

すると、

パアアアアアアッ

その光は、四方八方に広がり、そして、その王玉は、  
青から、桃色になった。

（ああ、これが……）

そう、この瞬間、ハヤテは、王玉のすべてを解き放った。

「な、何があったの？」  
ヒナギクが、驚いていた。

「今日話すのには、時間がかかるので、今度でもいいですか？」  
それはそうだ。話すとしたら、生い立ちから話さなければならぬ。

「うん、わかった。」

そして、ハヤテと、ヒナギクには、新しい人生が、訪れた。

その後、しばらくして、時計塔ガーデン・ゲートの下では、二つの影が、ひとつになった。

## **19. Garden Gate (後書き)**

やっと、一章、終わりました！

ココまで、読んでくださり、本当にありがとうございます。

明日からは、第二章 急転 を投稿していきます！

## 1. **Misunderstanding** (前書き)

新章連載開始です！

しかも、今日は、ハヤテのごとく、新刊発売日。何という偶然でしょう！

## 1. **Misunderstanding**

2人は屋敷の前についた。

「じゃあ、ここで。さすがに、お嬢様がしびれを切らしているようなので。」

「うん……。」

もうちょつといたい、と思ったヒナギク。

「また明日。学校で。席も隣ですしね。」  
ハヤテは笑顔でいう。

「う、うん、わかった。また明日！」  
とヒナギクも笑顔で返した。

「ただいま戻りました。」  
とハヤテがいうと、

「ハヤテ君、すぐにこっちにきてください。」  
とマリア。

「え、でも、お嬢様にいいたいことが……。」  
とハヤテが言いかけると、

「いいから、早く……。」  
とマリアが言ったとき、



「おお、ハヤテ。帰ったのか。」  
すぐくタイミング悪くナギ登場。

「あ、お嬢様、あので「ハヤテ君!」」  
ハヤテが言おうとしたとき、マリアが止めた。

「私がいいと言うまで、口を閉じていてください。」

「そして、ナギ、すぐに部屋に戻りなさい。」  
と、マリア。その顔は、逆らうことを許さない、といっているようだった。

「わ、わかった。」

とナギはその強さにおおのきながら、戻った。

そして、ハヤテに向き直ると、

「とりあえず、私の部屋に行きましょう。」  
と、マリアは部屋にハヤテを連れて行った。

ガチャッ。

マリアは部屋に鍵を開けて、

「いいですよ、口を開けて。先ほどは怒鳴ってすいませんでした。」  
とマリア。

すると、ハヤテは、  
「なぜ、僕がお嬢様に、ヒナギクさんとつきあい始めたことを言っ

てはいけないのですか？」

マリアははあ、とため息をつく、

「やっぱりその話でしたか。」

というと、

「実はですね、ハヤテ君。あなたがお嬢様を誘拐しようとしたときのこと、覚えていますか？」  
とマリア。

ハヤテはうつ、という顔をしながらも、

「覚えていますよ。忘れるわけがないじゃないですか。」

「そのとき、ハヤテ君はナギにさらいたいとか何とか言ったそうですね。」

「は、はい。」

「それがですね、ナギが、愛の告白と勘違いしてしまったんですよ。」

「へー、そうですか、……って、ええええええええええ！？」

ハヤテがひっくり返るような勢いで驚いた。

「え、じゃあ、まさか……。」

ハヤテが青ざめる。

「はい、そのまさか、ナギはハヤテ君と相思相愛だと思っているん

ですよ。」

とため息をつきながら言った。

「ど、どうでしょうか……」

ハヤテが、冷や汗をかきながら青を通り越し、白くなった。

「ということは、ハヤテ君はナギと付き合う気も結婚する気もない、ということですね。」

とマリアが言うと、ハヤテは少し困った顔をした後、決然と言い放った。

「ないです。でも、その理由にヒナギクさんは関係ないですよ。」

マリアは驚いた。

「少なくとも、まだ僕は1億5680万4000円の借金をお嬢様から借りている身。だから、結婚するのは、金目当てみたいで……、いやなんです。」

ハヤテは顔を曇らせていた。

「おそらく、お嬢様は気にしないとおっしゃるでしょう。」

すると、マリアは

「そうですか……。」

（やっぱり、駄目でしたか……）

マリアはため息をつく。そして、

「でも、そういう理由があるのでしたら、私からすべてお話ししておきます。」

すると、ハヤテは、

「え、本当ですか？でも、少し心配なんですけど……。」「と、まだ不安そう。」

マリアも、

「そうですね……。」「と自信がなさそうだった。」

コンコン。

「ナギ、マリアです。」

ガチャッ。

「どうしたのだ、マリア。」

ナギは不思議そうに聞く。

「ナギ、今から私が話すことは、すべて事実です。落ち着いて聞いてください。」

「あ、ああ、わかった。」

そうして、まず、勘違いのことを話した。

話し終えたとき、ナギは泣いていた。

「そ、そうだったのか……。わ、私の、勘違い……。」「

それは、初恋があえなく散った瞬間だった。  
しかも、二度と振り向くことのない、恋だった。

マリアは、この後、さらにナギを苦しめさせるのがつらかった。

だが、言わなければならなかった。

「ナギ、私は、さらにナギを苦しめるようなことを言います。ごめんなさい。」

そういうと、マリアは深呼吸して、

「実はですね、ハヤテ君、ヒナギクさんと付き合うことになったそうなんです。」

ナギの開いた口がふさがらない。

「え、え、え、ひ、ヒナギクと？」

ナギは複雑な表情をしていた。

あれ、泣かないのか？と思っていると、

「なあ。マリア。私はどうすればよいのだ？」

少し考えて、マリアはこういった。

「ナギ、あなたには今、2つ選択肢があるの。  
一つは、ハヤテ君に幸せになってもらうこと。もう一つは、自分自身を幸せにすること。どっちがいいかしら？」

ナギは、

「そんなの、ハヤテが幸せな方がいいに決まっているではないかなにをいまさら……」

と即答。

「なら、答えは一つしかないわ。あの二人の交際を認めることしかないわ。」

と、マリアは言った。

「な、なぜだ？」

「2つめの選択肢は、帝様の力を使って、ナギと結婚させることです。確かに、ナギの願いは叶いますけど、ハヤテ君は、おそらく、幸せではないでしょう。」

うつむくナギ。沈黙が時間を支配する。

そして、

「じゃあ、認めよう」

とナギは言った。

「いいんですか？ナギ。」

「ああ、自分が好きな人が自分と付き合ったことで、不幸になるなら、結局、私にとっても不幸だ。」

マリアは、ナギは本当にハヤテ君のことを思っているんだな、と思っていた。

「じゃあ、ハヤテ君を呼んできましょう。」

とマリアは、ハヤテを呼びに言った。

ハヤテは、ナギの部屋に呼ばれた。

（やっぱり、駄目だったのかな……）  
と不安になるハヤテ。

そして、ナギの口からは……

「ハヤテ、ヒナギクと付き合っても、いいぞ。」

ハヤテは、一瞬、止まって、

「ほ、本当ですか！？あ、ありがとうございます！！！」  
という、ハヤテは土下座をして礼をした。

「ああ、そのかわり、ヒナギクを大切にしろよ。捨てたりなんかした日には、ただじゃあ許さんからな！」

「はい、もちろんです！」

「よし、じゃあ、もういいぞ。」

ガチャン。

こうして、二人は、無事、付き合うことになりましたとさ。

つづく。





## 1. **Misunderstanding** (後書き)

### 次回予告

「はい、ハヤテです。」

次回、ハヤテのごとく、ヒナギクのごとくは、『あらしのあさに。』  
です。ぱくりでないですよ。インスパイアですよ。」

## 2. あらしのあさに。 (前書き)

少し堅い話も含みます。

## 2. あらしのあさに。

そして次の日。

マリアさんの気遣いにより、ハヤテはお嬢様より一足早く、学校に向かった。

「ハヤテ君、おはよう♪」

「あ、ヒナギクさん、おはようございます!」

白皇学院校門前。まだ少し早いためか、ほとんど誰もいない。

「いこっか。」

2人は手をつないで、とりあえず生徒会室に向かった。

そのころ、美希は、例の報告を受けて、茂みに隠れて、ヒナギクとハヤテを観察していた。

そう、17話で受けた報告書、それは……

『2人は付き合う、若しくは付き合っている可能性がある』  
という内容だった。

「そういえば、ヒナギクさん。」

「ん、なに?」

「お嬢様にお話をしたら、一悶着ありましたが、許可をいただけました。」

「え、ほんと!? よかった、嬉しい♪」  
と、飛び跳ねて喜んでいた。

「じゃあ、安心して付き合ってくれるわね。」

「はい、もちろんですよ。」

美希は、その会話を聞いてしまった。

(な、なんだと!? ハヤ太君とヒナは付き合い始めたのか!?)

驚いてぐうの音も出ない。

(どうしよう、これじゃあ……、)

泉や理沙、特に泉には言えない。

(……。)

途方に暮れる美希だった。

ところが、有名人の、もしくは人気者の噂というものは、あっという間に広がるものだ。

そう、主に早く来ていたものたちによって広められてしまった。

「おい、今朝、桂さんと綾崎が手をつないで学校にきていたぞ!」

「え!?!? どういうことだ!?!?」

「まさか、あの二人、付き合っているのか!?!?」

そこに、まさかの『あの二人』登場。

もちろん、ハヤテ、ヒナギクにそれぞれ人が詰めかけて、真偽を確かめる事態に陥った。

2人は、こうなる事態をすでに予測していた。もちろん、答えも用意していた。

(「(ここで、認めておかないと、学校内で一緒にいられる可能性が減る!」)

というわけで、

―思いきって言ってしまおう、と決めていた。

2人が認めた瞬間、一瞬、クラスが静まりかえった。

そして、

「「「「「ええええええええええっ!?!?!?!?!?」」」」」

異口同音。まさにそんな感じだった。そのとき、

「おい、始めるぞ、あれ、どうした、みんな固まって。座れ」。担任の薫登場。

そういえば、雪路は、というと、副担任に理事長命令で降格。

というわけで、ハヤテ・ヒナギクネタは、流れた。

「出席とるぞ。あれ、瀬川は？また遅刻か、あいつは。」

「あれ、さっきいなかったっけ？」

その言葉を聞いた瞬間、美希は走り出した。

実は、泉はさっき、あの輪の中にいた。ハヤテの方に――きつと、ハヤ太君は否定するよね。そう思っていた。

だが、現実は違った。

2人が交際を認めた瞬間、泉はその輪から逃げ出した。

ここにも、初恋があえなく散ってしまった人がいた。

（ハ、ハヤ太君……。）

泉が泣いていると、

「泉。大丈夫か？」

美希だった。

「み、美希ちゃん、……ウーン」

泉は美希に抱きついて、大泣きした。

（泉、強くなれ……）

そう思う美希だった。

そして、泉は、涙がかれるまで、泣いた。

その日は、教室はいままでにないくらい荒れた。

ハヤテ、ヒナギクファンクラブ共々賛否両論で、まさかの、それぞれが二分する事態になった。

反対派は主に、ハヤテに抗議をしに言った。

「ハヤテ君、今日は落ち着いて帰れそうにないわね。」

「そうですね、どうでしょう……。」

と、二人はため息。

「あ、でも、ハヤテ君。今日から選挙運動の準備をしなければいけないわよ。」

と思いついたようにヒナギクが言った。

「あ、そうでしたね。じゃあ、生徒会室でしますか？」

「あ、そうね、そうしょうか。」

しかし、2人は大事なことを忘れた。

ファンクラブの力の強さ、さらに、ここは白皇学院で、お金持ちの集まりだと言うことを……。

つづく。



## 2. あらしのあさに。(後書き)

### 次回予告

「ワタルだ。

次回、ハヤテのごとく、ヒナギクのごとくは、『政治の縮図』だ。  
なんか、まさに昔の日本の政治だな、こりゃ、  
っというか、作者、早く俺も出せ！」

### 3. 政治の縮図

さて、放課後、2人は全速力で生徒会室に逃げ込んだ。

「「はあゝ、疲れた（ましたね）」」

といって、生徒会室に逃げ込んだ。

そんなこんなで2人が選挙活動の準備を始めていた頃……、

ヒナギクファンクラブ・綾崎撲滅派は、教室の片隅で、ひそひそと相談していた。

「どうするか？」

「こうなったら、あの作戦しかないだろう。」

美希は、それを聞いていた。

（ま、まずい、このままでは、ヒナも、ハヤ太君も……。）

共倒れ、する。

美希は生徒会室に急いだ。

バンッ！

「み、美希、どうしたの？」

ヒナギクが、美希の必死の形相に驚いた。

「2人とも、よく聞いてくれ。」

というと、美希の口から、とんでもない言葉が出てきた。

「ヒナのファンクラブのハヤ太君を撲滅しようとしている一派が、今度の生徒会選挙のために、選挙管理委員会・および票を金で買収しようとしている！」

「「は、はあ!？」」

「ど、どうしよう……」

美希が珍しく慌てている。

すると、

「なら、私には案があるけど。」

後ろを向くと……

「ち、……ちーちゃん、でも、ないわよ。」

ちーちゃん、はるかぜ ちはる春風 千桜。生徒会、書記。

ヒナギクは弱気になっていた。

「大丈夫ですよ、会長。とりあえず、私は役員を呼び出しますので、会長はその間に、生徒会の規約でも読んでいてください。」

ヒナギクははっと気がついた。

「ま、まさか……。」

千桜はニヤツと笑うと、

『白皇学院高等部生徒会より緊急連絡。生徒会役員は大至急<sup>生徒会</sup>天球の間に集合。また、学内捜査官は直ちに待機。』

学内捜査官、それは、いわゆる白皇学院の中の検察官。

東京地検特捜部長の師事をうけ、かつ、花菱 美希によって、身の上をすべてさらけ出されている人物。もちろん、卒業後はそのまま東京地検特捜部行きだ。

彼らは、生徒会役員の署名を持って効力を発する捜査令状によって、捜査をする。

過去の活動は、たった四回。すなわち、  
―特殊状況だ。

10分後、全員が集合した。

「これより、緊急会議を始めます。」  
ヒナギクが宣言した。

「さて、本日の議題。美希、お願い。」

「報告します。……。」

といって、報告を始めた。

報告が終わると、全員、驚いてあいた口がふさがらなかった。

「私が見た過去の議事録には、そのようなことはなかったと思われます。」

副会長、霞<sup>かすみ</sup> 愛歌<sup>あいか</sup>がそういった。

「私は、会長として、捜査官によって極秘学内捜査をすべきだと思うのだけど、みんなはどう思う？」

この提案に関しては、全会一致で可決。まあ、当然だ。

「で、ちーちゃ……、千桜から提案があるそうなのだけど……。」

すると、千桜は、立ち上がって、

「この事例を、生徒会規約生徒会役員選挙規定第52条の緊急事態として、全校生徒に対して、緊急事態宣言をすべきだと思うのですが、どうでしょうか？」

三人娘以外の役員が、ハッ、とした顔をした。

千桜は、頭を押さえながら、

「わかってない人が三人ばかりいるから、説明するね。」

そして、千桜は説明を始めた。

―生徒会役員選挙規定 第52条 緊急事態

次の条件をすべて満たす場合は、現生徒会は、新生徒会役員選挙を、『緊急事態』として、全校一斉による投票型ではなく、生徒会役員による指名型にすることができる。ただし、生徒会会長に関しては、現生徒会会長が再任することを原則とする。ただし、現生徒会役員の全会一致の可決を持って指名をする場合は、この他ではな

い。

1. 選挙において、暴動等公序良俗に反する行為が予測される場合。

2. 選挙管理委員会が何らかの理由により、公平・公正な選挙ができないとする場合。

また、この選挙に関して、学内捜査官が捜査に乗り出すような事態が発生した場合、無条件に緊急事態宣言を出し、同様の処置を行うことができる。

といったものだ。

千桜は説明を終えると、ヒナギクが、

「では、緊急事態宣言に関しては、報告があがった地点で決めます。選挙運動に関しては、『延期』とします。なお、今日の会合の内容は、生徒会役員全員に会長より、守秘義務を課します。以上、解散！」

その後、役員は三々五々と散っていった。

放送では、捜査官の待機解除命令を偽情報<sup>フェイク</sup>として流し、その後、捜査官長官に事情を説明して、捜査開始命令を下した。

それも終わり、

「ふう、疲れた……」

ガチャツ。

「ヒナギクさん、お疲れ様でした。」  
ハヤテだった。

「ハヤテ君……」  
そういつて、ヒナギクはハヤテにすべてを預けた。

「今日はいろいろありすぎましたから、このまま帰りましょう。」

「そうね……。」

ハヤテは、約1時間近く、生徒会室天球の間となりの部屋で待っていてくれたのだ。

ヒナギクには、その詮索しないで、ふんわりと包み込んでくれる感覚が快かった。

そうして、二人は、少し早く帰路についた。

つづく。

### 3. 政治の縮図（後書き）

#### 次回予告

……と行きたいところだが、展開がわかるので、省略。



#### **4. A state of emergency (前書き)**

今日で、一時投稿を停止します。皆さん、申し訳ない。

次の更新日は、12月1日以降3日以内にします！

どうか、皆さん、私の成績が上がるように応援してください（笑）

ちなみに、今日、私、誕生日なんです！

なんてタイミングがいいのでしょうか！

そんな感じです。

#### 4. A state of emergency

捜査の報告は2日後の朝になされた。

「異常なしでした。」

敬礼しながら、はっきりと捜査官長が言った。

「「「「は!?!」」」」

全員が口を開けてぽかんとした。

―美希をのぞいて。

その捜査官長はというと、ニヤリとして、

「それでは、失礼します。」

といって出て行こうとしたとき、

「おい、お前。私が最初にお前に聞いた質問は何だった?」

美希が、人を殺せるのじゃないだろうかという目で、彼をにらんだ。

「は?何のことやら……」

と言うや否や、

「ヒナ、偽物だ。捕獲。手加減なんかするな。」

と美希が容赦ない指令。

ヒナギクはむだのない動きで木刀・正宗を召還。そして……

「面―!」

バシッ！

直撃。そこから出てきたのは……

「……東宮の坊ちゃんか。ヒナ。ハヤ太君経由で野々原さんをよんでくれ。」

「わかった。美希、後をよろしく。」

と言うと。ヒナギクは、あっという間に消えた。

そして美希は……

おもむろに携帯を出して、操作して……

「もしもし、こっちになぜか偽物の長官がきた。すぐに本物を連れてこい。いいな。」

と言うと、電話を切った。

そこにいた一同は、

（美希って、どんな権力持っているのよ……）  
とあっけにとられていた。

そして、1分とたたないうちに、野々原、ヒナギク、ハヤテは<sup>生徒</sup>天球<sup>会堂</sup>の間<sup>会堂</sup>にいた。

「うちのお坊ちゃんまがご迷惑をおかけしました。」

と言うと、おもむろに竹刀で拾って、帰って行った。

「では、僕も……」  
といって、ハヤテも消えた。

その数分後……

ボタン！

「遅れて申し訳ございませんでした！」  
直立不動で敬礼して、書類を持った長官がきた。

「美希、本物？」  
ヒナギクが聞く。

「大丈夫だとは思いますが……確認してみよう。」

そういうと。美希は長官のそばでなにやらぼそつと言った。すると、  
長官の顔は引きつった。

「大丈夫、本物だ。」  
（だから、美希っていったい……）  
と謎の深まる一同だった。

「では、報告を。」  
ヒナギクが、そういった。

報告の内容は、  
美希の報告の裏付け、と、さらに、主犯の全員がヒナギクファンク  
ラブ・綾崎撲滅派によるものであること、そして、多くの有力家の  
票をすでに買っていた可能性も指摘された。

予想外の報告に、一同、啞然。

そして、千桜は、

「今から、全校集会ね。」

といった。

ヒナギクは、すぐに反応した。

マイクを持つと、

『白皇学院高等部全校生徒に白皇学院生徒会長桂ヒナギクより緊急連絡。全校生徒および職員は直ちに講堂に集合すること。』

そういうと、ほかの生徒会役員は、それぞれ、自分の仕事を始めた。

その一時間後、

ヒナギクは演台の上にいた。

「皆さんに、学内捜査官長官より、報告があります。」  
とヒナギクは言った。

捜査官長官は、今回の捜査の結果を報告し始めた。

報告を終えると、

「私としては、非常に憤慨せざるを得ない事態です。よって今回の

生徒会役員選挙は、選挙規定の52条に基づいてここに、生徒会長、桂ヒナギクとして、緊急事態宣言を発します。」

前面に設置されているモニターには、52条が映し出されていた。

その宣言に、会場はざわついた。

「但し、役員で話し合った結果、9月に新役員の信任投票を行います。その捜査官は臨時選管として監視に当たります。」

すべて終わって、ヒナギクは生徒会室で一人、休んでいた。  
今は授業中だが……

（お姉ちゃんの授業だし、まあ、わかってくれる……よね。）

そのとき、

コンコン、

「ヒナギクさん。」

そこにいたのは……

「ハ、ハヤテ君！」

そういうと、ヒナギクは心のダムから、いろいろあふれ出し……

ハヤテに泣きながら抱きついた。

そう、今回の事件、ヒナギクにとっては、とても心に刺さる事件だったのだ。

「ヒナギクさん、自分を責めないでください。」  
ハヤテは、さすがに察しがよくなっていた。

そう、ヒナギクは、自分のファンクラブが主犯格だったことに、ショックを受けていると同時に、自分のせいだと、責めているのだ。

「でも、私が……。」

「関係ないですよ。……って言っても、そんな簡単に心はいやされないですよね……」  
といって、ハヤテは、

ヒナギクの頬にキスをした。

「ふえ!?!」

ヒナギクは真っ赤に。

「これで少し楽になりましたか？」  
とハヤテ。

「うん……、ありがとう。」  
と、ヒナギク。

すると、ちょうど、

キーンコーンカーンコーン……

「あ、終わっちゃいましたね。教室に戻りましょう。」  
と言って、2人は戻った。

……その後の役員の指名で、新役員は次のようになった。

|     |                        |
|-----|------------------------|
| 正会長 | 桂ヒナギク                  |
| 副会長 | 綾崎ハヤテ                  |
|     | 春風 千春                  |
| 会計  | 霞 愛歌                   |
|     | <small>ののほらかえで</small> |
| 書記  | 野々原 楓                  |
| 役員  | 瀬川 泉                   |
|     | 花菱 美希                  |
|     | 朝風 理沙                  |

なぜ野々原がいるのか？それは……

「お坊ちゃまがご迷惑をおかけしましたので、そのお詫びに……」  
と言うわけだそうだ。

こうして、無事(?)役員は決まった、が……

―ハヤテには、次なる試練が、待ち受けていた。

もちろん、彼も、その周りの人も、一人として

―気がついていない。



#### **4. A s t a t e o f e m e r g e n c y (後書き)**

では、

また、12月に、師走の忙しい中ですが、また会いましょう。

## 5. ハムスターのおはなし。(前書き)

お久しぶりです！無事、定期考査も終了しまして、また執筆をして  
いきたいと思います！

## 5. ハムスターのおはなし。

そんなある日のこと。

ヒナギクは困っていた。

（そういえば、歩に言うのを忘れていたわね……どうしよう？）

今日は、ハヤテは薫に、赤点メンバーの補習を手伝わされていた。

なぜ、いつものように、ヒナギクがやらないのか？

それは……

―回想

「いつもは桂にやらせてるが、あいつばかりにやらせるのも大変だろうから、綾崎。やってくれ。」

―回想終了。

という訳だ。

そして、こういうときに限って……  
ばったり。

「あ、ヒナさんだ！」  
歩登場。

「あ、あ、歩!？」

ヒナギクは驚きのあまり、声が裏返ってしまった。

「へ、ヒナさん、どうしたのかな?そんなに驚いて。」  
歩が不思議そうな顔をして、ヒナギクの顔を見る。

「べ、別に、何も。あ、そうだ、せっかくだし、少し話していいかない?」

(と、とりあえず、どうにかしてごまかさなきゃっ。)

「?、い、いいですけど……。」

歩はさらに不思議そうな顔をした。

ヒナギクは、さらに困っていた。

(どうにかごまかすためにお店に入ったけど、どうしよう?)

「ヒナさん、ヒナさん。」

「は、はひっ!? あ、ごめん、ついボーッとしちゃって……。」

歩は、ヒナギクをじっと見つめて……

(ヒナさん、なにか悩んでるのかな?)  
と  
思  
っ  
て  
……、

「ヒナさん、久しぶりに観覧車に乗りませんか？」

ヒナギクは突然の提案にあわてふためいていた。

「ふえ！？あ、う、い、いきなり何よ！？」

「なんか、ヒナさん、悩んでるんじゃないかな？」

「！？」

ヒナギクは鳩が豆鉄砲喰らったような顔に。

「ほら、行きましょ♪」

と歩に引っ張られて、ヒナギクは銀杏商店街の大観覧車へ。

（こ、これは罰なのよ……）

と、いつだかと同じことを思ったヒナギクであった。

二人は、観覧車に入った。

扉が閉まると、歩が口を開けた。

「で、ヒナさん、どうしたんですか？」

ヒナギクは、

「え、えっと……（こんなこと言える訳が……）」

となっていた。

「もしかして、ハヤテ君のこと？」

「!？」

ずばり言い当てられ、

（もはや観念するしかない!）とヒナギクは、

「そ……そうなの。」

といって、深呼吸をすると、

「じ、実はね、ハヤテ君に、こ、告白されたの。」

「!？」

今度は、歩が固まった。

「そ……それで、ハ、ハヤテ君と、つ、付き合うことに、なりました……。」

ヒナギクは、そういうと、下を向いた。

そして、そくつと顔をあげると……、

歩は、笑っていた。

「あ、歩!？とうとう壊れちゃった？」

「ち、違うよ!ひどいんじゃないかな、ヒナさん。」

「じ、じゃあ、何で笑ってられるのよ!」

とヒナギク。

すると、歩は静かに、

「だって、ハヤテ君がヒナさんを選んだんでしょ。だから、私が泣いても、何も変わらないんじゃないかな？」

と言った。

「でも……」

「私、前に言ったじゃないですか。『ハヤテ君はヒナさんみたいな人に弱い』って。だから、そんな気はしてたんです。」

そう言って、歩は、

「ハヤテ君、いままで、不幸な思いしかしてないですから、幸せにしてあげてくださいね。」  
と言った。

その夜、西沢家。

歩は、ぼんやりと机の上を見ていた。

そこには、ハヤテからもらったものが置いてあった。

歩の目からは、涙が、ぽつり、ぽつりと……。

その時、



（あ、メールだ。）

画面には、

『新着メール 2件』

（2件？誰かな？）

一通目は……

ヒナギクだった。

『これからも色々話をしましょうm（　　）m』

（当たり前じゃないかな？ヒナさん）

と思っていると、

二通目は……

「ハ、ハヤテ君!？」

つい、声に出してしまった。

内容は……

『今後も、親しい友人として、大切にしていききたいと思います。』  
と一言。



歩は、それを見た瞬間、泣いた。声をあげて、涙が枯れるまで泣いた。

（こ、こんなにみんな、優しく……。）

歩は、そんな二人の気持ちを汲めるように、しよと決意した日だった。

## 5. ハムスターのおはなし。(後書き)

### 次回予告

「ほな、次回予告しよか。

次回、ハヤテのごとく、ヒナギクのごとくは、『夏の序章』。超長編シリーズになるんやってさ。ま、楽しみにしときや!」

## 6. 夏の序章（前書き）

小説の世界では夏休みに入りました。現実世界は師走です。

## 6. 夏の序章

時は流れ、夏休み前日。

例にも及ばず、終業式。

「……。では、みなさん、楽しい夏休みを過ごしましょう。」  
壇上で、新(?)生徒会長の桂 ヒナギクが、そういつて、白皇学院の終業式は終わった。

「って、早すぎじゃない、作者さん。」

とりあえず、……

「」「夏休みだー!!!」「」「」  
三人娘とナギが叫んだ。

そう、明日から、夏休み。そして、例にも及ばず……

「あ、そうだ。ハヤテ、明日から旅行だぞ。」  
ナギの突然の宣言。

「は、はい。……って、えええ!? 聞いてないですよ!」  
ハヤテは驚いた。

「まあ、そりゃあ、昨日決めたからな。知っているわけがない。」

「昨日……」

マリアさん、大変そうだな、と思うハヤテ。

「ナギちゃん、忘れないでよ♪」  
泉登場。

「今、偶然、私たちは聞いてしまったのだ!!」  
と理沙。

「そう、偶然だ。コレは本当だ。というわけで、我々も連れて行くのだ!!」  
と、美希。

（いやいや、絶対偶然じゃないだろ。）

と心の中でハヤテ・ナギともに突っ込みながら、

「ハヤテ、どうするか？」

「うーん。どうしよう？」

と、すると、美希が、ハヤテに近づいて、ボソッと、  
「ヒナも一緒に連れて行くつもりなんだが……。」  
と言った。

ハヤテは、ポンッ、と音がするくらい真っ赤になって、

「と、と、と、とりあえず、マリアさんに電話を……。」「  
と、動揺しながら、携帯をいそいそと出した。

プルルル、プルルル。

「もしもし、ハヤテです。マリアさんですか？」

『はい、そうですけど、どうしたんですか？』

「実は、明日の旅行のことなんですが……」  
とハヤテが、話そうとすると、

『あ、おそらく、生徒会役員の皆さんですか？』  
と、相変わらずの鋭い洞察力で。

「は、はい、そうですけど……」

『それでしたら、花菱さん、瀬川さん、朝風さん、ヒナギクさんの分は、全く問題ないですよ。』

全く、隙のない用意周到なスーパーメイド・マリア。

「え、……早くないですか？」

『メイドの勘ですわ。』

どんな勘だよ、と、心の中でとりあえず突っ込んで、としていると、

『他にどなたか、ご一緒する方はいらっしゃいますか？』

「えっと……、とりあえず、そのことに関しては、また後ほど折り返して電話します。」

プツ。

「ハヤテ、マリアはなんと？」

「それが、もう既にお三方とヒナギクさんの分は既に用意してある、と……。」

ナギは、不思議そうな顔をして、

「なぜだ？ 昨日はそんな話はなかったぞ。」

ハヤテは、

「なんでも、マリアさんいわく、『メイドの勘』だそうです。」

「どんな勘だよ！」

すかさず突っ込むナギ。

「さすがはナギちゃんちのスーパーメイドさんだな。」

美希が感心したように腕を組みながら、うんうん、とうなずいている。

「にははる、コレで、私たちは決定だね」

とニコニコと（いつものことか。）応える泉。

そこに、ヒナギク登場。

「どうしたの、そんなところで固まって。」

「あ、そうだ、ヒナ。明日から旅行だ。準備しておけ。」

と理沙が、すこし偉そうにいう。

「ふえ、へ！？ な、なんで？」

「それがな、ナギちゃんちの完璧メイドさんが、明日からの三千院家の旅行に我々が乱入してくるのを予想して……」

と理沙が途中まで言うのと、

「朝風さん、違いますよ。正しくは、マリアさんいわく、『メイドの勘』ですよ。」

「ああ、そうだったな、悪い、ハヤ太君。」

「ど、どんな勘よ……。」「と、ヒナギク。」

「まあ、それはさておき、それでだな、ヒナの方ももうあるらしい。だからだ。」

「そ、そうなの？……、まあ、ナギたちがそれでいいなら……。」「

ナギは、

「ああ、全然かまわないぞ。」

とそこでハヤテが、ふと、

「そういえば、マリアさんが、他に誰か一緒にさる方はいますか、と言ってましたが……。」「

と言うと、

「はいはい、虎鉄君は？」

と泉。即座にハヤテは、

「とりあえず、家においてくるか、東京湾に沈めてください。」  
とさくつと言う。

「にははは、わかった」



とそこで、ヒナギクが、

「じゃあ、歩は？」

「あ、大丈夫だと思いますよ。」

とハヤテ。すると、

「それならハヤテ。サクとか、伊澄や、ワタルとかも……」  
とナギ。

「わかりました。じゃあ、電話してきますね。」

と言って、ハヤテはマリアに、行く予定の人を挙げていた。

数分後……

「では、皆さん、明日は9時に三千院家に集まってください。」

あと、とハヤテは、

「マリアさんからで、夏休みの半分くらい使うそうなので、勉強道具を持参したほうがよい、とのことですよ。」  
と付け足した。

三人娘は、ウェッ、と言う顔をして、

「ハヤ太君、君は何を考えているのだ？」  
と理沙。

ハヤテが、返事をしようとする、

ダダダダッ、

ハヤテの携帯が突然、L・van・ヴェーダーベンの《運命》を奏で始めた。

「あ、すいません、電話が……」

（どんな着信音だよ）

と全員が突っ込んでいた。

またもや数分後。

ハヤテは、

「お嬢様、今から本宅に参らなければならぬので、先に帰らせていただきます。」

ナギは、ハア、と言う顔をして、

「やっぱり、さっきのは帝のじじいか。」

「はい、そうです。」

と言うと、ハヤテは疾風のごとく、走り去っていった。

（まさしく、運命、だな……）  
とナギ。

そのハヤテの後姿を見る一同。

……。

「く、車より……、」

「ああ、速い……な。」

一同、啞然。

その日の夜、ヒナギクは……、

プルルル、プルルル、

『はい、西沢です。』

「歩？」

『あ、ヒナさんかな？どうしたんですか？』

そう、ヒナギクは旅行のことを歩に伝えようと、電話をしている。

「実はね、……。」

と、事情を説明すると、

『ええええええええ！？、そ、そんな、いいのかな？』

「ハヤテ君も、ナギも、マリアさんも大丈夫って言っているから……。」

『わ、わかりました！すぐに、すぐに準備します！！』

「あ、そうそう、夏休みの半分くらいいるそうだから、勉強のものも持っておいで。教えてあげるよ。」

『え、ほんとですか！？、有り難うございます！！』

そんなこんなで、皆、楽しみにしていた。

そういえば、ハヤテは？

次回へ続く。

「……、デジャヴ、ですね。」

気のせいだ。

## 6. 夏の序章（後書き）

### 次回予告

「ふぁい！日々野 文です！

次回、ハヤテのごとく、ヒナギクのごとくは、『夏の序章（2）』  
ですっ！

ハヤテ先輩、どうしたんでしょうか？」

## 7. 夏の序章（2）

さて、前回、帝に呼ばれて、本宅に行ったハヤテ。

さて、帝の部屋。

「どうしたのですか？」

「まあ、綾崎。落ち着け。王玉の話だ。」  
と帝。

「いま、お前さん、王玉は？」

「この通りです。」

と、桃色の王玉を渡す。

「ふむ……、みごとじゃ。」

帝は感心した。

「しかし、綾崎。困ったことが判明下のじゃ。」

帝が顔を上げていった。

「へ？なんですか？」

「実はな、お前さんには、後おそらく3つ、試練が残っているそうなのじゃ。」

……。

「えええ!？」

驚きを隠せないハヤテ。

「ただ、いままで、そもそも王玉の封印自体、解いたことがないから、どのような試練が待ち受けているのか、分からのじゃ。」  
と沈痛な表情をする帝。

「……、つまり、流れに身を任せろ、ってことでしょうか？」  
とハヤテは苦笑い。

「まあ、そういうことじゃ。」  
と帝も苦笑い。

「あの、……間違っても、死んだり、しません……よね？」  
少し心配になって聞いた。

「安心しろ。お主は、アテネがお前にかけて体の矯正のおかげもあり、おそらく、不死身だ。」  
と、そこに関しては自信を持って言う帝。

「なんか、よかったような、よくなかったような……。」

「まあ、そうだな。死なないが、何が起こるかは、分からないからのう。」

と、二人して、+50歳、という感じ。

だがの、と帝は、顔を上げ、（年齢も戻り、）

「心配し始めても、お主にも、ワシにも、どうにもできないのじゃ。」  
「

「そ、そうですね。」

と、ハヤテは精一杯強がった。

お屋敷に戻ったハヤテ。

「ただいま戻りました。」

「お疲れ様でした、ハヤテ君。……って、どうしたのですか？」  
マリアだった。

「は、かくかくしかじかで……。」

「……、そうですか、不幸は、まだひつついて回るみたいですねえ……。」

ため息混じりにそういった。

「別に、巻き込まれたくて、巻き込まれているんじゃないですけど……。」

ハヤテも少し悲しそうにつぶやく。

「ですが、ハヤテ君、明日からは、旅行ですから、落ち込んでいてはいけませんよ。」

と、マリアはほえんと言う。

「そ、そうですね。」  
とハヤテ。

「そういえば、今回、結構長い間、ヒナギクさんと一緒にいられるんですから、今まで話せなかったこと、全部話しちゃったらどうで



すか？」

と、マリアが、真剣な表情で言う。

「えっと……、それって言うのは、要するに、生い立ち、みたいなことってことですよね。」

と、ハヤテが聞く。

「当然じゃないですか！」

マリアは、さも当然のような表情をする。

「時間もたっぷりありますし、話すのには十分すぎる位じゃないですか？」

「そ、そうですね……」

となぜかハヤテの顔は不安そうだ。

その顔を見たマリアは、

「もしかして、ヒナギクさんに嫌われることを気にしているんじゃないですか？」

と聞く。

「!？」

ハヤテはビクウツ、と反応する。

マリアは、そうなんだ、と思いつつ、

「ヒナギクさんは、そんなことでハヤテ君を捨てるほど冷たい人ではないと思いますよ。」  
と言いきった。

「ですが……」

と、まだ不安そうなハヤテ。

「もし、そうだったら？ そうだったら、ヒナギクさんはそこまでの人、ってことですよ。そんな人には、ハヤテ君の彼女は無理だと思いますよ。」

とぼっさり切り捨てた。

「そ、そうですか……。」

ハヤテは、その言葉の鋭さにもはやあんぐりしていた。

「まあ、今夜、ゆっくり寝ながら考えてくださいね。」  
そういうと、マリアは部屋に戻っていった。

さて、明日から旅行。いったい、何が起こるのか？

ちなみに……

「お嬢様？」

「ん？ なんだ？」

「明日、三千院家から出発ですが、何で行くんですか？」

「ん？ ああ、リムジンで東京国際空港羽田空港まで行って、自家用ジェットで……。」

「……。」

三千院家の財力は何処まで……。

続く。

## 7. 夏の序章（2）（後書き）

次回予告

「クラウドさだ。

次回、ハヤテのごとく、ヒナギクのごとくは『夏の序章（3）』だ。  
コメントなしだ！」

## 8. 夏の序章(3)

そして、当日、朝9…00。  
ち

「ようし、全員そろったな！」  
ナギがそう言う。

ここに今いるのは、

ハヤテ、ナギ、マリア、ヒナギク、三人娘、ワタル、サキ、歩、一樹、伊澄、咲夜だ。

タマ、クラウドは屋敷のお留守番、シラヌイは同行。

(くっそ、シラヌイのやつ、お嬢とべたべたしやがって……。)  
とタマは少々怒っている。

ちなみに、伊澄は迷子にならないよう、咲夜が連れてきた。

「では、いくとしよう。」

そうして、総勢18人はリムジンに……

「お嬢様、いくらなんでもリムジンに18名は……。」

「大丈夫だ。」

というと、目の前にリムジンが止まった。

「「「「長つつっ!?!」」」」」

ハヤテ、ヒナギク、ワタル、サキ、歩、一樹はあんぐり。

「た、……確かに、大丈夫……わね。」  
ヒナギクがやつのことでそう答えた。

ご一行は、そのとてつもなく長いリムジンに乗って、羽田空港東京国際空港へ。

羽田空港東京国際空港は、夏休みということもあり、とても混雑していた。

「お嬢様、とても混雑しているように見えますが……」

「大丈夫だ。心配要らぬ。」  
とナギは、窓の外を指差した。

ハヤテが窓の外を見ると……

一番前の滑走路に、一台のジャンボジェット。そこには……  
SANZENIN  
と書かれていた。

「お、お嬢様、まさかとは思いますが、あれは、まさか……」

「ん、あれは自家用ジャンボジェットだが。」

「「「えええええ！？」」」

「まさか、じゃあ……」

「ああ、第二旅客ターミナルを半分借り切った。」

「……。」

もはや呆然とする以外になすすべのないハヤテだった。

そして、搭乗口。

「にはは〜♪楽しみだね。」  
と泉。

「それはそうだが、席、どうしようか？」  
美希がそういった瞬間、静かになった。

「そういえばそうだったね……。」  
とマリア。

「くじ引きでいいんじゃないか？」  
咲夜が言う。

「うむ。そうだな。」  
ナギもご満悦。

とそこで、  
「そういえば、ヒナは？」  
と理沙。

「えっと、ヒナギクさんはですね……。」  
とマリアはある一点を指す。

そこには、顔を青くしているヒナギクと、歩、ハヤテ。

「……、そういえば、ヒナギクって……」

ナギがため息混じりにそういい、

「高所……恐怖症だったな……。」

美希が、頭を抑えながら言った。

と、そこで、ふと思い出したように、マリアが言った。

「そういえば、今回は特殊仕様機を借りたんでしたわ。だから、ヒナギクさんも大丈夫ですよ。あと、席も決める必要も、確か、無かったと……。」

「と、特殊仕様機って……。」  
と聞くと、

「まあ、乗ってみれば、わかります。じゃあ、私は、向こうを呼んできますので、先に乗っててください。」

といって、マリアは、ハヤテたちのほうに行った。

そして、5分後、全員が搭乗完了した。

飛行機の中は、まるで三千院家の一室のようになっていた。

「なんや、特別仕様って、これやったんか。」  
と咲夜。

「おお、マリア、まるで屋敷ではないか。」  
とナギは目を丸くしていた。



「そうですよ。」

と、マリアは、微笑んでいた。

さて、庶民組は……

ただ、呆然としていた。

やっとのことで、ハヤテが口を開いた。

「あ、あの、マリアさん、これは、ジャンボジェット機、Boeing 747-8、ですよ。」

「はい、そうですけど、……、よくわかりましたね。」  
マリアは、驚きを隠せない。

「えっと、じゃあ、なぜこのように？」

「えっと、ミカド・ハイパー・エナジの最先端の技術で。」

「……、まあ、いいですけど。これなら、ヒナギクさんもおそらく……。」

と、ハヤテが後ろを向くと、歩と何か話をしていた。

「そうですね。大丈夫だと思いますよ。」

「あ、もう離陸しましたよ。」  
とマリア。

「……え、Gとか、まったく感じないんですけど……。」

「その辺も、ミカド・ハイパー・エナジーの最先端の技術で……。」「もはや、マリアにも良くわからないらしい。」

「じゃあ、そろそろ、ヒナギクさんのほうに……」

「いいですよ。楽しんでくださいね。」

「はい。」

というと、ハヤテはヒナギクのほうに行った。

ハヤテと入れ替わりで、咲夜がきた。

「マリアはん、借金執事と、生徒会長さん、付き合ってるのかいな？」

と複雑な表情でマリアに聞いた。

「そうですよ。一ヶ月前くらいから。ちなみに、ナギはちゃんとわかってますよ。」

と、マリア。

「そうなんか？……、なら、ええか。にしても、二人、……。」「というて、マリアと咲夜はハヤテとヒナギクのほうを見る。」

改めてみると、二人の距離は近い。見ていると、すぐに抱き合ってしまうような距離。

とてもいちゃついているわけではないのだが、まあ、いろいろ……。

「なんか、色々……、なんやろうな？」

「私にも良くわかりませんが……。」

つづく。

## 8. 夏の序章(3) (後書き)

次回予告。

今回は、作者がいたします。

次回、ハヤテのごとく、ヒナギクのごとくは、『夏の序章(4)』  
です。

さて、ハヤテたちは？

## 9. 夏の序章（4）

「ヒナギクさん、大丈夫ですか？」

「うん。これなら、どうにかなるわ。」

二人は優雅にソファに座りながら紅茶をすすっていた。

周りの皆は、二人に気を遣って、少し離れたところにいる。

「よかったです。最初あんなに真っ青だったので……。」  
と、ホッとした表情になる。

「それにしても、あっという間ね。」

とヒナギクがふと思い出したように言う。

「へ？何がですか？」

「もう、ハヤテ君ったら……、付き合いはじめてから、もう一ヶ月も経つのよ。」

とヒナギクが少し膨れながらいう。

「あ、ああ……って、ええ！？もう一ヶ月も経っているんですか？」  
ハヤテは目を丸くしていた。

そこで、ふと、ハヤテは、昨夜、マリアさんに言われたことを思い出した。

『いままで話せなかったこと、全部話しちゃったらどうですか？』

（そうだ……、その話をしなくては……。）

「ねえねあ、ハヤテ君、あのさ……」

ヒナギクの声に現実に戻された。

「はい、どうしましたか？」

「……、あの、……、い、一緒の部屋に、泊まれるかな……。」  
ヒナギクは顔を真っ赤にしながら、言った。

「ふえっ!? え、えっと、その……。」

ハヤテも、突然の申し出に、耳まで真っ赤にする。

（（どうしよう……、こればかりは、マリアさんには聞けない……。）  
）

と二人が思っていると、

「みなさん、あと1時間ほどで、目的地のミコノス島に着陸します。  
なので、今のうちに、お屋敷の部屋割をお伝えしますね。」  
とマリア。発表によると……。

1号室      S P 部隊

2号室      ナギ・マリア（＋シラヌイ）

3号室      咲夜、伊澄

4号室      ワタル・サキ

5号室      三人娘

6号室      歩・一樹

そして……

7号室      ハヤテ・ヒナギク

もちろん、上から順番に発表された訳で、最初は、  
（（SP来てんのかよっ！））  
と全員思ってたに違いない。

ところが、7号室の発表を終えると、

……。

「「ふええ!？」」

ハヤテとヒナギクは、まさかの展開に驚きが隠せない。

（（う、嬉しいけど……／＼／＼））  
と、二人はもはや硬直していた。

そして一時間後。

三千院家自家用機、Boeing 747-8 特別仕様機は、ミコノ  
ス島の三千院家専用飛行場に着陸。

そして、同じくリムジンで、ミコノス島の三千院家別宅に向かい、  
それぞれの部屋に。

side ナギ・マリア@2号室

「おおーあいかわらずだな。」

「そうですね、ナギ。」

それはそうだ。ナギは幼少時代はこちらで過ごしたのだから。

「時にマリア。あの二人は、同じ部屋で大丈夫か？」

「大丈夫ですよ。それに、違う部屋にしても、おそらく、どちらかが夜這いしそうな気がしますから。」

と、マリアは苦笑いしながら言う。

「……、ヒナギクなら、ありえる……。な。」

ナギも苦笑い。

side 咲夜・伊澄@3号室

「ふう〜、ついたな、伊澄さん。」

「そうですね。今回は迷子にならなかったわ、咲夜。」

「当たり前や〜！」  
バシン！

side ワタル・サキ@4号室

「お、おとおおう！こ、これは、すごいな……。」「

ワタルはあまりの豪華さに、半分、腰を抜かしていた。

「そ、そうですね、若……。」「

サキに至っては、金と無縁ゆえ、完全に腰を抜かしていた。

side 三人娘@5号室



「やつほーい！遊び放題♪」

泉はベッドにダイビング。

「まあまあ、泉。少ししたら、あの二人の様子を見に行かないか？  
と理沙。」

「おおお！それはいい。……（ニヤリ）」

美希は、危険な薄笑いを浮かべていた。

side 西沢姉弟@6号室

「ね、ねーちゃん……。」「

「う、うん……。やっぱ、ナギちゃんって、……。すごいや……。」「

二人そろって言葉を失っていた。

side バカップル

「「バカップルって！」「

失礼。

side ハヤテ・ヒナギク@7号室

「相変わらず、三千院家の財力には驚かされますね。」

「ほんと。どうしたらこんなお屋敷がいくつも造れるのかしら。」

「さてと。とりあえず荷物を……。ブファッ！」

ハヤテは、いきなり吹き出した。

「ハ、ハヤテ君？どうしたの？」

「ヒ、ヒナギクさん……。」

と言って、ハヤテはあるものを指した。

あるもの……、それは、……ベッド。

「え、ベッドがどうし……って、ええええええ！？」  
ヒナギクも驚いていた。

「「ダ、ダブルベッド……。」」

そう、なぜか二人のベッドだけ、ダブルベッド。

早速、ついて十分もたたないうちに、撃沈する二人であった。

つづく。

## 10. 夏の序章（5）

そして、夕方。

『皆様に連絡します。まもなく夕食のお時間ですので、一階の食堂に集まってください。』

そんな放送が流れ、全員が食堂に集まる。

「では、とりあえず、明日以降は、基本、自由行動とします。この島は全て三千院家の所有物ですので、島から出なければ、何をしてもいいですよ。」  
とマリア。

食堂の中は喜びの声に満ち溢れる。

「では、みなさん、夕食を食べてください。おかわりはたくさんありますよ。」

（ハヤテ君、頑張ってくださいね……。）

夕食も終わり、ハヤテとマリアは片付けをしていた。

ちなみに、歩が五回もおかわりしていたり……。なおかげで、からっぽ。

「そういえば、ハヤテ君。王玉の試練について、何かわかったことは、ありましたか？」

「いまのところ、ない……です。」

「そうですか……。なら、明日あたり、ヒナギクさんと、ゆっくり話をしたら、どうですか？」

ハヤテが答えようとしたその時、

ダダッン、

ハヤテの携帯がまた、突然、L・van・ヴェートーベンの《運命》が。

「はい、もしもし。」

ハヤテは、王玉のことでまた何かあったのか、と身構えた。

しかし、電話口から聞こえて来たのは、呑気な声。

『おお、綾崎。バカンスは楽しんでもるか？』

ハヤテは、あれ？と思いつつも、

「あ、はい。楽しんでいますよ。」

『おお、なら良かった。』

と、またしても、呑気。

「あの……帝さま？何のご用でして……。」

『おお、わりい、わりい、実は、クラウドから、綾崎に伝言を頼まれているお、』

ハヤテは、

「え、クラウドさんですか？」

『おう、そうじゃ。なんかの、練馬の屋敷に、瀬川虎鉄と名乗る人物がお、』

と言った地点で、ハヤテは、

（ああ、どうせ、『綾崎は、私の綾崎は？』とか言って騒いでるんだろう。）

と、こちらは経験で推測。

「えっと……推測しますと、その人物が、私を呼んでいると？」

『おお、するどいの。そうじゃ。』

ハヤテは呆れて、つい溜息。

「……、なら、クラウドさんに、不審者ですから、容赦無く排除してくださいとお伝えください……。」

『……いいのか？、まあ、そう伝えておく。悪かったな。』

……。

「……えっと、何があったのですか？」

マリアがとても不思議そうな顔をして聞く。

「何か、虎鉄さんがお屋敷に来ているらしく……。」

「……なるほど、よくわかりました。」

マリアも、呆れた顔で頷く。

「瀬川さんの執事なんで、一応、報告してきます。」

そう言って、ハヤテは瀬川達のいる5号室に向かった。

コンコン、ガチャツ。

「失礼します。瀬川さんはいますか？」

「あっ、ハヤ太君♪」

泉が、いた。

「あ、あのですね、虎鉄さんが、（以下略）。」

「あう……ごめんね、ハヤ太君。」

「いえいえ、お気になさらずぬ……って、あと二人は、どちらへ？」  
と、ふと気がついて聞いた。

「ん？あ、今ね、お風呂に入っているよ♪」

「あ、そうだったんですか……では、僕も用事が済んだことですし、この辺で……。」

とハヤテは部屋に戻ろうとした。

「ま、待って！」

泉は思わずハヤテの服の裾を掴んでしまった。

「へー!? どうしましたか、瀬川さん？」

「えっと、あの……。」

何も考えず引き留めてしまったので、どうすれば良いか困ってしまった。

二人の間には心地好いとは到底言えないような沈黙が。

その沈黙を破ったのは……、

「ん？ 泉、ハヤ太君、どうしたのか？」

「み、美希ちゃん！」

「は、花菱さん！」

そのとき、ふと、ハヤテは食堂に携帯を置いていつてしまったことを、思い出した。

「で、では、忘れ物をしてしまったので、今度こそこの辺で……。」「  
といいながら走り去った。

ハヤテは部屋に戻った。

「ヒナギクさん、戻りました。」

「ん〜? ……お疲れ様。」

ヒナギクは既にラフな恰好に着替えていた。

現在時刻はPM9..00。高校生には、まだ寝るには早い時間。二人は……、

「そういえば、つい最近、負け犬公園ですね……」

駄弁っていた。

—そうこうしている間に、いつのまにかPM11..00。

「あら、もうこんな時間。じゃあ……」  
といって、ベッドを見て、少しうつむくヒナギク。

「そ、そうですね……。」  
それを見たハヤテもうつむく。  
二人そろって、耳まで赤い。

なぜか、それは……

第九話参照。

「じ、じゃあ、僕が奥の方に……。」  
ハヤテは布団に入った。

ヒナギクは固まっていた。

「ひ、ヒナギクさんも、その……。」

「ふえ！？う……うん。」

ヒナギクは、顔を真っ赤にして言った。



（け、結構、近いな……。）

ハヤテは、予想していたより、ヒナギクとの距離が近いことに、少し、戸惑っていた。

そこで、ふと、思い出した。

「あ、……。あの、ヒナギクさん。」

「ふえ！？え、えっと……。な、何？」

「あ、あの……。明日、大事な話があるのですが、いいですか？」

「う、うん……。べ、べつに、いいわよ。」

大事な話って、なにかしら？と思うヒナギク。

さて、ハヤテ、どうする？

つづく。

## 11. 過去（前書き）

前話までは、『序章』。  
ここから、この章の、物語の中心に……

## 11. 過去

時間は無情にも過ぎ去っていく。

「で、ハヤテ君、大事な話ってなに？」

そう。もう、既に、話すときが来てしまった。

ハヤテにとっては、告白するときよりも、ガチガチな話。

でも、話さなくてはいけない。

ヒナギクさんには、すべてを知った上で、僕と付き合ってもらいたい。

そんな気持ちも、あった。

でも、ハヤテにとって、これは、深い、深い、傷。一生、治らない。

今からすることは、その傷口の瘡蓋を剥がすようなこと。

はいはいそうですか、と簡単には話せない。

でも、ハヤテは、敢えて瘡蓋を剥がす。

「今日話すのは、僕の今までの人生のことです。本当は、付き合う前に、すべて話して、その上で考えてもらわなければならなかったのですが。」

そう言って、ハヤテは、話しはじめた。

自分の親は、無職で、さらにギャンブラー。

生活費をドラムがくるくる回る夢で二倍にしようとしては、空に。

……そんな生活。

ある日、幼稚園で、他の子の給食費が亡くなった。  
実は、親が、盗んでいた。

そんな親に悲しくなって、走って、走って、ハヤテは花園にいた。  
何もかもが嫌になり、生きる事に疲れたハヤテは

「いつそこのまま死んでしまえばいいんだ」とつぶやいた。

その時、手をさしのべた人が、一人だけいた。

『私は天王洲 アテネ。この星で最も偉大な女神の名前よ。』

そこは、ロイヤル・ガーデン王族の庭城。もちろん、ハヤテは、そんなことは知らなかった。

―『アテネだから、略して、アーたん。』

―『略してって、ハヤテ。一文字増えてるわよ。』

ハヤテは、そこで、アテネの執事、というか、恋人になる。

最初は、体力も無いハヤテは、失敗ばかり。

ところが、アテネが、”神様のまね事”をして、ハヤテの体を矯正して、体の筋肉を無駄なく使えるようになる。

剣術も、掃除の仕方も、アテネに教わった。

元々、ハヤテは執事向きだったのかもしれない。  
そして、ハヤテも、アテネも、幼稚園児ながら、本気で、愛し合う

ようになった。

ところが、そんなある日。

またしても、ハヤテの親のせいで、  
―二人の仲は決裂してしまった。

『もういい。だったら勝手にしなさい。もうお前なんか……、ハヤテなんか!』

……。

ハヤテの目からは、涙が一粒、二粒と……。

(話したいのに、……まだ、続きがあるのに……、は、話せない……。)

ハヤテの頭の中では、アテネと過ごした、おそらく、もう、二度と戻って来ることの無い、幸福だった、あの事が、次々と甦ってきた。あの時は、寝ても覚めても、ずっと、アテネの事を考えていた。

(ア、……ア―たん……会って、話をさせて……)

部屋の中は、ハヤテの嗚咽と、花を啜る音が、響いていた。

そのとき、ハヤテは、気がついてしまった。あることに。

「ヒ、……ヒナギクさん……、少し、一人に、……させてください。……続き、……話したいのですが……今は、話せません……。」「

やっこのことで、ハヤテはそういった。

ヒナギクも、苦しいのだろう、と、そっと部屋を出ていってくれた。

ハヤテは、一人になった部屋で、泣いていた。

―気がついてしまった事。それは……

（なぜ、自分は、いま、ヒナギクさんと付き合っているんだ？）

そして、何時間か経って。

ヒナギクは、部屋に向かっていた。

（もうすぐご飯なんだけど、大丈夫かな？）

ヒナギクは、そう思いながら、そっと、ドアを開けた。

「ハヤテ君……。」

返事はない。

「ハヤテ君？」

―ハヤテは、いなかった。

「え？ハヤテ君？、ハヤテ君？、ハヤテ君！」

屋敷に、ヒナギクの悲鳴のような声が響き渡った。

マリアが、すぐに現場に急行した。

ヒナギクは、マリアに、支離滅裂ながらも、状況を話した。

状況を聞いたマリアは、

「……そ、そうだったのですか……。ヒナギクさん、おそらく、ハヤテ君は戻ってきますから、心配しないでください。」

そう言って、とりあえず、ヒナギクを落ち着かせた。

マリアは、あえてハヤテを探さなかった。

探そうと思えば、すぐにでも見つけれられるが。

それにしても、と悲しい顔で、

（ヒナギクさんが話を聞いて切るならまだしも、ハヤテ君が……。）

ハヤテは、屋上で一人、佇んでいた。

（アーたん……）

今のハヤテの頭には、ヒナギクなど、これっぽちもなかった。別に、洗脳でも、なんでもない。

―ハヤテ自身の、感情だった。

一度、アテネの事を思い出すと、もう止まらなかった。

おかしいな。僕は、アーたんに追い出されたときに、もう恋なんかない、結局、誰かの事を愛したって……と、思っていたはずなのに。

今、こうやって、天下の三千院家の、スーパー執事をしていられるのは、アテネのおかげなのに、自分は、そのアテネを、捨てるのか？  
そして、アテネだって、きっと、待っていてくれる。

あの時、最後に、剣を交わらせたとき、アテネは正気ではなかった。  
アテネは、キング・ミダスに取り付かれていた。

だから、きっと、アテネは……

つづく



## 12. 再会

そのとき、ギリシャ・アテネのパルテノン神殿付近。

天王洲 アテネは、執事のマキナを屋敷において、いつも通り、一人、外にいた。

もう、あれから、何年も経ってしまった。

ハヤテは、もう私の事を忘れてしまっただろう。

でも、私は、おそらく、一生忘れない。

唯一、私の事をアーたんと呼んでくれた、あの男を。

「ハヤテ……」

アテネは、いまだにずっと、ハヤテの事を覚えていた。

ハヤテがいなくなってから、心に大きな穴が開いたようになっていた。

新しい執事、マキナとは、もうかれこ四年くらい経つが、ハヤテの時のように、楽しい生活が、送れない。

そう。アテネもまた、あの日、私は人を愛さないと決めてしまった。でも、ハヤテだけは……

「ハヤテ……戻って、きてよ……」

その手には、帝から、「もうわしはいらん」といって渡された王玉が……

ハヤテは、まだ外にいた。

（僕は、どうすればいいのまだろうか？）

自分が一番苦しかったとき、唯一、自分に手を差し延べてくれた。そんなアテネの事を思いながら、ハヤテは王玉をにぎりしめた。

その時、

王玉が、眩しくて目が開けられないほど、光を……

「な、何が!？」

一方、ギリシャ・アテネでも……

帝から渡された王玉が、おなじように。

「きゃっ! い、一体何が!？」

そして、その光が消えると……

「ア、アーたん!？」

「ハ、ハヤテ!？」

目の前に、お互いがある……ように見えた。

それは、王玉から発せられる、立体的なホログラムだった。

「ア、アーたん、聞こえる？」

「聞こえるわよ。ハヤテは？」

「聞こえるよ。え、でも、なんで？」

「わ、私にもわからない。何か、ハヤテのこと、考えていたら……。」

「ぼ、僕も、アーたんのこと、考えていたら……。」「

一瞬の沈黙。そして、

「「あはははっ！」」

「二人して……。」

「同じ事、考えていたんだね。」

「うん。」

二人の間の空気は、とてもやわらかだった。

それは、まるで、今まであつてないことを感じさせないほど。

「元気にしてた？アーたん？」

「ううん。ハヤテが王族の庭城ロイヤル・ガーデンを出てから、ずっと悲しく過ごしてきた。」

「ごめんね、アーたん。」

「いいわよ。ハヤテのことは、帝様から、聞いているわよ。」

「そう、ねえ、アーたん。」

ハヤテが少し悲しそうな顔をする。

「ん、どうしたの？ほかの女とつきあっているのに、いいの？」  
アテネも少し悲しそうな顔をする。

「やっぱり、アーたんは、知っていたんだね？」

「ええ、……でも、その様子だと、なんかあったみたいね。」

「うん……。」

……。

沈黙。二人の間には、まるで見えないテレパシーがつながっているように、見えた。

「直接会って、話したいよ、アーたん。」

「……そうね。ホログラムだと、話せる限界があるわ。」

「でも、僕は、今そっちに行くことは……。」

「分かっているわ。」

そういうと、ホログラムから、アテネが消えた。

（ど、どういう意味だろう……。）

ハヤテがそんなことを考えていると……。

ヒュッ、パシッ。

後ろから、そんな音が聞こえた。

「へ!？」

ハヤテが後ろを振り向くと、……

アテネがいた。

「ア、アーたん？」

「ふう、さすがに、瞬間移動は力を使うわね。」  
「そういいながら、ハヤテの方に近づく。」

「え、ほ、本物、だよな？」

ハヤテが、信じられない、という顔をしていた。

すると、アテネは、

ハヤテを、抱きしめ、

キスした。

「こ、これでも、あなたは本物じゃないというの?」

ハヤテは確信を持った。

（ああ、この唇の感触……なつかしい。）

この、すべてを抱擁しながらも、その中に、恥じらいと幼さが、少し残っている、キス。

「アーたん。ただいま。待たせて、ごめんね。」

「ハヤテ、お帰り。……待ちくたびれたわ。」

つづく。

### 13. 過去の未来

PM5:00。

（ハヤテ君、まだ戻ってこないのかしら……。）

マリアも、少し心配になってきた。そのとき、伊澄が。

「あ、伊澄さん、ハヤテ君をみかけませんでしたか？」

すると、伊澄は、

「見かけてはいませんが、……場所は何となくわかります。でも、  
いかなん方がいいです。」  
といった。

「えっと……、どういふことでしょうか？」

「おそらく、私の力を大きく上回る力を持った人が、ハヤテ様の王  
玉とはまた別の王玉を持って、一緒にいると思われます。」

「!？」

マリアは、驚いて、そして、わかった。

（て、天王州さんだわ……。）

すると、マリアは、館内放送のマイクをとって、こう放送した。

『皆様に連絡します。屋上は立ち入り禁止です。』

そのように放送した。

アテネとハヤテは、さっきの放送をいいことに、寄り添って、座っていた。

二人で、懐かしい二人きりの感覚を、味わっていた。

まるで、それは、会えなかった、約十年近くを埋め合わせるように。

口を先に開いたのは、アテネだった。

「ハヤテ、少し寒いわ。」

「え、じゃあ、僕の上着を……。」

「……、男物の上着を私に着せるの？もっと暖かくする方法があるでしょう？」

「……、どうすればいいの？」

「はあ、ハヤテは、相変わらずね。」

そういうと、アテネは、ハヤテの膝の上に座った。そして、ハヤテの腕を、自分の前に持ってきて、

「こうするの、よ。」



といった。

ハヤテは固まってしまった。

（む、昔より、いろいろと成長していて、反応に困る……。）

だが、アテネは鋭い。でも、あえて、何も言わなかった。

意識されていることが、逆にうれしかった。

「ハヤテ。私のところから出て行ってから、今までのこと、話してくれない？」

「うん。……。」

そして、ハヤテは、話し始めた。

ハヤテは帰ってすぐ、親の財布を漁った。運良く、親はいなかった。

ざっと、数万円持って、親が「預けた」と言った場所に行った。

―あった。その指輪を、買って、取り戻した。これで、アーたんの所に戻る、そう確信していた。

でも、王族の庭城ロイヤル・ガーデンがあった場所は、ただの白皇学院の建設予定地になっていた。

もう一生会えない……。そう思った。

その日の夜、ずっと、泣き続けた。そして、親を恨んだ。憎んだ。いない、と思った。

……そして、結局、捨てられた。

1億5680万4000円の借金を残して。

そして、やけくそになって、所持金12円で身代金目的の誘拐を試みる。

以後に、わかったことだが、このときの台詞で、お嬢様に大きな誤解を与えてしまい、相思相愛と勘違いしてしまった話は、また別の話。

ただ、なんだかんだで、結局、誘拐しようとして、電話で早速名前を名乗ってしまい、失敗。

さらに、なんだかんだでお嬢様を別の誘拐犯から助けてしまい、命の恩人に。

そして、お嬢様の計らいにより、三千院家の執事になる。

借金も、ひよんなことで、お嬢様が全額肩代わり、無利子・無担保。

しかも、お嬢様のお小遣いで、名門・白皇学院にも、通わせてもらった。

—そんなこんなで過ごしてきた。

そこで、一度、ハヤテは話を切った。アテネの反応を見た。

アテネもハヤテの方をみた。そして、ハンカチを出すと、ハヤテの目元に当てた。

ハヤテは泣いていた。

「アーたんの言った通り、親は信用できなかった。それなのに、僕は……。」

「ハヤテは、悪くないわよ。でも、指輪を取り戻したことは、知らなかったわ。」

アテネは心なしか、少しうれしそうだった。

「うん、今も、あるよ。」

と言うと、ポケットから、小さな箱を取り出した。

その中には、アテネがあげた、指輪が、あった。輝きを失わずに。

「私も、つけているわよ。ほら。」

アテネも、指に、輝きを忘れていない指輪が。

ハヤテは、話しているうちに、アテネのことも聞きたくなった」。

（なんだかんだ言って、アーたんのこと、知らないな……）

……。

また、沈黙が訪れた。

そして、アテネは言った。

「そこから先は、いいわよ。一応、私は白皇学院の正式な理事長だ

から。あくまでも、あの婆は、仮。学校生活については、知っているわよ。」

「そう、そうなの……。……なら、色々知っているね。」

「うん。あなたと、生徒会長のことも、とてもよく、知っているわよ。」

アテネは、そこ意地悪く、笑った。

「うっ……。」

ハヤテは、苦い顔。

ハヤテは、とりあえず、ごまかして、

「あ、アーさんは、どうだったの？」  
ハヤテは聞いた。

一瞬の間。

そして、

「いいわ。話してあげる。私はね……。」

つづく。

## 14. 過去(2)

アテネは話しはじめた。

気がついたときには、ハヤテはいなかった。しかも、ハヤテは、王<sup>ロ</sup>族の庭城イヤル・ガーデンの出入口に、王玉の入ったお守りを落としてしまっていた。アテネは、ハヤテを追おうと思ったが、王玉を落としていったのを見て、泣きそうになった。

—もう、何があっても、ハヤテは戻って来ない。

「ハ、ハヤテ……。」

しばらく経って、もう、アテネには何日、何月経ったか分からなかったが、助けに来た人が。その人は、姫神と名乗った。

彼の額には、十文字の傷、そして、彼は、私と同じような力が使えた。そして、彼の手にも、王玉が。

彼は、王族の庭城から私を出し、自分の持っていた王玉を渡してくれた。

私は、探し回った。そして、見つけた。

ハヤテは家で一人、泣いていた。私の名前を叫びながら。

私は、ハヤテに話し掛けようとした。でも、出来なかった。今思えば、どうでもいいいちっぽけなプライドが、邪魔していたのだ。

と思う。

そして、王族の庭城に戻ろうとして、玄関の前に立った。その時、  
―王玉から光が失われた。

そうだった。私は「神様の怒りに触れた人間」だった。  
王玉に触れることは許されていない。

実は、同じとき、王族の庭城では異変が起きた。  
完全に、王族の庭城に繋がる道が閉ざされた。

異変に気がついた帝が、現れた。  
そう。「消えることの無い炎」は、完全に光を失っていた。

そしてその後、私はギリシャのアテネに移動した。

孤独だった。

金も、名声も、美貌も、明晰な頭脳も全てあるのに、孤独だった。

それは、マキナを執事として雇ってからも、変わらなかった。

それどころか、毎晩、夢にも出てくるようになった。よりによって、  
「あの日」のことが。

そんなある日、帝が再び、訪れてきた。

ハヤテの王玉が、封印を解いたという。

実は、いまあなたが首から下げている王玉は、あの日落としてしまった王玉。

そして、帝は、こういった。

―わしの王玉は、唯一、あの男につながっている。わしは持つていても、使うことがない。ところがどうやら、御主は、とても気になっっているらしいの。だから、これはやる。好きに使いえ。

嬉しかった。でも、私は王玉に触れることが出来ない。ところが、帝は、こういった。

―これは、ハヤテとつながっている。もし、ハヤテが御主のことが考えれば、そこには特殊な力が発生する。なぜなら、彼は、王玉の封印を解いたからのう。

そういつて、帝は、去っていった。

……私は、待った。ずっと、待った。きっと、ハヤテは……

そんなある日、王玉が、反応した。これは、もしかして……触った。何も、起きなかった。

―触れた。

「ハヤテ……ハヤテ……。」

……。

アテネは、全て、話してくれたらしい。

ハヤテは、少し強く、抱いた。

「ねえ、ハヤテ……わ、私の、執事をしてくれないかしら？」  
顔を赤くしながら、そうささやいた。

ハヤテは、うん、といいそうになった。というより、言いかけた。

ギリギリで、お嬢様のことが、出てきた。

僕が、アテネの執事をして、お嬢様の執事をやめたら、お嬢様は、遺産相続の権利を剥奪される。

ハヤテは、

「アーたん、……とっでもしたいんだけど、お嬢様の遺産相続の条件だから……。」

苦い顔でそう答えた。

「そうね……そうだったわね。なら、単刀直入にいおうかしら。」  
と、そのまま言おうとして、言葉を詰まらせて、赤くなる。

「あ、……、その、わ、私と、お付き合いしてくれないかしら。」  
と言って、さらに顔を赤くする。頭のアホ毛(?)も、あちこちに振れている。

「ア、アーたん……。」

ハヤテは固まってしまった。

いままで、長い間望んでたこと。そう。それは、アテネに認められ



て、お付き合いすることじゃなかったのか？

でも、困ってしまった。いま、ヒナギクとも付き合っている。この状況で、ヒナギクを切ることなど、僕にはできるのか？

―否、できないだろう。

しかも、……

「アーたん、今の僕に、甲斐性はないんだよ。」

そう。それはその昔、王族の庭城にいたときに、ヒナギクに叩き込まれた、「異性とお付き合いするための条件。」

『優しく在れ、強く在れ、甲斐性を持て。』

ハヤテには、甲斐性はおろか、1億5000万近くの借金を抱えている。

「そうね……、でも、私は、ハヤテのことが、その、本当に、……す、好き、なんだと思う。」

アテネは、顔を真っ赤に染めて、顔をうずめる。

「あ、あの、ぼ、僕も、すっごくうれしいし、できることなら、アーたんとお付き合いしたい。でも、今は、正式にお付き合いしている人が……。」

と、ハヤテは、悲しそうに、つぶやく。

それを見て、アテネは不思議に思った。

（な、なんで、悲しそう？）

「ねえ。ハヤテ、なんで、そんなに悲しそうな顔をしているの？」

「あのね、実は、……。」

と、何が起きたのか、話した。

「……そうだったのね……。」

と、アテネは、小さくため息。

（ハヤテはどうなのか、はひとまず置いておいて……、ヒナギク、か……）

さすがのアテネでも、ヒナギクを、悲しみのどん底に落としたくない、という気持ちはあるようだ。

そして、自分の気持ちを、押し殺して、

「ハヤテ。私が言ったこと、覚えている？」

「うん。『優しく在れ、強く在れ、甲斐性を持て。』でしょ。」

「そう。……。三番目は、ひとまずおいておいて、ハヤテ。”強く在れ”よ。それが、私の、答え。わかるわね。」

アテネは、まぶしいくらいの笑顔で、そういった。

「……、うん、わかった。」

ハヤテも、りかいできたらしい。

「ハヤテ。私は、じき、日本にもどるわ。そのときまで、しばらく会えないけど……」

というと、アテネは、ハヤテを抱きしめて（というより、胸を押し

付けて、  
)

「頑張るのよ。」  
といって、キスをして、帰っていった。

つづく。

## 14. 過去(2) (後書き)

次回予告。

「この世でもっとも偉大な女神よ。

次回、ハヤテのごとく、ヒナギクのごとく、は、『意識』。  
ハヤテ、私を待ってなさいよ。」

## 15. 前進

マリアは、部屋でゆっくりしていた、というよりは、物思いに耽っていた。

コンコン、

「ハヤテです。マリアさんはいらっしゃいますか？」

「はい。どうぞ。」

ガチャッ。

「すいません、お騒がせしました。」

「構いませんよ。」

ハヤテは、マリアの部屋（2号室）にいた。

「あの、お嬢様は……」

「今は外だから、いませんよ。」

そういうと、ハヤテはほっと息をついた。

「事情はさきほど、本人から聞きました。」

「本人……？」

ハヤテは不思議な顔をする。

「天王洲さんですよ。」

「!？」

ハヤテは、驚いて、絶句してしまった。

「あ、ハヤテ君、知りませんでしたか？実はですね……。」

そういうと、マリアは話しはじめた。

実は、マリアは、アテネが心を開いた人物の数少ない一人だった。

そう。それは、私がまだ幼い頃……

「マリア、ちょっと、こいつの面倒を見てくれないかの？」

そこには、顔立ちは抜群、だけど気難しそうな女の子が一人。

「お前の一つ下だ。名前は……」  
というと、

「天王洲アテネ。この星で最も偉大な女神の名前よ。」  
と、アテネが続けた。

当時のマリアは、驚きを隠せなかった。

アテネは、一ヶ月ちかく、毎日のように来た。

最初の一週間は、ロクに口も利けなかった。

その後、だんだん、いろいろな話すようになり、最後の一週間には、

すっかり仲良くなっていた。

そんなある日、

二人は、それぞれの境遇について話していた。

アテネは、そこで、人並み外れた力が使える事も教えてくれた。  
実は、他の人に話すのははじめてなんだ、といいながら。

しかし、その二日後、

アテネは来なくなってしまった。

「帝様、アテネはどうなさったのですか？」

帝は、苦い顔をして

「アテネの事は、詳しくはいえぬ。しいて言うならば……」

―神様の怒りを買ってしまった。

……。

沈黙。

「マ、マリアさん、それって、いつの話ですか？」  
ハヤテがやつのことで、そう聞いた。

「えっと、ですね……私が、まだ五歳のころ……ですかね？」

「……僕がアテネに会う一年前、……ですね。」

「と、とりあえず、その話は置いておいて、ヒナギクさん、どうするんですか？」

マリアは苦い顔で聞く。

「アーたんに、”強く在れ”って、また言われてしまいました。…  
…今から、ヒナギクさんのところへ行って、話してきます。」  
ハヤテの目に迷いはなかった。

「わかりました。私もアテネから伝言をもらってましてね、『もし、  
ハワテがヒナギクを振ると言ったら、全力で止めてくれ。』って、  
言われました。」

マリアは、少し微笑みながら、そういう。

「さすが、アーたんですね。」

そこで、ふと気になって、マリアが、

「……ん？アーたん？」

「あ、実はですね……。」

とハヤテも語った。

「……なるほど、ね。珍しいわね。」  
とマリア。

「そうなんですか？」

「ええ。以前、ヒナギクさんが、そう呼ぼうとしたら、怒ったそうですわ。」



ハヤテは、目を見開いた。

「……僕も、敬語で話してない人、アーたんだけなんですよ。」

今度は、マリアが目を見開いた。

「ハ、ハヤテ君も敬語以外もしゃべるんですか……。」

そこに、

バン！

「マリアさん、見つかりましたか？」

と、ヒナギクは必死の形相でマリアに聞く。

マリアは、目の前にいるのにね、と思いながら、

「はい。いま、ヒナギクさんの目の前にいますよ。」

ヒナギクも、気がついた。

「ハ、ハヤテ君？ ハヤテ君だよね？」

「はい。そうですよ。綾崎ハヤテです。遅くなりました。」

すると、ヒナギクは、ハヤテに飛び込んで、

「良かったあ……。  
と泣いていた。」

つづく。

## 15. 前進（後書き）

### 次回予告

「ナギだ。

次回、ハヤテのごとく、ヒナギクのごとく、は、……なに、まだタイトルが決まってない？……、まあ、しょうがない。次話は、私もまた出てくるらしいからな。楽しみにしてろよ。」

## 16. 暗転

その後、ハヤテとヒナギクは部屋に戻り、続きを話した。

「……。信じられないような境遇ね。」  
茫然とするヒナギク。

でも、ヒナギクが不思議に思ってた三千院家とハヤテの関係については、やっとわかったような気がした。

「あの……。ヒナギクさん。正直、どう思いましたか？」  
ハヤテは心配そうに聞く。

「ふえ！？え、えっと……。」  
咳ばらいをして、こう続けた。

「私も、ハヤテ君みたいに当てがなかったわけではなかったから、どうにかなったけど、もしかしたら、私達もそうしていたかもしれない。」

だからね、と笑顔で、  
「そんな気にすること、ないと思うよ。」  
といった。

ハヤテは、その言葉に、  
「よ、よかった……。」  
と、安心していた。

夕食の席には、全員が揃った。

「おお、ハヤテ。昼はいなかったが、何があったのだ？」  
とナギ。

「はあ、まあ、いろいろと……。」「  
とお茶をにごす。

（お嬢様にはこの話をしないほうがいいな……。）  
と思うハヤテ。

そんな話をしたら、間違いなく、……。

そして、夜。

今日は、いろいろありすぎたから、早く寝よう、と言っていた。

現在は、PM 9..30。

二人は、既にベッドに入っていた。

ふと、ヒナギクは、今日はあんな話もあったから、ちょっとハヤテに聞いてみよう、と、ヒナギクは、ずっと心の中で燻っていたことを、聞いてみることにした。

「ねえ、ハヤテ君。」

「はい、何ですか？」

「あのさ……、も、もし、本当の親が更正して戻ってきて、一緒に暮らそう、って言ったらどうする？」

ハヤテは、少し考えてから、

「あくまで、僕の場合は、ですが、僕は、信じません。だって……」

―受けた心の傷は深いですから。

ハヤテの顔は笑ってなかった。

（そうよ……ね。私ったら、どんな答えを期待していたんだろう……）

ヒナギクは、ハヤテの言葉に、正気に戻った。

その頃、東京都練馬区某所。

大きな門の前に、一組の男女が。顔は笑顔。そして、手はポケットの中に。

そこには、

借用書

私、綾崎 瞬は、学館組より、

金 \ 206,967,000 | を借りました。

次の日。

過去にほとんどないほどのさわやかな目覚めに感動している少年が一人。

（昨日、なんだかんだ言って、全て話したから、すっきりしたんだろな。）

胸の中でぐっすりと眠っている桃色の髪の毛の少女を起こさないように、その少年（執事）は、そっとベッドを抜け出した。

「おはようございます、マリアさん。」

「おはようございます、ハヤテ君。……何だか、今日は昨日と違って、とても元気ですね。」

「はい。しばらくぶりに爽やかに目覚めたので。」

「そうですか。……今日は皆さんで海にでも行こうかと思っているので、私が朝食を作っている間に昼食を作っていただけですか？」  
マリアは、調子良さそうなハヤテにそう言った。

「あ、はい、分かりました。」

そういうと、ハヤテは、執事（メイド要素も少々あり）の顔で仕事を始めた。

朝食の席に全員が揃ったのは、朝9…00。

「皆さん、今日は全員で海に行きましょう！」  
マリアも少々テンションが上がっている模様。

（こう見えても、わたしだって、17歳、ピチピチの17歳ですかなね。）

と心の中で喜びを感じるマリア（17）。

マリアの提案に、

「やったー！」と叫ぶ泉・歩・一樹・咲夜。

ニヤリ、と意味ありげな笑みを浮かべる美希・理沙。  
うれしいけど叫ぶに叫べないハヤテ・ヒナギク。

そして、完全インドア派のお二方は……。  
無表情。

マリアはそんな反応をみて、少し笑っていた。

食事を食べ終わると、

「ヒナさん、海ですよ！海！sea！」

とハイテンションの歩にヒナギクは誘拐……いや、連れ去られた。

美希・理彩はなにやらこそそと話をしていた。

「あの……、お二方はいったい何をしていらっしゃるんですか？」

すると理沙が、

「ふふふ、よくぞ聞いてくれた。これは、我が動画研究部<sup>YouTube</sup>の記録のための準備だ。」



つづけて、美希が、

「そうだとも。今日のために、我々は完全防水仕様のソーの、動画も撮れるという、デジタルカメラを入手したのだ。」

さらに理沙が、

「これで、泉のあんな姿や、こんな姿が……。」「と不敵な笑みを。」

（だ、大丈夫かな、ヒナギクさん……。）  
と少し心配になるハヤテ。

「え、いない、ですか？」

「はい。執事の綾崎は現在、ミコノス島でして……。」

「……、そうですか、ありがとうございます。」

そういうと、二人の男女は去っていった。

「どうしましょう？」

「当然だろ。その、ミコノス島、とやらのいけばいいのさ！」

執事長の余計な気遣いが、この後、ハヤテに大きな災難を降らす。

そんなことも知らず、執事長・倉臼くらうす 正史郎せいしろうは、のんびりとしていた。

あとで帝様に来客のことを伝えなければ、と。

―もし、すぐに電話をしていれば、ハヤテは……。

つづく。

## 17. 急転

「ハ、ハヤテ君、は、恥ずかしいから、あまり見ないで……／＼／」  
ヒナギクは真っ赤になりながら、そう言った。

ハヤテには、水着姿のヒナギクはとても眩しかった。

「だ、大丈夫ですよ。す、すごく、可愛いです……よ。」

まあ、そんな感じで、伊澄を除く全員が、水着になっていた。

ちなみに、ナギは、着替えないうもりでいたが、

「あれ、ナギちゃん、水着に着替えないのかな？」

「ああ。別に、泳ぐつもりはない。POPやっていた方がマシだ。」

「ふーん。……もしかして、ナギちゃん、泳げないんじゃないかな？」  
「？」

「な！？そ、そんなことはない、断じてない！」

「じゃあ、何で着替えないのかな？」

……とまあ、こんな感じで。

一方、ワタルは少し残念がっていた。

「くそっ、せっかく伊澄の水着姿が見れると思っていたのに……。」

「おいワタル。だだ漏れやで。」

「なっ!?! し、しまった、あまりにもものショックに……。」

あほちゃうか、とつつこむ咲夜。

「そんなに見たいんなら、どうにかしてやろうか?」  
咲夜はワタルに耳打ちした。

「ま、まじか!?!」  
ワタルは、叫んだ。

バシッ!  
「声がでかい!」  
咲夜はどこから出したのか、ハリセンでつつこむ。

「しゃーないな。ほな、ちっと待ってな。」

そう言うと、伊澄さくん、と呼びながら咲夜は走っていった。

その10分後、……

「ほら、伊澄さん来るで。」

咲夜はどうにかして伊澄をけしかしたらしい。  
どうしたのか?

それは……

「伊澄さん、なんで着替えんや？」

「肌の露出が多くて、恥ずかしい……。」「顔を赤らめる。」

咲夜はすかさず、

「下着を身につけんやつがいうなや！」  
とつつこんだ。

そして、そのあと、……

ぶっちゃけ、無理矢理脱がせて、無理矢理着せた、と。

まあ、そんなわけで、伊澄が顔を赤らめながら、来た。

「おお、よう似合っとるやないか。」  
と咲夜。

それを見たワタルは、

「おおお!!」  
といって、

気絶した。それは、10分くらい倒れていたそうなの。

何やら、そんなこんなで、楽しいな雰囲気の流れていた。

ハヤテやヒナギクも、相変わらず仲良く、遊んでいた。

ナギも、なんだかんだで歩と仲良く(?)じゃれあっていた。

マリアも満足だった。

少し疲れて、マリアがパラソルの下に戻ったとき、電話になった。

相手は『帝様』。

マリアは、とても嫌な予感がした。

「はい、マリア……」

言い切る前に、

『緊急事態じゃ！今すぐ全員屋敷に入れて、ミコノス島に一切の船・飛行機を入れるな！』  
と叫んだ。

「は、はい!？」

いつも冷静なマリアでさえも、驚いていた。

『詳しくは今は語れん。とりあえず、綾崎、ナギは真っ先に屋敷に入れろ!』

「は、はい!」

マリアもさすがに帝のありえないくらいの剣幕に、気圧された。

すると、マリアは、拡声器（どこから出した？）を持って、

『皆さん、直ぐに屋敷に戻ってください。特にナギとハヤテ君は、直ぐに戻ってください。』

突然のマリアの宣言に少々戸惑う一同。

しかし、ハヤテはすぐに反応して、

「お嬢様、しっかり捕まってください。」

そういうと、お嬢様をお姫様だっこしようとして、

『ちよつとまった!』

ハヤテが、その言葉に反応した瞬間、

―ハヤテは連れ去られた。

「」「ハヤテ君!」「」

つづく。

## 18. 綾崎家

帝からの報告によると、

なぜか綾崎夫妻が、ハヤテが練馬区の三千院家別宅で執事として働いていることを突き止めて、訪れて来たのだが、クラウスが、懇切丁寧ミコノス島にすることまで教えてしまったのだ。

また、来客があったら直ぐに連絡しろ、と伝えてあったのにも関わらず、綾崎の親なら、と怠ったため、対応に遅れた、とのこと。

さらにその後、美希のほうから、借金についての詳細が明かされた。

美希の父及び祖父からの筋からだそうだ。

鬼武者ノ小路系ヤクザの学館組からの借金で、総額206'967'000円。

支払い期限は昨日だったようだが、支払えなかったため（というよりは始めから支払う気がさらさらなかったと思われる）、いつだかと同じように、とした訳だ。

「ハ、ハヤテ君……」

ヒナギクは、もはや意識が朦朧としていた。

とりあえず、天下の三千院家、日本における総ての航空便、船舶便の発着禁止、空港、港の閉鎖をした。

でも、ハヤテの場所が見つからないことには、始まらない。



時間だけは無情にも過ぎ去っていく。

その時、

ヒュッ、パシッ。

マリアは、聞き覚えのある音に、まさか、と思って振り返る。

そこには……、

「て、天王洲さん！？い、いったい、なぜ？」

マリア・ヒナギクは驚いた。

「先程、帝様から指示がありました。私の王玉があればハヤテを助けられると。マリアさんには説明不要でしょう。」

マリアは、なるほど、と手を打った。

「ただ、帝様が言うには、鷲ノ宮さんの力で私の王玉の封印を解かないと駄目だそうなんです。」

と言って、伊澄を見た。

「……わかりました。ハヤテ様のためにも。」

と言うと、伊澄は王玉をアテネから借りた。

そして、手でそれを包み込み、何やらつぶやくと、王玉は一瞬、まばゆい光を発した。

「これで大丈夫だと思います。」  
と伊澄は返した。

「ありがとう、鷺ノ宮さん。」  
アテネはそう言って、王玉を受けとった。

そして、手から鍊成陣のようなものを出して、そこに王玉を乗せた。

そして、じっと、念じた。

（ハヤテ、ハヤテ……。）

すると、一筋の光が、アテネの王玉が発せられた。

「分かったわ。……私が行ってくる。皆様はお屋敷で……」  
と言って行こうとしたとき、

「まって。私にも、行かさせてくれない？」  
ヒナギクだった。手には、木刀・正宗。

アテネは迷った。でも、……

（今、ハヤテが待っているのは、私よりヒナギクさんかもしれない  
……。）

「……いいわよ。足手まといにならないでよね。」  
といって、先を歩いた。

（こ、ここはどこだ？）

ハヤテは暗い場所に閉じ込められていた。  
手は後ろで組まれ、足も縛られていた。

そして、目の前には、借用書。  
首の王玉は、とっさに隠した。

（ヒナギクさん……お嬢様……大丈夫かな……）  
その時、ふと、アテネの姿が浮かんた。

（アーたん……、ん？アーたん？）

そこで、ハヤテは思い出した。

（そういえば、アーたんは、二つの王玉はつながっている、って言うってた……よな。）

そうか、アーたんのことを考えれば、もしかしたら、居場所を伝えられるかもしれない、そう思っ、考えようとしたとき、

―王玉が、熱くなった。

（こ、これは、まさか……）

瞬は、学館組と連絡をとっていた。

どうやら、日本の方は、空も海もどちらも封鎖されているらしい。

「ちっ。小癪なことしやがって。」

まあ、いいけど。どうせ、見つけれられない。そう、鷹を括っていた。

アテネとヒナギクは、ひたすら走りつづけた。

しかし、ヒナギクと違い、アテネは、基本運動をしない。

途中で息を切らしてしまった。

ヒナギクはすぐに気がついた。

「天王洲さん。背中に乗って。」

もう息がほとんどつけないアテネは、ヒナギクの背中に乗った。

ヒナギクは、再び走りはじめた。

「ねえ、なんで、そんなに優しくできるの？ ハヤテから話は聞いているでしょ？」

アテネは、不思議に思っただけ聞いて。

ヒナギクは、凛として答えた。

「私も、人からハヤテ君を横から奪った人だから。そして、その人は、それでも今でも仲良くしてくれているから。」

「……ふふっ。なるほどね。ハヤテは、幸せね。」

「ハヤテ君、そういうわけで、また、よろしく♪」

母は笑顔で借用書を突きつけた。

「なんか、前の借金もどうにかしてくれたみたいだしね。」

父も笑顔で借用書突きつける。

ハヤテの顔は怒りで真っ赤だった。

「なら、その借用書は受け取りますから、二人とも、僕と縁を切ってください。そして、僕の前に二度と現れないでください。それが条件です。」

すると、

「何を言っているのかな、ハヤテ君。縁を切るなんて。」  
父は馬鹿じゃないのか、という顔をする。

「だって、あなたは、私たちの借金を返すために生まれてきたのだから、縁を切ったりしたら、生まれてきた意味がなくなっちゃうじゃないか。」

母は、そう高らかにいい、

「「はっはっはっはっ！」」

と、二人して、高らかに笑う。

（アーたん、僕は、こんな親のために、アーたんを捨てたの？）

そのとき、

「私としたことが、誤算をしてしまったようね、ハヤテ。私が思っていた以上に、最低の親ね。」

「私も同感だわ、天王州さん。ハヤテ君、本気で彼らに罰を与えてもいいかしら？」

そこには、アテネと、ヒナギク。

アテネの手には、いつぞやの王玉、ヒナギクの手には、木刀・正宗が。

続く。

## 19. 生存価値

「「だ、誰だ、おまえ達は!?!」  
ハヤテの親は焦っていた。

「「あら、知らないの?」」

「私は、天下の白皇学院の生徒会長・桂ヒナギク、ハヤテ君の彼女よ。」

「そして私は、天下の白皇学院の理事長で、財閥・天王洲家の当代当主・天王洲アテネよ。知らない、とは言わせないわよ。」

「そうか、なら、君達を誘拐して身代金を要求したほうが、早い……」

と、ニヤリとしながら、日本刀を

「遅い!」  
パァーン!

ヒナギクが打ち払った。

「そういうものは、使い方をマスターしてから使うことね!」  
といいながら、攻撃の体勢に入ろうとしたとき、

「おっと、お嬢ちゃん、それ以上動くと、彼氏の脳天に穴が空くよ!」

綾崎・母がハヤテの頭に拳銃の銃口を向けていた。零距离。

アテネは、信じられない、という顔をして、

「あ、あなたはなんで平気で自分の子供を殺そうと出来るの!？」

すると、

「だって、僕たちの生活を幸せにするためだからね。借金があつちや幸せになれない。」

さも当然のように、瞬は言う。

「ありえない!自分の尻は自分で拭きなさい!」

ヒナギクは、冷たく言い放って、

(天王洲さん、計画通りに。)

とそっという。

すると、アテネは、王玉を持って、

『ハヤテ、聞こえる?聞こえたら、一回瞬きしてくれる?』

アテネは、ハヤテの精神に直接話し掛けた。

ハヤテは瞬きをした。

『今から、指示を私が出しますから、しっかり聞いてなさいよ。』

「だって、ハヤテ君は、僕たちの借金を返すために産んだんだもん。返してくれないなら、死んで返すまででしょ?」

瞬は、またもやさも当然、と言わんばかりの顔をする。

『私は今、白桜を持っています。私が、拳銃の銃身を切り落とすついでに、あなたの手のロープも切って差し上げますから。……あと出来るわね?』

ハヤテは自信なさそうに頷いた。



「子供はあなたたちの道具じゃないのよ。そもそも、今までハヤテ君があなたたちのせいでどれほど苦しい思いをしてきたのか、知らないでしょう？」

ヒナギクの正宗からは、オーラが出ていた。

ヒナギクの感情も高まる。

『ハヤテ、自信を持ちなさい。あなたなら、出来る。私が散々鍛えて差し上げたじゃない。あと、親だからといって、手加減はしてはだめよ。ハヤテ。今の話も聞こえてるでしょ。……私たちの間を切り裂いた張本人なんだから。』

ハヤテは、アテネを見ながら、涙を浮かべながら、頷いた。

「は？そんな必要はないね。

『ハヤテ、3カウントよ。』

だって、ハヤテ君には、『3、』そんなくだらない『2、』ものは、『1、』いないからね。」

「「ゼロ！」」

スパン！、カンカラカン……

アテネは、見事銃身を切り落として、ハヤテのロープも切った。

そして、ハヤテは、

「あんたの借金の方が、く、だ、ら、な、い！」と、怒りに震えながら、母親を渾身の拳で殴った。

瞬は、日本刀で対抗しようとするも、

「胴！」

ヒナギクに後ろから打たれたあと、

「面！」  
パン！

「敵に背を向けるなんて、阿保過ぎない？」  
と言った。

そして、アテネが、ロープで（どこから出した？）二人を縛った。

そして、アテネは静かにこう言った。

「三千院家って、どれほど大きな財閥か、ご存知かしら、綾崎夫妻。あなたは、この地球上で最も大きな財閥を敵に回したのよ。」

「しかも、それに比肩する財閥の天王洲家もしかり、ね。」  
ヒナギクが付け加える。

そして、

「あなたの、その糞みたいにくだらないう借金は、天王洲家が威信にかけて、特別に、お支払いしましょう。そのかわり、」

といって、白桜の先を突き付けて、

「ハヤテと縁を切りなさい。そして、二度と近づかないであげてちようだい。」

さらに、

「もう一度、言っておくわ。あなたは、三千院家の当代・次代両当主と、天王洲家の当代当主を怒らせたのよ。私の忠告を聞かないと、……どうなるかしら？」

そして、怖いほど笑顔で、

「私たちの力をすれば、人の一人や二人、簡単に消して差し上げることも出来る、とだけ言っておくわ。」  
といった。

さすがの綾崎夫妻も縮み上がっていた。

「アーたん、僕にも、話をさせて。」

そう言って、立ち上がった。

「期待した、僕が間違いでした。あなたには、もう二度も邪魔された。」

「あんたのくだらない借金に付き合ってる隙はない！」

そして、

「邪魔すんな」

―そう言い放った。

二人は、三千院家SP部隊に連行された。

アテネも、気を遣って、行こうとしたが、

「今ハヤテ君に必要なのは、私じゃなくて、天王洲さんよ。」  
といって、ヒナギクは、外に出た。

ハヤテの方を見ると、立ったまま固まって……

「否。泣いていた。」

「ハヤテ……。」

アテネは、ハヤテのそばに行った。

「ア、アーたん……アーたん！」

ハヤテは、アテネの胸に顔を埋めて、泣いた。

アテネは、そっとハヤテを包み込んだ。

「ハヤテ、特別よ。今回だけよ。」

続く

## 20. 好転

ハヤテだって、目の前で実の親に自分の生存価値は、親の借金を返すことだけにある、と言われて、怒りの感情しか現れない、なんてことはない。

自分の約17年間の人生を全否定されたのだ。

ハヤテは、「更正なんか、ありえない」と人には言っておきながらも、少しは期待していた。

―でも、見事に、裏切られた。いや、裏切られたどころか、さらにひどくなっていた。

そして、やはり、……

『もういい。だったら勝手にしなさい。もうお前なんか……、ハヤテなんか!』

「ぼ、僕は、こ、こんな親のため、に、ア、アーたんを、捨てた、の?」

ハヤテは泣きじゃくりながら言う。

アテネは、少し考えてから、

「過去のことは、いくら悔いても、なかったことにはできない。」

でも、といって、

「……ハヤテが、こんなに苦しむことになるなら、私も追い出さな

ければ……。」

といって、アテネも涙を流していた。

ハヤテの頭には、いまだに、瞬の台詞がぐるぐる回っていた。

『だって、ハヤテ君は、借金を返すために産んだんだもん。』

（生存価値……か。）

僕にはないんじゃないか？

このまま、死んでも、大丈夫なんじゃないか？

そう思っていた。

その時。

「ハヤテ君。」

そこには、ヒナギクが立っていた。

「ヒナギクさん……。」

「大丈夫？」

そう言って、ハヤテの横に座った。

再び、沈黙が訪れる。

「ハヤテ君。あのさ……、僕って生きる意味ないんじゃないか、なんて、思わないでよね。」

ヒナギクが悲しそうに言う。

「な、何があっても、私は、ハヤテ君とずっと一緒にいるから。私にとって、ハヤテ君は、大切な人だから。だって、……」

ヒナギクは、ハヤテを後ろから抱きしめながら、

「あ、愛している、から……／＼／＼」

ハヤテの心は洗われた。

「ヒナギクさん……。」

ハヤテは、涙が止まらなかった。

「ハ、ハヤテ君！？ど、どうしたの？」

ヒナギクが慌てる。

「う、嬉しくて、嬉しすぎて……」

「お嬢様、本日はご迷惑をおかけして、申し訳ありません。」  
ハヤテは頭を下げる。

「気にするな。ハヤテは良く頑張った。」

ナギは笑顔で言う。

「それより、ハヤテ。ハヤテの親は、ほんとうに、とんでもない奴だな。」

ナギは、呪いをかけるかのように言う。

「私も同感ですわ。帝様が怒ってらしている位ですからね。」  
マリアもそういう。

「え？、そうだったんですか？」  
ハヤテも驚く。

「はい。何しろ、……なんでしたっけ、ナギ。」  
マリアが、思い出せなくて、ナギに聞く。

「えっとな……そうだ、消すだ。」

「あ、そうでした。なんか、次ハヤテ君と接触したら、帝様が、消すと言っていたそうですよ。」  
マリアがさりりという。

「あの……消すっていうのは……」  
ハヤテが、恐る恐る聞く。

「えっとな、『最初からそんな人はいなかった！』的にしてしまうのだ。」  
とさらっと塩味。

さらにマリアが、  
「要は、戸籍操作を初めとし、その人に関するすべての情報を抹消して、体も、焼いて骨は粉末に……って感じです。」  
とさらに恐ろしいことをさらっと塩味、パート2。

「……。」  
もはや、ハヤテの口は開いたまま塞がらなかった。

アテネは、ハヤテ達の部屋に泊まって行くことになった。



もちろん、ダブルベッドに3人で寝る、という荒業を。

二人でも近いのに、3人だと、もはや心臓の鼓動や、息まで、聞こえる。

それでも、異様な光景を展開しながらも、寝ていた。

ハヤテは、アテネとヒナギクに抱きしめられ、アテネを抱きしめていた。

……アテネは気がついていた。

ハヤテが寝入ってから、こっそり、ハヤテの唇に、キスを、した。

## 21. 平和

次の日、ミコノス島には、平和が戻った。

「じゃあ、昨日、途中で中断してしまいましたし、……今日こそは行きましょう！」

と、海に行くことに決定した。

「アーたんも、せっかくだなら、遊んでいったら？」  
とハヤテ。

「そうよ。天王州さん。水着ならありますよ。」  
とマリア。

「……なら、お言葉に甘えて。」

皆、あちこちに散らばっていた。

ハヤテ・ヒナギク・アテネは遠泳。

ナギ・伊澄は、砂浜でレベルの違うアート（？）、咲夜はそれを眺め、

ワタル・一樹・歩は、ひたすら波に揺られ、

三人娘は、浮輪をつけて波に。

マリアとサキは、パラソルの下で優雅にお話を。

マリアは、ほっとしていた。

さて、

side 遠泳組

ハヤテ達は、ずいぶん遠くまで泳いだ。

「それにしても、ハヤテ君、本当に体力あるわね。」  
とヒナギクが感嘆の声をあげる。

するとアテネが、  
「今はそうだけど、昔は水の入ったバケツもろくに運べなかったのよ。」

ヒナギクは、  
「え!?! そうなの? ……想像できない。」  
と驚きの表情。

「そうなんですよ。……自分でも今となっては想像できない……。」  
ハヤテは遠い目をする。

それを見て、クスッ、と笑うアテネ。

side 砂浜アート(?)組

「ガン〇ムの立体模型を砂浜で、って……んなことやるやつが、」

どこにおるかい！と突っ込もうとして、

「おい、咲。静かにしてくれ。崩れてしまうでないか。」

「そうよ、咲夜。」

二人はめっちゃくちゃ本気で作っていた。

「……。」

つつこみどころを失った咲夜は、ただ黙ることしかできなかった。

side 波に乗っている組その1

「ああ……楽だな。」

ワタルはのんびりと、波に揺られていた。

「ふう、このまま、空も飛べちゃったりするんじゃないかな？」  
歩が相変わらず意味不明な発言をする。

「「空はとべねえ（ない）よ！」」  
ワタルと一樹が突っ込む。

そこで、ふと一樹が思いつく。

「姉ちゃん、サーフィンやらない？」

「サーフィン！？いいねいいね、あ、でも、サーフボードがないよ……。」

歩は一度上がったテンションが、下がった気分。

「おいおいおい、ここはナギの所だぞ。マリアさんに頼めば、貸し

てくれるんじゃないか？」

ワタルがさも問題なさそうに、言う。

「あ、そっか！じゃあ、やろうぜ！」

一樹がそういつて、砂浜に向かった。

side メイドカップル

「ふう、たまには、こうやって休むのもいいですね、マリアさん。」

「そうね。ナギも伊澄さんと遊んでいるみたいですしね。」

マリアは、ニコリ、とほほえむ。

「そういえば、最近、ナギちゃん、綾崎君に依存しなくなりましたね。」

サキがそういう。

「……確かに、ヒナギクさんと付きあい始めて、随分独り立ちしようとしていますわね。」

マリアが、つぶやく。

「まったく、ナギちゃんと同じ年って言うのに、うちの若は……。」「とサキはぼやく。」

「レンタルビデオ店長をしている地点で、既に『独り立ち』ではないですか？」

とマリアは突っ込む。

「でもですね、マリアさん。この前ですね……。」「

と、自分たちの主人の話で盛り上がる二人。

そして、side 生徒会三人娘

「ん、美希ちゃん、そのカメラって……。」

「ふふふ、よく気がついたな。完全防水かつ堅牢で、日本海溝の最下部でも使えるという、ソ○ーの、動画も撮れるカメラだ。泉、復唱だ。」

「ふえ！？え、えっと、完全防水かつ堅牢で、日本海溝の最きゃ、いひゃっ、舌かんだ……。」「  
言えませんでした。」

「こりゃだめだな、泉。」

「ひどいよ」

その様子もばっちりとられていました。

そして、side 三千院 帝@三千院家本宅

（王玉の試練、というのは、もしかして、トラウマの克服、なのか？）

帝は、一人部屋で考えていた。

―それにしても。

（綾崎の親、か。あいつは16年間、あんなのに耐えていたのか。）

そして、アテネも、それを全部抱擁してやったのか、と考えると、

（……世の中、金がすべてじゃないのう。）

そう考えると、自分の行いが愚かしく見えるような気もする。

自分は一体、金のために何人を、死に至らしめたのだろうか。

――16歳の若造から学ぶことも、あるのう。

「……借金、どうにかしてやるか。」

そういつて帝は立ち上がった。

第二章      E n d

## 22. 学習会

ご一行は、未だにミコノス島にいた。アテネもなぜかいた。

そんなある日の夕方、

「今日は食事が終わった後、勉強会をしたいと思います。なので、高校生はこの部屋に残ってください。」  
マリアがそういった。

三人娘が不満の声を上げた。

「安心しなさい。私とナギと、マリアさん、愛沢さん、そして天王州さんが、わからないところは、徹底的に教えてあげるから。」  
とヒナギクはそういつて、

「ちなみに、三人は、絶対に逃がさないわよ。」  
そういつて、愛用の竹刀を鬼教官さながら、中央に構える。

「「……」」

もはや絶句するしかなかった、三人娘であった。

夕食が終わり、一樹とサキは部屋に戻った。

ちなみに三人娘が、どさくさに紛れて、二人と一緒にでようとヒナギクに捕まったり。

「では始めます。ちなみに、次のようにつきます。」



といって、指導ペアが発表された。

ヒナギク↓ハヤテ・歩

ナギ↓ワタル

咲夜↓伊澄

アテネ↓三人娘

三人娘は発表されたたん、カチン、と固まった。

それをみたアテネが、

「安心しなさい。しっかり教えて差し上げますから。  
と意地悪く微笑んだ。

（なるほど、組み合わせがとてもマッチしているな。）  
と一人納得するハヤテ。

アテネは、とりあえず、実力をみるため、基本的な重要事項をまとめたテストをした。全教科分だったため、それだけで終わってしまった。

すると、恐ろしい答案が……

（……これは、基本的なことやらった方がいいかしらね。）

アテネは、ため息をついて、次の日のプリントを作ることにした。

すると、

がちやつ。

ハヤテとヒナギクが戻った。

「お疲れ様、天王州さん。……どう？」  
ヒナギクがアテネに聞く。

「……正直、自分の学院に、ここまでひどい成績の人がいるとは思わなかったわ。」

アテネは、沈痛な表情をする。

すると、

コンコン、

「マリアです。」

ガチャッ。

「ヒナギクさん、お頼みされたものをお届けしました。」

「といって、なにやら分厚いファイルと、封筒をそれぞれ三つ、渡した。」

「ありがとうございます。」

「といって、それをアテネの所に持って行き、

「天王州さん、これは、三人の、今までの成績に関するものよ。もしでしたら、参考にするといいと思います。」  
「といって渡した。」

「あら、わざわざありがとう。ちょうど、いま、頼もうかと思っていた所よ。」

「といって、それを見始める。」

それを見て、うつ、と顔をしかめる。

「……担任は？」

「ごめんなさい、私の姉です。」  
ヒナギクも沈痛な表情に。

「……、まあいいわ。私はしばらく、あの子たちのためにいろいろするから、先に寝ていてちょうだい。」  
とアテネは仕事を始めた。

ハヤテは、夜中の二時頃、急に尿意を催して、トイレに行った。

そして、戻ろうとすると、アテネはまだ仕事をしていた。  
ハヤテは、ふと思いついて、厨房に行った。

（あら、もう夜中の二時か。早いわね。）  
アテネは作業しながら、ふと目に入ったパソコンの時計をみて思った。

そう思っていると、

ことん、

と右側に何かおかれた。みると、それは、おにぎり、紅茶だった。  
誰かしら、と思いながら、疲れていたこともあり、紅茶を飲もうとして、手を伸ばした。

そして、飲んで、びっくりした。

―いつも私が飲んでいるお茶だ。

よくよく香りや味を確かめると、それまで私がいつも飲んでいるのと同じ。

まさか、と思っておにぎりを食べてみると、……、その味には、覚えがあった。

「ハヤテ？」

ハヤテは寝ていた。しかし、よく見ると、一度起きた後がある。

（……、まったく、昔みたいに、自慢してもいいのにな。）  
と微笑んで、きれいに平らげると、また再開。した

つづく。

## 23. 学習会(2)

そして、朝。その日は、9..30になったが、朝食の席で、重大発表がなされた。

「天王州さんから、昨日の状況を見て、少々勉強が足りないのではないか?ということを理事長として申し上げられました。よって、本日から、夕食後は、勉強の時間とします。」

「「「なんだって!?!」」」

三人娘は血相を変えた。

「あなたたちのことよ。勉強が足りない、というのは。」

アテネが三人娘を指して言う。

「昨日ね、あなたたちの成績を天王州さんにお見せしたの。」  
とヒナギクも言う。

「まあ、私も見させていただきましたが……確かに、そう言わざるを得ません。」

マリアも、引き攣った笑みを。

「よって、お前ら以外が賛同すれば、やる。バカに拒否権はない!」  
ナギがぐさっ、という。

「というわけで、皆さん、よろしいですか?」  
と軽く流して聞く。

「よろしい、どころが……」

「逆に嬉しいんじゃないかな。」  
ワタルの台詞を奪う歩。

「わからないところが分かりますしね。」  
ハヤテがとどめを差す。

「というわけで、決定よ！」  
ヒナギクが高らかに宣言する。

その日は、（ハヤテの計らいにより、アテネのために、）夕食までは自由行動に。

「私はもう少し寝て、仕事するわ。」  
とアテネは部屋に。

「ちょっとトレーニングを。」  
とヒナギクは道場（あるのか？）に。

そして、ハヤテは屋敷の掃除をすることに。

掃除も終わって、厨房に行くと、既にマリアさんがいた。

「マリアさん。終わりました。」

「ありがとうございます。……なんだか今日は一段と気合いが入ってますね。」

マリアは驚きと感心の入り混じった目でハヤテを見る。

「はい。教えてくれた張本人がいらっしゃいますから。」

「……まさか、それも天王州さんが？」

「はい、そうですが、どうかしましまか？」  
ハヤテは不思議がる。

「いや、なんでもありませんよ。」  
マリアが慌てて否定する。

「あ、そういえば、皆さんの昼食は、どういたしますか？」  
ハヤテが、ふと聞く。

「そう、そのことですが、……」  
とマリアが後ろを指す。

「全員分弁当を用意しましたので、それを皆様にお届けしようかと……。」

マリアの後ろには、弁当、というか重箱が、12個。

「お、お弁当って……こんなに大きかったでしたっけ？」  
ハヤテが驚きのあまり言葉を失う。

「おそらく、みなさんお腹を空かせているでしょうから。」  
と、少し悔しくて気合いの入ってしまったマリアが弁明をする。

「そ、そうですね……。」  
おそらく四人ほど部屋に籠ってそう、とは言えないハヤテ。

「では、ハヤテ君は、ナギ、西沢さん、天王州さん、ヒナギクさんに。」

と、ワゴンを持ってきて、その上に弁当を載せる。

「は、はい、分かりました。」

と言うと、ハヤテは紅茶セットと、種類の違う茶葉をいくつか載せて、厨房を出た。

（はて？ おかしいですね。いつもナギが飲むお茶以外にも持って行ってますね……。）

まず、ハヤテはアテネの所に向かった。

アテネは丁度起きたところらしく、寝ぼけ眼をこすっていた。

「アーたん、調子はどう？」

「うーん、さすがに徹夜は堪えるわ。」

といいながら伸びをする。

「やっぱり。仕事は終わりそう？」

といいながらハヤテは紅茶を淹れる。

「うん、もうすぐ……って、ハヤテ、この香り、もしかして……」  
ハヤテの紅茶を淹れる手を見る。

「そうだよ。いつも朝に淹れていた紅茶だよ。」  
といって、アテネに渡す。



「……、昔より上手くなったわね、ハヤテ。お陰で爽やかに目が覚めたわ。」

「そ、そう？……よかった。」

と嬉しそうに顔を緩める。

「これ、お昼の弁当。置いておくね。」

といってハヤテは部屋を出て行った。

「三千院さん、少し羨ましい、な……」

とアテネはつぶやいた。

その後、ナギと西沢姉弟に（なぜか三人ともナギの部屋にいた）に紅茶を淹れて、弁当を渡したあと、道場にハヤテは向かった。

道場では、ヒナギクが素振りをやっていた。

「ヒナギクさん、お昼お持ちしましたが、どうしますか？」

「あら、もうお昼？……じゃあ、一緒に食べよう！」

とヒナギクはタオルで汗を拭くと、ハヤテと一緒に弁当を持って、外の林に出た。

「ねえ、ハヤテ君。」

「はい、何でしょうか、ヒナギクさん。」

「いつも、敬語でしゃべっているけど、どうして？」

ヒナギクは、ここ最近、ずっと気になっていたことを聞いた。

「……自己防衛本能、ですかね。」

難しい顔をしてそう答える。

「えっと……どういうこと？」

ヒナギクの頭の上に疑問符が浮かぶ。

「自分も、相手も傷つけないように、わざと一歩下がる、という感じですよ。」

ハヤテが、言葉を探しながら説明する。

「……敬語、やめない？　なんか、ハヤテ君が遠くにいるような気がするの。」

「え、ですが……、」

「それとも、私のこと、信頼できないの？」

ハヤテは、しまった、怒らせた、と

「え、ち、違います、そんなことはないですよ、本当に……」  
と全力で否定する。

「じゃあ、決定ね♪」

半ば強引に決めたヒナギク。

「……分かりました。」

といって、ハヤテは、

「じ、じゃあ、いまから、どうする？」  
と、半ば片言で話していた。

つづく

## 24. 運命のPrice

そして、夕方。

「とうとう来てしまった……。」

「ああ……。」

「どうしよう……。」

三人娘の表情は絶望に近かった。  
なぜなら、夕食を食べ終わったら、

「「勉強、か……。」「」

そこにハヤテが通り掛かる。

三人は、救世主、とばかりに、

「「ハヤ太くん、私達を逃がしてくれ!」「」

とハヤテを押し倒す。

ハヤテは苦い表情をしながら、

「申し訳ございませんが、今回ばかりは……。」  
と言うと、

「どうせヒナに釘を刺されているんだろ?」  
と理沙。

「まあ、それもありますが、ほぼ徹夜で、寝る暇惜しんで、準備し

てくださっているのに、それを見ていた僕が、御三方を逃がすのは  
いかなものかと……。」

そのハヤテの言葉に、

「ん？理事長様が？」  
と美希。

「それなら、……」

「行かないわけにはいかないね。」

といって、三人は戻った。

そして夕食後、第二回勉強会が始まった。

ヒナギク、ナギの所は、いつも通り、自学自習を基本としたやり方。

伊澄と咲夜は……何をやっているのだろうか？

そして、アテネのところ。

アテネは、移動式のホワイトボードと自作のプリントを使って、授業のようになっていた。

三人は、必死に理解しようと授業を聞いていた。

「あら、あの子達があんかに真面目に授業を聞くなんで、珍しいわね。」

とヒナギクは感心する。

「何しろ、アーたんが、授業終わったあとの小テストで、合格しないと寝させない、とか言っているらしいで……、らしいよ。」  
つい敬語で話しそうになるハヤテ。

「……それは確かに授業を聞かない訳がないわね。」  
アテネの計算ずくの作戦にもはや驚くしかないヒナギク。

そうこうしているうちに、残すところミコノス島での休暇もあと一日となった。

なんだかんだで、ミコノス島に夏休みの半分はおろか、約90%はミコノス島にいた。

実は、アテネは、その間にある事をしていた。

最終日の夜、アテネは、ハヤテ、ナギ、マリアを食堂に集めた。  
マリアには、数日前にアテネに伝えられていた。

「ハヤテと三千院さんをお願いします。」  
アテネは畏まって言う。

「私を練馬区の三千院家・別宅に住まわせていただけなのでしょう  
か？」

しばらく沈黙が続いた。

「え、えっと……どういうこと、アーたん？」

そして、アテネはナギの方を向き、

「私も一応三千院家に次ぐ大財閥・天王州家の当代当主。無料で住まわせてもらおうとは考えてはないわよ。……んーそうね、とりあえず、そっちの当代当主とは、ハヤテの借金、1億5680万4000円の完済と、財閥の事実上の合併、どうか、と話はついいてるのだけど。」

その言葉にナギが反応する。

「ハ、ハヤテの借金の完済！？　そ、そんなことをしたら、ハヤテは……」

ナギが泣きそうな顔をする。

「ナギ、大丈夫ですよ。ハヤテ君は三千院家と終身雇用契約を結んでいますから。」

マリアはそう言って、その契約書を出す。

「第一お嬢様、僕は、お嬢様の命は僕の命をかけてお守りすると。その言葉に、今も偽りはありませんよ。」

「ハヤテもそういう。そして、アテネのほうを向き、

「ただ、僕としては、それ以前に、アーたんには、つい最近、2億696万7000円の借金を肩代わりした上に、債権放棄までしてくれたばかりなのに、さらに……」

と言ったところで、

「ハヤテ。それは、私からのお詫びよ。」  
とアテネが言う。

「へ!?!...えっと、何の?」

ハヤテが心当たりがない、という顔をする。

「あなたが幼稚園のとき、あなたを王族の庭城から追い出したことよ。もし、あそこで追い出さなければ、きっとハヤテはこんなにもいろんな事で苦しむことはなかったと思う。」  
アテネがうつむく。

ハヤテは沈黙する。

「ハヤテ。私は別にかまわんど。ハヤテさえよければ、だが。」  
ナギが唐突にそういう。

「お、お嬢様!?!」

ハヤテはまさかの返答に驚いた。

「正直、天王州家との事実上の合併、というのは、なかなか興味深い。ハヤテも残るようだし、な。」

ナギは笑った。

「ちなみに、天王州さんが三千院家に来た場合、新たに天王州さんの執事にもなりますよ。」

マリアも意味ありげに言った。

「あとは、ハヤテ次第だぞ。」

ナギがそっくり、三人はハヤテを見る。



しばらく、沈黙が続いた。

そして、ハヤテは、決心が付いた。

（でも、何て言おう？……そうだ！）

「アーたん、また、あなたの執事をさせていただいてもよろしいでしょうか？」

と聞く。

アテネは、ふふつ、と笑って、

「ええ、いいわよ。よろしくね、ハヤテ。」

こうして、ハヤテの『お嬢様』に、アテネが入った。

ちなみに、

「今回の件で、今まで借金に当てていた給料が、来月からハヤテ君の手元に行きます。あと、さらに天王州家からも、給料がくるので、ざっと、月〇〇〇〇万位です。」

ということ。

ハヤテは改めて執事の給料の高さに驚いた、とき。

第二章      E n d

## 24. 運命のPrice (後書き)

第二章完結です。

## 1. 導入（前書き）

第三章始まりです！

## 1. 導入

そして、夏休みも明け、また新たな学校生活が……

「なぜ太陽は昇るのだ!」  
不機嫌なお嬢様が一人。

「たまには昇らないからこそ、有り難みを感じるというのに、」  
とどこかで聞いたことのあるような、太陽に文句を言っている傍らでは、一人の執事が困って立ち尽くしていた。

ここは、東京都練馬区東の三千院家・別宅。

そこには、ひとりの、いや、二人のお嬢様と、一人の執事、そして一人のメイドがいた。

その執事は、綾崎ハヤテ(16)。

つい一昨日までは、1億5680万4000円の借金を抱える借金執事だった。

家事全般が完璧、サバイバル能力も兼ね備えるスーパー執事。

そして、先程から喚いてるお嬢様は、三千院家次期当主・三千院ナギ(13)。

大財閥・三千院家の当代当主・三千院帝の孫。

「マリアさん、なにやらお嬢様が不登校の言い訳のようなものを始めましたが……。」

「ハヤテ君、日本語は正しく使わなければいけませんよ。『言い訳』のようなもの』ではなく、単なる『言い訳』ですよ。」

それならなおさらまずいのでは、と心の中で突っ込むハヤテ。

このツツコミ所満載の(?) コメントをしたのは、マリア(17)。才色兼備、謎めいた過去……。

もう、何が何だかよく分からない、スーパーメイド。

そのとき、

「私の空耳かしら? この部屋から、なにやら不登校の言い訳めいたものが聞こえたのですが。」

「あ、おはよう、アーたん。」

「おはよう、ハヤテ。おはよう、マリアさん。」

「おはようございます、アテネさん。」

この鋭いコメントをしたのは、天王州アテネ(16)。

三千院家に唯一匹敵する大財閥・天王州家の当代当主、兼、白皇学院理事長。

なぜ天王州家の当主が三千院家に?、と言うのは、また後ほど。

「ぬあっ!? ベ、別に、学校に行きたくない、とは、一言も言っていないでないか!」

なぜかあたふたと否定するナギ。

「あら、そうですか、なら、早くネグリジェを着替えて、準備をなさなくていいのですか、お嬢様。」

マリアが皮肉たっぷりと言う。

三人はそれぞれの恰好をして門を出る。すると、

「おはよう、ハヤテ君。」

「あ、おはよう、ヒナギクさん。」

ハヤテに満面の笑顔で挨拶した桃髪の少女は、桂ヒナギク（16）。  
白皇学院生徒会長。マリア同じく才色兼備。そして、……ハヤテの  
彼女。

「おっ、おはよう、ヒナギク。」

「おはよう、ナギ。あと、おはようございます、天王州さん。」

「おはよう、ヒナギクさん。」

「珍しくちゃんと……って、当然か。」

ナギが来ていることに、一瞬驚くが、アテネがいるのを見て納得する。

「さすがに理事長の目と鼻の先でサボりはしない！」

ナギがえぼる。

「「当然よ！」」<sup>です</sup>

三人に見事突っ込まれる。

「しかも、最初は、その『理事長の目と鼻の先』でサボろうとして  
いたようだけどね、お嬢様。」

アテネが皮肉る。

「うっ……。」

そして、ハヤテとヒナギクは朝の生徒会の定例会議のため、

「ハヤテ君、急ぎましょう。」

「うん、そうだね。」

といって、二人は手を繋いで駆け足。

すると、後ろから、

「おい、泉、美希。あそこに朝からアツアツのカップルがいるぞ。」

「おお、本当だ。周りに陽炎が見える。」

「何だかアツすぎて、汗が出てきたよ〜♪」

なにやら三人組がとやかく言う。

「もう、何よ、三人とも。」

ヒナギクは頬をふくらます。

「おう、おはよう、ヒナ。まさかヒナだとは思わなかった。」  
しらっ、と美希が言う。

「うそおっしやい!」

この三人組は、上から、

朝風 理沙、

花菱 美希（政治家の娘）

瀬川 泉（ソ〇一の社長の娘）

。通称、生徒会三人娘。

「ヒナギクさん、急がないと、遅れちゃうよ。」

「あ、そうだわ、じゃ、また後でね。」

といって、二人は驚異的な速度で走り去った。

「まったく、朝から忙しい二人だな。」

理沙がそうつぶやく。

「それよりも、気がついたか、泉、理沙？」

美希がスクープ！と言う顔（どんな顔だ？）をしていた。

「にはは、私は気がついたよ♪」

「ん？なにがあった？」

理沙は気がつかなかった様子。

「ハヤ太君が、ヒナに対して敬語じゃなかったぞ。」

……。

「何だって!？」

理沙が驚く。言葉を続けようとしたとき、

「あら、朝から元気わね。」

「少し黙れないのか、お前らは。」



その言葉に三人は振り返る。

「あれ、ナギちゃんと、……え!？」

三人がはっとして、

「「「り、理事長!、お、おはようございます!」「」「三人は頭を深く下げる。」

ふふふ、と意味ありげな笑いをアテネは残して、二人は去った。

「えっと、……なぜ、ナギが理事長と?」

三人は首を傾げた。

ちなみに、

屋敷にて。

「私も屋敷にいますが。」

クラウスは、また忘れられた。

「まあ、いいじゃないですか、いつものことですから。」  
さらっとマリアにも流された。

そして、マリアにも思い出されないのが、……

「おれっちは無視かよ!」

存在はおろか、出番すらほとんどなかったタマであった。

## 2. 信任投票

放課後、休み明けの会議をするために（主に信任投票関連）、役員は生徒会室<sup>生徒会室</sup>の間に。

そして、相変わらずの慣れた手つきで、議題をおわらせ、

「では、他に議決事項・連絡事項はありますか？」  
といったその時、

ボタン！

勢いよくドアが開いた。

「急にごめんなさい。今大丈夫かしら？」  
そこには、アテネと、キリカ。

そして、

「どうやら、私が白皇学院から離れている間にこの理事長代理が随分とご迷惑をおかけしたようね。白皇学院理事長としてお詫び申し上げますわ。」

とアテネは頭を下げ、キリカの頭も下げさせた。

「気になさらないでください、理事長。災害スクリンプラーとしか思っていないせんから。」

とヒナギクがぼっさりとキリカを切り捨てる。

「ふふっ、災害スクリンプラー、いい名前ね、キリカ。……あなたにしてはネーミングセンスがいいわね。」

アテネがヒナギクに言う。

「あ、いえ、命名したのは私の前の生徒会長のマリアさんですから。」  
とヒナギクがあまり否定したくない、という顔をしながら否定する。  
「あら、そうなの？、……とりあえず、話が逸れたから元に戻しましょう。」

アテネは、咳ばらいをして、  
「明日からまた理事長に復職しようと思っていたんですけど、これが、」  
と言って、キリカを指す。

「役員の全会一致をなしに理事長の復職はできない、とかよまい言行ってるから、……」

「分かりました。直ちに採決をとります。」  
ヒナギクはそういつて役員の方に向き直った。

「では……「待った！」」  
話の腰を折ったのはキリカだった。

「今日じゃなくてもいいだろ？明日以降……」  
キリカはそういう。

「偽理事長。天王州理事長は即日理事長職に復職したい、とおっしゃっているのよ。」  
ヒナギクは話の腰を折られたことに苛立ちを隠せない。

「では、改めて、採決を「待っ『うるさい！』……」採決をとります。」

す。」

無理矢理封じた。

「では、天王州アテネ理事長の復職に賛成のもの、挙手をしてください。」

その瞬間、全員の手が挙がった。

「手を下ろしてください。よって我が生徒会の結論は、『一も二もなく賛成』です。」

ヒナギクは、アテネにそう報告する。

「どうもありがとう、ヒナギクさん。」

アテネはにやりと笑う。

「理事長、明日、全校集会を開くのですが、その報告は……」  
副会長の千桜が聞く。

「あら、そうなの？わかったわ。じゃあ、準備をよろしく。」

「わかりました。では、詳しいことは後ほど綾崎君を通して連絡します。」

千桜はそういって、書類の作成を始めた。

次の日。

講堂には全校生徒がいた。

壇上には、生徒会役員と、アテネ、キリカがいた。

とりあえず、まず、ヒナギクが紹介をした。

「おそらく、ほとんどの人は、始めまして、ですが、白皇学院理事長・天王州アテネさん。事情があつて、理事長職を代理の葛葉キリカに託していましたが、先日、復職なされました。」

紹介を受けたアテネは、

「紹介にあずかりました、天王州アテネです。まず、皆様に、復職にあたって、皆様にお詫び申し上げるわ。何の事かは言う必要はないわね。以後は正常な学校運営に取り組んでいきたいと思います。」

といって、アテネは一礼して、退場した。

「では、次の議題にいききたいと思います。只今より、生徒会役員信任投票を行います。」

ヒナギクがそう宣言する。

生徒はすっかり忘れていたらしく、ああ、そんなのあったな、という空気が流れた。

「ここからは、選挙管理委員会代理・捜査官長官に委任します。」

ヒナギクがそう宣言すると、いきなり、スピーカーから、

「私が捜査官長官だ。今から投票を始める。全員、おのこの携帯・スマホなどの情報機器を起動せよ。」

威圧的な声におおのきながらも、全員出した。

「ただいまより、その情報機器にアプリケーションを転送する。そのアプリケーションの指示に従え！」

というと、全員から、おおお、という声。

どんな技術だよ、と内心でとても驚いていた。  
それを読んだのか、千桜が、

「これは、M・H・E・製だが。」  
とつぶやく。

まあ、それはさておき、

「では、今から一分以内だ！」

……そうして、一分が経過した。

投票が終わり、結果が前面モニターにでた。

|     |       |
|-----|-------|
| 投票数 | 1000票 |
| 賛成  | 998票  |
| 反対  | 1票    |
| 無効票 | 1票    |

……予想以上の結果が出た。

「と、投票ありがとうございます。賛成多数で承認されました。」

その後、役員はまた天球の間に。

「よかった、これでやっと気にせずに生徒会活動ができるわ……。」

ヒナギクは机に突っ伏せる。

「まったく、本当によかったです……。」  
ハヤテも机に突っ伏せた。

そして、二人は見つめあって、ふふっ、と笑った。

「会長も、綾崎君もマイワールドに入らないでください。」  
千桜が注意する。

「ご、ごめん……。」

「すみません。」

二人は顔を赤くしてうつむく。

「それにしても、本当に仲がいいわね、ふたりは。」  
と愛歌がいいながら、ジャプニカ弱点帳を出し、

「本当に、ね。」

といいながら、なにやら書き始めた。

（な、何をかかれているの？）

（ぼ、僕もわからない……。）

「でも会長、私も副会長ですから、会長が綾崎君が大好きなのはよくわかりますが、二人だけで愛の逃避行、的なことはやめてくださいね。」

と千桜はいつて、ヒナギクのほうを見ると、顔を赤くして顔をパクパクしていた。

「あれ、会長？」

といってハヤテのほうを見る。ハヤテも、頭から湯気を出していた。

「おそらく、二人とも、愛の逃避行、を想像してしまったのだろう。」  
美希はそういう。

「まったく、執事失格ですね。」

野々原は竹刀を出すと、

「面！」

とハヤテの頭を打つ。

ハヤテは机に顔を打ちつけ、

「ぐえっ……」

と奇声を発して、目が覚めた模様。

「ハ、ハヤテ君！？、大丈夫？」

ヒナギクがハヤテの奇声に驚いて振り返る。

「だ、大丈夫……だよ。」

と半分大丈夫でなさそうな返事。

「それで大丈夫でないなら、執事としても、彼氏としても失格！」  
野々原が切り捨てると、

「うおあああああ！」

と、気合で立ち上がる。

それを見て、

「ハヤ太君って、まじめそうに見えて、意外と馬鹿なところあるよな。」

と美希。それで我慢の限界が切れたのか、全員が笑い出した。ヒナ



ギクも。

「え、ええええ!？」

ハヤテは反応に困った。

それを見て、さらに笑う生徒会役員だった。

つづく。

### 3. 学園祭

白皇学院では夏休みが明けると、学園祭のシーズンである。

天下の白皇学院、学園祭は全国放送で取り上げられるほど有名で、ひな祭り祭りよりも、大きな規模である。中にはそれぞれの私財を思う存分投入するものもある。

もちろん、主催は白皇学院生徒会。理事会は学校から出す予算以外の事は一切何も言わない。様は、不法行為以外は何でもOK、だけど責任は全部生徒会で負いなさい、ということだ。

そして、今、生徒会室では、大量の紙と、役員がいた。何をしているのか？それは……

「次、コミケもどき（おっ、少しやってみたい……。）」  
千桜が淡々と読み上げる。

「却下、スペースと管理面で予算と人員に無理があるわ。」  
ヒナギクが理論的に潰す。

「まあ、当然ね（やっぱりだめか……。）」  
からっ、と流してはいるが、内心大ダメージの千桜。

「次、……」

そう、学園祭の出し物の仕分けをしているのだ。  
例年は、生徒会で提示したものを選択してするのだが、今年は全校生徒から公募した。発案は、ハヤテと野々原だ。

そして、今、その大量の意見を一つ一つ考えているのだ。

さて、そんな感じで、熱血していった。

ヒナギクが少し喉が渴いて紅茶に口をつけたとき、

「次、……え？、……ヒナギク・オン・ザ・ステージ。」

千桜が、何じゃこりゃ、という感じで言う。

「ブフウツ！」

千桜の読み上げた案にヒナギクが紅茶を吹き出した。

「ち、ちよっ、どういうこと!？」

ヒナギクがむせながら聞く。

「様は、ひな祭り祭りの時のようにしろ、という事だろう?」  
美希が聞く。

「まあ、そのようなことでしょう。」

千桜が淡々と言う。

「え、えっ、でも、そんな……。」

ヒナギクは顔を真っ赤にする。

「しかし会長。実はですね、……。」

と愛歌は紙の半分くらいを取って、

「これ。全て同様の趣旨の投稿なんですよ。」

「……ざっと820枚くらい、というところですか？」  
ハヤテが目視で枚数を出す。

「そうですね、825枚でした。」  
千桜は何でわかったのか不思議に思ったが、一応事實は述べた。

「ハヤ太君、なぜ分かる？」  
理沙が、千桜の（というよりこの場全員の）疑問を代弁した。

「いや、S○Kで……」  
S○Kでそんなのやってたっけ、っ逆に疑問を深める回答だったよ  
うだ。

「まあ、S○Kの件は置いておきましょう。」  
野々原が冷静に話を戻す。

「にはは〜、とりあえず、ヒナちゃんの話がメインだよ〜♪」  
泉も話を戻す。

「私は、ここまで大勢の声があるのに、無視するのは、さすがにま  
ずいと思うわよ。」  
愛歌が現実を述べる。

「まあ、こうなったら、多数決でしょう。」  
野々原が鉛筆を置く。

「あ、そ、そうよ、予算！そんなことをしたら……。」「  
ヒナギクが逃げ道を見つけた、といわんばかりの言いよう。

「それに関しては一通り意見を見た理事長様からの所見が書かれて

ます。

『経済効果が十分に期待でき、全校生徒の大半からの要望が来ていること、そして中には理事会に直訴する兵もいた点より、この案を通す場合に関しては、特例的に予算および警備の人員をほぼ制限なしで提供する。』……って、……会長、理事長の任印まで押されますよ、これ。』

千桜が驚く。

「これはもう決定打だね♪、ハヤ太君、どう思う？」  
泉がハヤテに話を振る。

「えっ、僕ですか、えっと……。」  
ハヤテは少し考えてこういった。

「僕は賛成ですよ。」

「え、ちよっと、ハヤテ君！」  
ヒナギクが顔を真っ赤に、

「だって、……」

ハヤテはヒナギクの耳元でなにやらささやくと、ヒナギクは体中の力がぬけた。

頭から、湯気が。

「い、いいわよ……。」「  
ヒナギクがやっこのことで口を開く。

「「「よし、採用な！」「」」  
三人娘が万歳する。

ヒナギクは煮え立っていた。

（ず、ずるいよ、ハヤテ君。）

「会長？」

千桜が声をかけるが、ヒナギクは動かない。

「……綾崎君、会長が使い物にならないから、代わりにやってくれるかしら？」

千桜があきれる。

―そうして、今年の学園祭の出し物は決まった。

・調理系・物販はすべて許可する。ただし、調理系に関しては、保健所の許可を義務とし、材料費は自費とする。

・体験型アトラクションは、体験者の安全が保障できるものだけに限り許可する。なお、安全を確保するために特殊機材が必要な場合は、学校側で用意する。

そして、

・本年度は、学園祭最終日PM1…00より、生徒会主催（メイン・会長）のコンサートを行う。他にエントリーする人・団体は一週間以内に生徒会へ。

ただし、入場料500円を徴収する。その代わり、このイベントにかかわるすべてのことにおいて、理事会で負担する。

つづく。

#### 4. 学園祭(2) (前書き)

お待たせしました！これから隔日で執筆して行きます！

#### 4. 学園祭(2)

さて、その一週間後。

「なんだか、激しくデジャヴな感じがするのは、私だけ……か？」  
美希がポツリと呟く。

「き、気のせいよ……」  
ヒナギクはそう言いながらも、額には汗が浮かんでいる。

えっと、取り敢えず状況を説明すると、コンサートの出演希望の紙が、学校外から大量に來たのだ。

当然といえば当然だ。全国放送で生中継され、お茶の間に届くのだから。

「こんな事だろうとおもったわ。今日来ておいてよかった」

後ろから声が聞こえて来て、振り向くとそこには、

「「「り、理事長……」」」

白皇学院理事長、天王州アテネがそこには立っていた。

「ちょっと桂会長と綾崎副会長、おいでなさい」  
アテネは改まって二人を呼ぶ。

二人は改まって呼ぶアテネに笑いを堪えながらその後ろを付いて行



った。

理事長室に入った途端、三人は一斉に吹き出した。

「「「可笑しいよ!」」」

全くである。

まあ、しばしご歓談をして、本題に入る。

「どうするの?」

アテネが二人に問う。

「どうするって言っても……ね」

ヒナギクは首を捻る。

「ハヤテは何か考えあるかしら?」

アテネは何か答えなさいよ、というオーラを出しながら聞く。

「一度、理事会に付託してもいいかな?」

ハヤテはアテネに聞く。

「別に構わないけど、どうしてか聞かせてもらえるかしら?ここで説明できないようなら他の役員は納得しないのではないかしら」

すると、ハヤテはおもむろに一枚の紙を出す。

「この紙がどうしたのかしら?」

アテネは不思議そうに首を傾げる。

それもそのはず。それはさっきの紙束の内の一枚であり、そこには団体名に「AKB48」と書かれてあるのだから。

「何がおかしいのかしら？」

するとハヤテは、

「アーたん、そこに書かれている事務局の住所、覚えていない？」と聞く。

「ん？別に……あれ？何処かで見たような……」

すると、ハヤテはもう一枚の紙を出す。

「これは……もう私が返した借金の借用書……あら？」

アテネは二つの書類を見比べて、

「住所が同じじゃない?!」

驚愕の事実を発見した。

「そういう訳。わかってもらえた？」

ハヤテはアテネに聞く。

「ええ。わかったわ。だけど私たちがするのはその団体が正当な団体かどうかの調査しか行わないわよ」

とアテネは先に釘を刺す。

「分かっているよ」

ハヤテはヒナギクを見て、そういった。

結局、それでも10分の1程度にしかならなかった。

「ここからは根気よ！」

ヒナギクはそう宣言した。

いろいろな団体があった。

ベルリンフィル、N響のようなプロオーケストラ、桜高校軽音部（放課後ティータイム）のようなアマチュアバンド、ダ●ンタウン、は●にゃのようなお笑い、ALFEE、嵐のような、などなど……

議論は白熱した。

まあ、当然である。あれやこれやとどんどん意見が出てはぶつかり、……

そんなこんなで一週間後。

「やっと終わったわ……」

ヒナギクは机に突っ伏した。

「ああ、やっとだな」

理沙も溶けた。

「みなさん、お疲れ様です」

ハヤテは、なぜか全員に紅茶をいれている。

「……時にハヤ太君、君は疲れないのかね？」  
美希が尋ねる。

「これくらいなんて事ありませんよ」

ハヤテは当然の様に言う。

（相変わらずすごいな、ハヤテ君……）

ヒナギクは机に突っ伏しながらハヤテの方を見る。

すると、ハヤテと目が合い、二人で微笑み合う。

相変わらずのバカップルぶりに周りは笑いを堪えていた。

つづく

## 5. 学園祭(3)

さて、そんなこんなで、学園祭一週間前になった。

生徒会役員はてんやわんやだった。

もちろん、ハヤテも例外ではない。

「このままじゃ終わらないな……」

冷静に千桜はつぶやいた。

今回は特に外部からいろいろな方をお呼びする為、色々例年に比べて、する事が多いのだ。

よって、肝心の装飾等が終わらないのである。

「この時間だと、もう時間外活動の申請も出来ませんですね」  
ハヤテも冷静に言う。

「じゃあ、ナギちゃんところでやろ〜よ♪」  
泉が提案する。

「そうか、三千院家のお屋敷なら必要な物が全部揃っているしな」  
美希が、そういえば、と言う顔をして言う。

「じゃあ、決定だな」  
理沙は当然であるかのように言う。

「ち、ちょっと待ちなさい！まだハヤテ君はいいとも何とも言っていないわよ！」

ヒナギクは三人娘の暴走を止めた。

「どうせ大丈夫だろう。だろ、ハヤ太君」  
美希が聞く。

どうやら暴走は止められなかった模様。

「大丈夫だとは思いますが、一応マリアさんに聞いてみます」  
と言ってハヤテは携帯を出して電話をしに天球の間を一度出た。

その1分後、

「大丈夫だそうです」  
とハヤテ。

「そうと決まったら準備するか！」  
理沙はハヤテが言い終わらないうちにそう言った。

「ですが、この荷物はどうするのですか？」  
野々原が言う。

「あ……」  
一同、静まる。

その時、

「あ、マリアさんから電話が」  
マナーモードにしていたハヤテの携帯が振動した。

『いまそちらに三千院家のへりが向かいました。おそらく、荷物はどうしようと困っていたでしょうから、荷物はそれに入れてくださいね』

「ありがとうございます」  
と言いながら、相変わらずの洞察力に驚いていた。

その旨を説明すると、  
「驚異的洞察力だね……」  
とヒナギクも額から汗が出ていた。

そんなこんなで屋敷に一行は到着した。

「こんばんはー!!」

するとナギが出てきた。

「なんだか今夜は騒がしくなりそうだな……」  
と一言。

全くである。

その後、役員は食事を美味しくいただいたあと、作業に取り掛かった。

一三時間後。

「「「やっとなつた……」」」

と言っても、実質上働いたのはほとんどハヤテ、ヒナギク、千桜。  
あとマリア。

「今日はもう遅いですから、皆さん泊まっていっただろうですか？」  
マリアが提案する。

「じゃあ、お言葉に甘えて……？」  
とちやっかり泉。

「こら！」  
とヒナギクが注意するも、

「お……と、ハヤ太君と寝られるのに嬉しくないのか、ヒナは」  
と美希に耳元でこっそり言われ撃沈。

そのころ、理事長ことアーたんは、と言うと……

「スー、スー……」

すでにお眠りになられた模様。

さて、オチがあるのかないかわからない感じで、Bパートへつづ  
く。



「小説にパートはないですよ……ね」

## 6. 学園祭（4）

前回のお話

学園祭の準備が終わらなくて三千院家で作業していた生徒会役員。無事作業も終わり、帰る……はずが泊まることに。

ヒナギクが撃沈したため、誰も反対する人がいず、そのまま泊まることになった役員一同。

よく勝手の知っている生徒会三人娘とヒナギクは、いつも通りに千桜はナギと。（いろいろと、ね。）そして、野々原は客間に。

さて、そのヒナギクだが。

……当然、いつも通りなので、ハヤテの部屋に。

そして、ハヤテと談笑するのがお約束だが、今回は、例の「ヒナギク・オン・ザ・ステージ（仮）」の練習というかなんと言うかをすることになっていた。

そんな訳で、実は防音の効いていたハヤテの部屋で特訓を。

そのころ、泉は、一人、物思いに耽っていた。

「ハヤ太君……」

泉がハヤテのことを好きなことは既知であろう。

だが、実は、この少女、未だに諦められていなかったりしていたのだ。

「はああああ……」

今頃、ハヤ太君はヒナちゃんと……と思うと、さらに複雑な気分になった。

それは……

（ヒナちゃん、初めてなんだよね、男の子のこと好きになったの）

「見てくださいよ、奥さん、あそこに物思いに耽っている若者がいますよ、あそこに」

「アラ本当、青春ねえ」

「うにゃあああ!？」

声のする方をみると、そこには、おばさん……ではなく、美希と理沙が。

「ふっふっふ」

そして美希の手には、泉にはとつても見覚えのあるソーのビデオカメラが。

「み、みみ、美希ちゃん、理沙ちゃん、いつから!？」

泉が顔を真っ赤にしてあわてふためる。

「えーっとな、泉が『ハヤ太君……』とつぶやいた…」  
と理沙が報告すると、

「いやあああああーっ／＼／」  
泉は絶叫して、気絶した。

そして次の日。

マリアは困っていた。

（ハヤテ君に、起きなかつたら起こしてくださいと頼まれましたが……）

そこには、しっかりと抱きしめあった二人がベットで横たわっていた。

（どうしよう……）

とその時、ハヤテは目覚めた。

「あ、マリアさん、おはようございま……」  
といって、マリアさんが固まっていることに気がつく。

「マ、マリアさん？」

とふと、現在の状況を振り返るハヤテ。

……だが、ハヤテにはわからない。

とりあえず、仕事を始めることに。

マリアは、その五分後くらいにやっと回復して仕事にもどったとき。

「太陽はなぜ昇るのだ！」

激しくデジャヴなハヤテ。

「いや、前は、なぜ太陽は昇るのだ、と言ったから前とは違うぞ、ハヤテ！」

「……それは作者に文句をいうべきですかね？」  
そう言う問題ではない。

まあ、とりあえず、ナギは学校に行きたくないらしい。

なぜか？それは……

「モンハン3rdの二巡目まだ途中なのだ！」

いやいや色々おかしいだろ、と心の中で盛大に突っ込むハヤテ。

「あら、そうなの？三千院さん」

ハヤテの後ろからアテネ登場。

「なぬっ、ハヤテ、私はサボるとは言っていないぞ、なのに、」  
慌てふためきながら懸命に否定するナギ。

そこに、

「そうだよ、ナギちゃん？」

「一緒に学校に行こうでないか！」

「そうだぞ！」

生徒会三人娘登場。

「い、いわれんでも、いくつもりだったぞ、まったく、」

こうしてナギは学校に行くことになったり。

まあ、そんなこんなで、合宿もどきは終わった。

## 7. 学園祭(5)

そして、学園祭当日。

空は澄み渡り、絶好の学園祭日和に。

ここで説明しよう。白皇学院の学園祭は三日間連続で行われる。

一日目は限定公開（教育関係者、国の要人など）、二日目、三日目は一般公開となっている。

なぜ一日目は限定公開なの？

それは、その日は殆ど学術発表のため、一般の方々はいても面白くないのだ。

ま、そんな訳で。

生徒会の警備は一日目と二日目。三日目はステージの準備があるから、執事が代行してくれる。

ま、そんな訳で、二人一組の二交代制で回すことに。

具体的には、

ハヤテ、ヒナギク

千桜、泉

野々原、美希

愛歌、理沙

というように。

まあ、当然の班分けであろう。

順番はくじ引きで、泉、理沙、ハヤテ、美希に。

というわけで、ハヤテとヒナギクは一日目は回ることに。

限定公開とはいえ、一般より生徒のほうが評価が厳しいのが現実。実は、なんだかんだ言って一日目はみんな気合が入っている。

そんな訳で、……

会長、副会長のカップルに何処でも話題騒然だった。

当然だろう。なんだかんだ言って、知っているのは同学年だけだったから。

そのころ、学術発表のブースでは牧村先生の新介護ロボの発表がなされていた。

そして、爆発……というオチは今回はなかったらしい。

さて、何となく自分のクラスの出し物を見に行ったハヤテとヒナギク。

「そういえば、私たちほとんどクラス行けなかったから、出し物何かすら知らないわね」

ヒナギクは思い出したように言う。

「そうでしたね。たしか、パンフレットは明日配布ですしね」  
ハヤテもそんなこといいながら、クラスの前に。



「……え？」

ヒナギクは驚いた。

実はハヤテたちのクラスは、お化け屋敷ならぬものを作ったらしい。

やっぱやめて他のところ行こう、と言おうとした時、

「おっ、来たきた、」

「さあさあ、二人とも入って！」

「本当は一人500円だけど特別に無料だ！」

……と押されるがままに入ってしまった。

ところが！

原作「ハヤテのごとく！」を全部読んでいる人、もしくは、アニメ第一期をみた方はご存知の通り、ヒナギクは、お化けとか、……苦手なんですネ。

ヒナギク大ピンチ！

とそのとき、後ろから暖かな手が、肩を抱く。

「大丈夫だよ、ヒナギクさん」

「ハヤテ君……」

どうしよう、にやけすぎちゃって、……と一人悶絶するヒナギク。

（暗くてよかった……）

その後、色々あったが、とりあえず、出るときには顔のにやけも無  
事きえたとき。

まあ、ハヤテは気がついてるのだが。

つづく

## 8. 学園祭(6)

夕方。

生徒たちは明日の準備のためにせわしく動き始めている。

生徒会役員も同様だ。

天球の間でせわしく動き回る生徒会役員。とくに、ヒナギク、ハヤテは。

「疲れた……」

ヒナギクは机に突っ伏していた。

他の役員はもう既に帰った。いや、ヒナギクが帰した。

『後は私たちでやっておくからあなた達は帰っていいわよ』

「せめて、千桜だけでも残ってもらえばよかった……」

ヒナギクがポツリとつぶやいた。

「お疲れ様」

そう言って、ハヤテは頭を撫でる。

ヒナギクは猫のように丸く……はならないが、まるで頭を撫でられた猫のようになっていた。

そういえば、と思って、ヒナギクが言う。

「あのさ、……さん付け、やめない？」  
少し照れ臭そうに言う。

「えっ、」

ハヤテがヒナギクの提案に驚く。

「だって……なんかよそそしいような気がするんだもん……」

「ヒナギクさん……」

「じゃあ、い、言ってみようよ……」  
ヒナギクが顔を真っ赤にして言う。

「う、うん」

ハヤテも顔を赤くする。

「ひ、ヒナギク……／＼／＼」  
ハヤテは耳まで真っ赤になった。

言われたヒナギクも耳まで。

「ひ、ヒナギク……も言っ、て、よ……」

「ふえっ、あ、えっと、……ハヤテ……／＼／＼」  
ヒナギクは自分が提案したにもかかわらず沈没した。

その後、5分間くらい、お互い沈没していた。

「なんか、恥ずかしいわね」

ヒナギクはやつとのことですう言つた。

「でも、なんか近くなつた気分だね」

ハヤテは微笑んだ。

「でも、みんなの前で呼ばれるとちよつと恥ずかしい……／＼／」

さういふと、ハヤテは、

「慣れだよ、慣れ。……でも、しばらくは、二人っきりのときだけにしようか」

と。

「うん、さうしよう、は、ハヤテ」

その夜。

泉は部屋で一人考え事していた。

実は……

## Ⅰ回想

生徒会室に忘れ物をした泉は一度帰ってからもう一度学校に行つて生徒会室に入ろうとした。

すると、二人で話しているのが聞こえて、ちよつと外で聞いていて、話が切れたところで入つて驚かしてやろうと密かに思っていた。

ところが、……めちやくちや甘々な話に、泉は我慢できず、忘れ物も取らずに帰ってしまったのだ。

ー回想終了。

（ハヤ太君は、私のほうに振り向いてくれることは、もうないよ……ね）

泉は、苦しかった。

それもそうだろう。

まだチャンスはある、そう思っていた。まあ、思い込んでいただけなのだが。

だが、改めて見せつけられると、無理だと思ってしまう。

でも諦められない。

「……ハヤ太君……」

泉は一人、静かに泣いていた。

執事・虎鉄の声も虚しく……

「お嬢、どうしたのですか?!」

う  
う  
へ

## 9. 学園祭（7）

次の日の朝。

会場前から、白皇学院校門前は非常に混雑していた。

一般の客、生徒の保護者、マスコミ、政界関係者、などなど……

ハヤテは、今日の警備は波乱万丈になりそうだ、とため息。

―実際、毎年、波乱万丈になるのだ。二日目の午前中は。

だいたい、一番多いのは、マスコミ関係者からの苦情。

白皇学院は天下の名門校であり、

金持ちの集まりでもある。

よって、セキュリティ、個人情報保護法、その他諸法や事情により取材を遠慮してもらおう場所がいくつかある。

そのことに関する苦情が多いのだ。

くじ引きとはいえど、どちらにしても、ここはハヤテ・ヒナギクでないと対処できないのも事実だったりする。

まあ、そんなわけで、二日目。



なかなか気合の入った作品や屋台に、来場者の皆さんは驚きを隠せない。

客足も途絶えず、どの店也大繁盛。

そして、警備も、休む暇なし。

昼休みに美希と野々原に交代するときには、疲れきって……なんてことはない。執事だから。

ただ、別の意味で疲れた人が一人……

「な、なんでみんな写真撮るの？は、恥ずかしいわよ……／＼／」  
ヒナギクだった。

「ヒナちゃん人気者だもんね？」  
相変わらず呑気にははく、と笑っている泉。

「泉、どこから来たのよ？」  
ヒナギクが、交代は美希よね？と疑問に思っている。

「にはははく？」  
誤魔化した。

「そういえば、ハヤ太君は大丈夫だったの？」  
泉が聞く。

「へ？何ですか？」

「だってハヤ太君だって今や校内ではヒナちゃんと並んで時の人だよ？」

「いや、何にも言われませんでしたよ」とハヤテ。

「それは意外ですね。私はあちらこちらで聞きましたがまさかの野々原が意外そうな顔をしてハヤテにいう。

「あれ？じゃあ、いないところで言われていたのかな？」ハヤテが首を傾げる。

「いや、ハヤ太君が鈍くて気がつかなかったただけだろう」美希が身も蓋もなく言ってしまう。

「こ、これでも少しは敏感になりましたよ！」ハヤテは全力で否定する。

「だってハヤ太君は……」

「……鈍感なのがデフォだろう？」

泉の言葉を途中から理沙が奪う。

「デフォって……て、朝風さん！？」

ハヤテは突然の理沙の登場に驚いた。

「ふふん、2人が楽しそうにしていたから私も来たのさ」さも当然のように言う理沙。

「ま、その噂の話はとりあえず置いて置いてですね、」とその話を切ろうとするハヤテだが、

「ちょっと待ったハヤ太君」

「なに軽く流そうとしているのかな」

「にははは〜？」

……流せなかった。

「ただ、そろそろ警備を再開しなくてはいいけませんね」  
野々原が言う。

「そうね、美希と理沙、この辺で……」  
ヒナギクもとめる。

「くそおっ、あと少しだったのに……」  
悔しがる理沙。

そんなこんなで、生徒会三人娘を振り切った二人。

「とりあえず、ご飯食べよっか」

「そうだね、ヒナ」

ちゃっかりヒナ、と呼ぶハヤテ。

ヒナギクは再び沈没。

さて、そのころ、ミコノス島では、事件が起きていた。

「やっと見つけた……ふふっ」

一体なにが？

つづく

## 10. 学園祭(8)

そして、早くも学園祭最終日。

生徒会役員一同は、ステージの設営をしていた。

ヒナギクも腹を括ったのか、別室準備室でリハをしている。

そのころ、ハヤテは少し不安になっていた。

(この所、あまりにも運が良すぎる……何かあるとしたら、そろそろか?)

普段不幸体質だっただけに、なお不安になる。

「どしたの、ハヤ太君？」

泉がハヤテのところにくる。

「あ、瀬川さん、何でもないですよ、あ、早く設営、終わらせないと！」

ハヤテは誤魔化した。

「？」

泉は首を傾げた。

(私じゃ、だめなのかな?)

そのころ、三千院家本宅は大騒ぎだった。

帝のところに慌ててやって来た一人の使用人が、とんでもないことをいったのだ。

それを聞いて、

「綾崎とナギが危ない！」

帝はすぐに練馬区の別宅に。

ーだが、よりによって、ナギとハヤテは学校、マリアは外出中、クラウスは……言うまでもないだろう。

（止むを得ない、白皇学院に出向くか……じゃが、先に、天王州のアテネに連絡いれておくかの）

そして、白皇学院理事長室、まあ、学園祭期間中は警備本部なわけなのだが、アテネは電話を受けて、焦っていた。

（よりによってステージの日じゃないの……）

アテネは警備本部に詰めている全職員、学生警備隊、学内捜査官、そして警視庁から出向して来ている数名の警察官に、命令を発した。

「何人たりとも、不審者の侵入を許すな！ 警備体制を客に気づかれないように強化しろ！ 以上！」

アテネの強い命令についっい全員、敬礼。

（前はハヤテに救ってもらった。だから、今度は、私がハヤテを救

う！)

アテネ派そう心に誓い、沸々といかりをつのらせていた。

そして、ステージ2時間前。

「花菱さん、なんか、今日、警備が厳しくないですか？」  
ハヤテは恋愛のこと以外は鋭い。

「奇遇だな、ハヤ太君、私もそう思っていた」  
美希もそう言う。

(なんか嫌な予感が……)  
ハヤテは武者震いした。

その時、美希の携帯が鳴った。

「いまの時間に誰だ？」  
と言いながら携帯を取る。

「……そうか、報告ありがとう」  
そう言うと、美希は携帯を切った。

(……心なしか、花菱さん、なんか顔色悪いな……)  
ハヤテはそんなこと思いつつ、

「花菱さん、どうしたのですか？なんか顔色も優れてないですが……」

「いや、何でもない」  
美希はそう言って、足早にハヤテの前を立ち去った。

（全然なんでもなくないけど、こんなこと、ハヤ太君に言えるわけがないじゃないか……）

―あなたは狙われていて、殺されるかもしれませんが、なんて。

ふと、その時、美希は気がついた。

（だとしたら、犯人が狙うのに適した時間は、ステージ時間中……）

―ヒナも危ない！

美希はハッとなる。

（ヒナに相談しようかと思ったが、そんなことしたら、ヒナは自分の命を捨ててでもハヤ太君を守ろうとしちゃうな……どうしよう……）

美希は泣きそうだった。

―私には何もできない

「そんなことないよ」

そこには、千桜が。そして、

「美希ちゃん、私たちだっているんだよ？」

「そうだぞ、忘れるなよ」

泉と理沙もいた。



「で、何がどうしたのだ？」  
ナギもいた。

美希は、涙が止まらなかった。

話終わると、ナギはおもむろに携帯を出し、

「マリアか？SPを全員、今すぐ白皇学院によこしてくれ。詳しくはジジイに聞けばわかる」

と言った。

「まあ、……ぶっちゃけ頼りないが、いないよりはマシだろう」と照れ隠ししながらナギは携帯をしまう。

そして、泉が、

「美希ちゃん、一人で抱え込んだじゃダメだよ？」  
と言った。

さて、そのころ。

「……ふつ、今度こそ、私が遺産を継ぐ権利をいただかなければ、ね」

二人は、飛行機を降りた。

「確か、白皇学院は学園祭最終日のステージだっけ？」

「そうですよ、恐らく油断してるでしょうから、余裕でしょう。綾崎君は、恐らく快調に現を抜かしてるでしょうから」

「あなたが敵にならなくて良かったわ、ほんとうに」

「私も同感ですよ、ほんとうに」

お互い、意地悪い笑みを浮かべ、向かうのだった。

―白皇学院に。

## 11. 色々な戦い

午後一時。

「只今より、白皇学院学園祭のステージを始めさせていただきます。司会は、白皇学院生徒会副会長、綾崎ハヤテが務めさせていただきます。よろしくお願いいたします」

こうして、ステージは幕をあげた。

そのころ、理事長室。

モニターには、各警備の襟元につけられた小型CCDカメラの映像もうつっている。

そして、帝、アテネ、マリア。

内務の生徒、職員はそのメンツに固まっていた。

「あら、予想外に警備が多いわね」

「本当ね。……変ね。三千院家のSPがいるわね」

（まさか……既に漏れているのかしら？）

突然、不安に襲われる。

「一応、打てる手は打った方が良さそうね」

「そうね、霞さん《．．．》」

ふふっ、と意地悪く笑う愛歌。

（原作で最近出番がない恨み、晴らす……じゃなくて!!、）

ー王玉と、遺産は、私の手に……

「それにしても、なぜ今頃、シスターソニア・シャフルナースが？  
アテネが聞く。」

「さあ？ 私には理解できませんわ」

「わしもじゃ。……やつは、何を企んでいるのじやろうか？」

マリア、帝共に分からないらしい。

「まあ、ソニア単体《．．．》なら、すぐに潰せますわね、流石の三千院家の頼りないSPでも」  
アテネももうよく知っているらしい。

「マリアよ、別宅のSP、もっと頼りがいのあるのをいれようか？」

「そうですね……取り敢えずは、ハヤテ君がいるから大丈夫じゃないですか？」

「……つまりSPは用済み、ってことになりますよ、マリアさん」  
アテネがつっこむ。

「……」

三千院家側は二人とも黙る。

周りで話を聞いていた人達は皆、三千院家のSP、すこしかわいそうだな、と思ったそうな。

ーと、え？一人？

「という工作をして来ましたわ」  
さらっと言う。

「え、ち、ちよつ、私一人に罪をなすりつけるのですか?!」

「いえいえ、そうしないと、私が怪しまれてしまっっては学内に侵入できないですよ」

「え、ですが、しかし……」

「いやなら、いま降りてもいいですわよ。その代わり、遺産は全て私のもの……」

「いえ、やります、やります!!」

すでに愛歌に手玉に取られているソニアだった。

そして、明の部の方は……

「さて、皆さんお待ちいたしました！生徒会長、桂ヒナギクの登

場です！」

会場が地鳴りを起こすほどの歓声を受けながらヒナギクは、あの衣装で登場した。

あの、少年が神話になったりならなかったりしたあの服で。

そして、その服を着て恥らうヒナギクが生徒たちのところをつかんでしまったと見た。

「さて、それでは、まずは歌ってもらいましょう！桂ヒナギクで、残酷な天〇のテーゼ！」

そして、また少年は神話になる。

それぞれで、違うことで戦っている。

それぞれ、いろいろなことを心に秘めながら……

つづく

## 12. 開戦前

「こちら三千院家航空部隊第一部隊、対象と思しき人物を発見。場所は白皇学院正門より10km地点、各自警戒体制に。なお、侵入者は二人の模様。」

通信が三千院家航空部隊から入ったのは、午後4時ころ。

「ちょっと待った、二人、と言ったか？」  
帝が聞き返す。

「はい、二人です。対象、ソニア・シャフルナーズと、……うまい具合に隠れていてわかりませんが、あと一人いますね」

「一体、誰じゃ?!」

「残念ながら、私にも心当たりはないですね」  
映された映像をみて、マリアはつぶやく。

「……」

黙り込むアテネ。

「……はい、そうですか、了解です」  
愛歌は溜息をつく。

「どうなさったのですか？」

「三千院家の航空部隊に二人だということがばれて通報がいったらしい。まあ、私が誰かまではばれてない様だけど」  
愛歌はもう一度溜息をつく。

「確かに、それで気がつくのは難しいかと……」  
ふふっ、と笑うソニア。

「それにしても、その様な情報は一体何処から？」

「中にスパイがいるのですよ。金さえ積みめばなんでもしてくれる人とかね」

さて、ステージの方は第一部終了で、60分の休憩に入ったところだ。

「お疲れ、ヒナ」  
ハヤテだった。

「ありがと、ハヤテ」  
もう、呼び捨ても板についていた。

「おかしいわね、こんなとき、いつも真っ先に飛び込んできそうな美希たちがいないわね」  
ヒナギクが怪訝な顔をする。

「言われてみれば……探してこよっか？」

「うーん……いいや。来るでしょう」



「そうだね」

そのころ、その生徒会三人娘は、理事長室（兼警備本部）にいた。

「内部スパイがいるのではないのでしょうか？」  
美希が言う。

「内部スパイ……か。そうしないと、行動につじつまが合わない。そもそも、最終日を狙っている地点で学内関係者か、それに通ずるものの可能性はあったが……」

アテネは言う。

「なにをしているかと言うと、

「まさかと思うが、スパイがいるのではないかしら？」  
アテネは唐突に言う。

「いや、難しいかとおもうぞ」  
帝は即刻大否定。

「ただ、生徒だけとは限りませんからね、何とも言いがたいですね」  
マリアは否定もせず、肯定もせず、  
という感じだった。

「というわけで、

戻ろう。

「じゃが、そんな簡単になってくれるかの？」

帝は鋭い。

「ただ、金を積みめば、いくらでもついてきますからね、人は」  
美希が冷たく言い放つ。

「み、美希ちゃん、怖いよ……」  
泉が震える。

「私は許せないの。まだハヤ太君を苦しめるのか、またヒナを苦しめるのかって。なんなんだ！って、ね」  
美希の目から頬を心の汗が流れて行く。

アテネは、

「絶対許さないわよ。当然ね」  
強く言い放った。

「り、理事長……」

美希が何か続けようとするが、

「とりあえず、後で三人にはいろいろ話してあげるから、取り敢えずは、こちらのことをしようかしら」  
アテネはそう言って、画面を指した。

帝はそれを見て、ふっ、と笑った。

（今更ながら、金で買えないものを教えてもらった気分じゃな……）

綾崎は金には嫌われてるが、どうやら、他のものを引き付けるものがある様だな、と思った。

「……はい、内部スパイの可能性が疑われはじめました。……了解です。」

一体誰だ！

次回へ続く。

### **13 小休止（前書き）**

今回は少し短めです。タイトル通り、少し小休止ですw

### 13 小休止

さて、そのころ、千桜は、ひとり楽屋でラノベを読んでいた。

（まあ、私が戦ったところで勝ち目はないし、な）  
すると、

ガチャッ。

「……なんだ、千桜か」  
ナギだった。

「なんだとはなんだ、なんだ、とは」  
千桜が溜息混じりにいう。

「というか、それは何だ？」  
ナギは千桜が読んでいる本を指す。

「とある魔〇の禁〇目録だが」

「おお、それか！……ってなぜ今更？」  
ナギが怪訝な顔で聞く。

「あ、アニメのほうを先見てしまって、二期も終わったし、原作を  
読んでみようかと……」  
恥ずかしながら、という感じでつぶやく。

なるほど、という感じで納得するナギ。

「それよりも、昨日、頭にきたことがあってな、……」

と千桜は昨日見たY a h o o ! 知恵袋の某記事の話をする。

※これは実話です。

「はぁ?! ボカロの曲を某有名グループがパクったのに対して、たかがボカロの曲だと言って某有名グループを支持してるやつがいた?!」

ナギが怒った。

「だよな、問題だよな!」

「そいつは著作権法というものを知らないらしいな。無知が吠えても三千院家には勝てないぞ!」  
何気に戦うつもりのナギ。

「そういえば、お前は行かなくていいのか?」  
千桜がふと思いついた様に聞く。

「ああ、……私が戦ったところで、足手まといになるだけだからな、SPを呼ぶぐらいしかできん」  
少しさみしげにつぶやく。

「そうだな……何かしてやればなあ、」  
と千桜も悲しげにつぶやく。

さて、そのころ、ハヤテとヒナギクは、外にいた。

「楽屋だと、誰か来ると困るからね」  
とヒナギク。

「それにしても、なんでこんな事に……」

「わ、私に聞かないでよ、美希たちがやれって言うから……」  
ヒナギクラ赤面して言う。

「意図がつかめない上に、ちょっと、ね……／＼／＼」  
ハヤテも 顔を赤くする。

「まあ、別にいいけどさ……」

さらに、そのころ。

「……はい、準備はできております。……大丈夫ですよ、まさか、  
理事を疑うとは思いませんから、ね。例え嫌いでも」  
ふふっ、と彼女は笑った。

つづく

## 14. そして、

「た、大変です、敵が消えました！ソニア・シャフルナーズを見失いました！」

三千院家航空部隊が無線機に叫んだのは4時30分ごろだった。

「は?!何だって?!」

ついアテネはどなる。

「それが、森に入った途端、身を隠されて、その後、一切見当たりません！」

さて、どうしてか？

「なんか、私服は非常に慣れませんですわ」

「でも、そうすればれませんよ。」

すなわち、シスターさんに私服を着せれば見つかりにくくなるだろう、ということ。

まあ、でも、そんな事はわかりませんわけでした。

「どうしようかのう、手詰まりじゃ……」

と帝が肩を落としたその時、



「私にもお手伝いさせていただきませんか？」  
理事長室の前にいたのは、

「か、霞さん?!」

愛歌だった。

「美希たちに聞きました」  
と慌てた表情。

「私に、なにかできる事はありませんか？」  
それは、とても真剣な表情に見えた。

（よし、これで学校内にも入れた。綾崎君にも近づける。あとは、  
ソニアしだいだな。）

愛歌は心の中でそんな事を考えていた。

―さて、綾崎君から王玉を頂いて、色々としなくてはね。

もちろん、当のハヤテたちはその事は知らずに、休憩も終わり、ス  
テージに勤しんでいた。

さて、第二部の最初は、というと、

「司会は、変わりました、私、瀬川泉がお送りします?」  
泉登場。そして、

「まずは、生徒会長と副会長のカップルのデュエットです、ヒナちゃん、ハヤ太君、よろしく？」

そして、二人が袖から出てきた。

「「「おおおお！」」」

会場全員が思わず言ってしまった。

ヒナギクの衣装はさっきよりは少し抑えつつも、ミニスカ、そして、隣のハヤテと並ぶと、もはやカップル。

ヒナギクとハヤテは向かい合うと、ふふっ、と笑う。

「歌は、ふたりのご〇んね、だようミュージック、スタート！」  
泉がそういうと、音楽は始まった。

そして、二人は歌った。

「ああ、幸せだ。二人とも、そしてそれを見ているみんなも、幸せだった。」

つづく

#### 14. そして、（後書き）

もう少し長くしようか、

と思ったのですが、ここで切らないと止まらないので、ここで。

次話は土曜日に更新できればしますが、できない時はTwitterで報告します！

## 15. 破壊

航空部隊が見失った敵を、どうにか探そうと、カメラのスクリーンにはりついていたその時。

ブンッ。

……。

「こ、こんな時にブレーカーか……今すぐだれかあげてこい！」  
帝が怒鳴る。

一人の警備が走って行く。

「それにしても、おかしいですわね、過去に一度もブレーカーの落ちたことのない白皇学院で……」  
マリアが疑問を抱き始める。

（うまくやるのよ、ソニア）  
心の中でこっさりそう言う愛歌であった。

歌も終わり、拍手喝采に包まれながら、さりげなくハヤテがヒナギクの額にキスをして、会場が盛り上がっていた、そのとき。

「綾崎ハヤテ！」  
パーン！

ステージに乾いた銃声が響いた。ハヤは間一髪で逃れた。

一瞬にして、会場は物音一つしなくなった。

「あ、貴方は、ソニア・シャフルナーズ！」  
ハヤテが驚愕の表情を浮かべる。

「ふふっ、そうよ。なら、用件は説明するまでもなさそうね。その  
王玉か、貴方の命を私に渡しなさい」  
ソニアは静かに言う。

ブンッ。

「復活したぞ！」

その瞬間、

「直ちに応答せよ、敵は侵入に成功、現在ステージです！」

「!!!!!!」

マリア、帝、アテネは固まった。

「ふふふふ、アハハハハハ!!」  
突然キリカが笑い出した。

「き、キリカ？」  
アテネが尋ねる。

「我々の完勝ですな、霞さん」

「ええ、そうね」

二人は満面の笑みを浮かべる。

カツ、カツ、カツ、

バシン！

「て、天王州さん?!」

その場にいたマリアが驚く。

「マリア、止めてはならぬ。彼女は、生徒会長に負けず劣らず綾崎ハヤテに幸せになってもらいたいと想っているのじゃ」  
帝がマリアに言う。

「いいえ、どちらも渡しません。貴方にその権利はありません」  
ハヤテは言い放つ。

「ならば、殺すまでね、生徒会長も一緒に死んでもらおう」  
ソニアはニヤリと笑う。

その時、

「会長！」      「綾崎君！」

二本の竹刀が空を飛ぶ。

二人はもちろん、受け取る。

「じゃあ、とりあえずは、綾崎ハヤテに先に死んでもらおうか」  
そう言って、ソニアはハヤテに日本刀の刃先を向ける。

「竹刀なんかじゃあ、日本刀で綺麗にきりおとされるわよっ！」

ソニアはそういいながらハヤテに剣を振り下ろす。

ところが、ハヤテは竹刀でうまく日本刀をよけ、

「メーン！」

バキッ、と竹刀が音を立てる。

「あ、」

なんと、余りにも腹が立ったせいかわ、面にすごく力が入ったようだ。そして、ソニアの頭の上で、竹刀は

「真っ二つ……」

なにはともあれ、ソニアは気絶した。

「……」

一瞬の沈黙のあと、

「綾崎サイコー！」

誰かがそう叫ぶと、ワッ、とステージが歓声に包まれる。

「よかった、これで、

パァン！」

「うっ……」

ハヤテはうずくまる。

「なん……だと……」

う  
う  
う



## 15. 破壊（後書き）

どうか今日投稿分をUPできたようで良かったです。

まもなく、第3章もクライマックスへ。

## 16. バッドエンドかハッピーエンドか

ハヤテは三千院医療班によって搬送された。

下腹部を拳銃で二、三発撃たれた。

そして、ステージは中止となった。

「楽しかったはずの学園祭が、トラウマになるような学園祭になってしまった。」

愛歌とキリカはその場で逮捕、ソニアはハヤテを撃ったあと、そのまま気絶した。

白皇学院学園祭は、こうして幕を閉じた。

ハヤテは、三千院医療班の素早くかつ確実、適切な治療により、一命をとりとめた。

ところが、まだ意識は戻っていなかった。

「ハヤテ君……」

ヒナギクはずっとハヤテのそばにいた。それこそ、不眠不休で。

そして、毎日、学校が終わると、生徒会メンバー、歩、その他大勢、

ハヤテの様子を見にきた。

―だが、未だ意識は戻らない。

そうして、一週間後。

流石にヒナギクも二回は寝た。

そして、その日、学校も終わり、皆が来てた時のことだった。

「ハヤ太君、なかなか目を覚まさないね……」  
泉がしょんぼりと言う。

「そろそろ目を覚ましてもいいんじゃないかな……」  
歩もつぶやく。

その時、  
「う……うつ……」

全員がハヤテの方を見た。

「ハヤテ君？」

「ハヤ太君?!」

「ハヤテ？」

それぞれの呼び方でハヤテを呼ぶ。

ハヤテは目を覚ました。

「……ここは、いったい？」

とハヤテが言った瞬間、ヒナギクがハヤテに抱きついた。

「え、あ、ヒナ…ギクさん？」

つい、ヒナ、といいそうになったハヤテ。

無事意識を取り戻したハヤテ。

これで全て一件落着、と思った。

「がしかし、……」

「そんな設定はないですよ、花菱さん……」  
ハヤテが言う。

「なんだ、つまらない」

「あなたたち、なんて事言うのかしら？」  
アテネの後ろからは炎が。

「「「も、申し訳ございません、理事長！」」」  
三人娘がその場で土下座する。

「本当に大丈夫なのか、ハヤテ」  
ナギが聞く。

「勿論ですよ、お嬢様」

ハヤテは無事、復活した。

## 17. 後日談

その二日後。

「治ってますね」

三千院医療班の一人はMRIの画像の前で嘔然とした。

「完璧に組織が修復されてますわね」  
マリアも嘔然とする。

「ハヤテ、やはりガ○ダムなのか?!」  
ナギが興奮気味に聞く。

「そんなわけじゃないですか……」

「私のあれはしっかり効いていたようね」  
アテネが頷く。

何が起きてるか、というと、銃で撃たれた所が、なんと二日で組織が完全に修復されてる、と言う事が。

まあ、常人ではないですから。

と言うわけで、明日から学校に行く事になったハヤテ。

「まあ、ではハヤテ。久しぶりにゲームでもしないかとナギ。」

「……お嬢様は学校にいかれなくてもよろしいのですか？」  
ハヤテが無駄である事は承知だがあえて聞く。

「ん？何を言っておるのだ、ハヤテ」

「そうだぞ、ハヤ太君。」  
突然美希登場。

「花菱さん?!どこから？」

「まあまあハヤ太君、落ち着きたまえ。今日は安息日だぞ、ハヤ太君」  
美希が説明する。

「あ、そうなんですか？」

「そうですよ」  
マリアが頷く。

「まあ、それなら……」

そのころ、三千院家本宅。

「帝様、これはおそらく、ガンかと。まだ初期なので治癒率が高いですが、何とも言えません」  
主治医は帝にそう告げる。

「そうか……最善を尽くしてくれ」

第三章 学園生活 完



## 17. 後日談（後書き）

第三章終了です！！！！

## 01. 新たな物語の序章ってこんな感じじゃね？（前書き）

さて、第四章です。更新が遅くなってすいませんm（　　）m  
感想に「アテネ×ハヤテ」より「ヒナギク×ハヤテ」をもっとやっ  
て欲しいとありましたので、その辺、考えて執筆して行きたいと思  
います。

更新は二日か三日に一度のつもりで頑張ります！

## 01. 新たな物語の序章ってこんな感じじゃね？

「なんだかんだで久しぶりだね」

「そうね、学園祭があったしね」

「ていうか、ヒナさんも、ハヤテ君も、本当にいいのかな、私なんか……」

「いいから、行くわよ、歩！」

「え、へ、ちょっと待ってくれないかな、あ、ちよつ、ヒナさん早い……」

そんなわけで、ハヤテ、ヒナギク、歩は、某国際的に有名なネズミの国に來ている。

まあ、息抜き、といったところだ。

というのも、ナギが、いきなり……

『明日から二日間、ちよつと屋敷を開けてくれないか、ハヤテ』

……なんていうものだから。

（なぜ、だろうか……）

少し気になるハヤテだった。

その時、ナギはマリアと共に三千院家本宅にいた。

「で、じじい、何の用だ」

ナギが不機嫌そうに言う。

帝はガンの話をし始めた。

「じゃあ、じじい、とっとと死んでくれ」

ナギは話が終わるや否や言う。

「えっ、」

「冗談だ、さすがにそこまで非常識じゃない」

ナギはケラケラと笑う。

「おそらく、このままだと、わしの遺産がきちんとナギに継がれないかもしれないから……」

帝はうなだれる。

「確かに、いつ何時、またこの間のような事が起きるか分からないですからね」

マリアも同様にうなだれる。

「そうか……」

ナギもハヤテが危険だと聞くと、うなだれる。

「とりあえず、口外厳禁じゃ。おそらく、これがばれたら、綾崎は

さらに危険になる」

そして、そのころ、ハヤテ達は、

「きゃー！ー！！！」

ス〇ースマウンテンに乗って（というより、歩が無理矢理乗せて）  
叫ぶ歩とハヤテ。そして失神しているヒナギク。

「あ、歩、ちょっと、ひどいよ……」

乗り終わって降りた三人は、ヒナギクを二人で支えて近くのベンチに。

すると、

「あれ、歩君にハヤ太君に、ヒナじゃないか」

「あ、本当だ」

「にははく？」

そのベンチには生徒会三人娘が。

「こんにちは、って、なんでここにいらっしゃるのですか？」

ハヤテが怪訝な顔をして聞く。

「政治家の娘だ。調べるのは得意だ」

美希が威張ったようにいう。

「「やっぱり……」」

ヒナギクとハヤテは同時にため息を着く。

「せっかくだし、6人で遊ぶのもいいんじゃないかな？」

歩が提案する。

「その通りだ歩君！」

理沙が上手くいったと言わんばかりの顔をする。

「どうする？」

ハヤテはヒナギクに聞く。

「まあ……いっか」

ヒナギクがそう答えるや否や、

「よし、じゃあ行くぞ！」

とヒナギクの手を引っ張っていく理沙。

すなわち、ヒナギクの手を握っていたハヤテと歩も自動的にひっぱられた。

その頃、レンタルビデオタチバナ新宿本店には、

改装中により本日臨時休業

と札がおりていた。

「ふう、これでパソコンも新しくなったな」  
ワタルは満足げに言う。

「さて、設定と、データのインポートするか」

何があったかと言うと……

「若、こんな所に宝くじが落ちてますよ」

店の清掃をしていた時、見つけた、との事だ。

「ま、どうせ当たるわけないし、もらっておくか」

―そして、当選番号発表の日。

「ま、どうせ当たるはずが……えええええ!?!」  
ワタルが飛び上がる。

「若、どうしたのですか?!」  
サキも覗き込む。

「5000万、あたっちゃったよ……」

―という訳だ。

そんな訳で、パソコンを新しくし、ビデオも拡充、その他客寄せの  
あの手この手、及び赤字の補填をしている訳で。

「やっぱりWindows 8は速いな、前まで使ってたWindows 3.1は遅かったからな、うん」

一人、悦に入るワタル。

サキは、新しく入れた棚に新しいDVDを並べてる。まだ大量に残  
っていたりする。

ワタルはそれを確認すると、

（よし、あの秘密のファイルも今のうちに移行するか）  
と、思春期男児の誰もが所持しているであろうものも移行する。

さて、レンタルビデオオタチバナ新宿本店は、他の大手レンタルビデオチェーンに勝てるのか？

そんな激しい疑問を残しながら次回に

「続きませんよ」

マリアが突っ込む。

「お、おい、俺の出番これだけかよ！」

ワタルが叫ぶがそんな事は気にせず。

つづく



## 02. 隣の部屋に声が聞こえるホテルって、ないだろ、普通は。

楽しい時間というのは、あっという間に過ぎるもの。

気がつくと、空はオレンジ色に染まっていた。

「お、何時の間にか夕方か。……ヒナ達はどうするのだ？」  
美希は聞く。

「私たちは、ハヤテ……君が二日間の暇を言い渡されてるらしいから、このまま〇〇ホテルに泊まって行くよ」とヒナギク。

「そうか、」

と言うや否や、美希は携帯を出す。

「もしもし、花菱だ。宿泊3人、いいか？」  
電話の向こうで慌てる声が聞こえる。

「……分かった。ありがとう」  
と言って、電話を切る。

「あの、花菱さん、一つお伺いしたいのですが、いま花菱さんは何をされたのですか？」  
ハヤテが美希に訊く。

「ん？ ホテルの部屋を予約しただけだが」  
さも当然のように言う美希。

「ふ、普通は、もう部屋が空いてないんじゃないかな？」  
歩がもっともらしいことを言う。

すると、美希は意味ありげな笑みを浮かべ、  
そして、

「じゃ、いくか」

と言って、とつとと行ってしまった。

さて、その頃、千桜は……

秋葉原のアニ○イトにいたりした。

「いらっしやいませ」

店員として。

（バイトしないと、同人誌が買えない……）  
貧窮（？）らしい。

すると、

（あ、お客だ）

「いらっしやいま……ぶっ!？」

そこには、なぜか白皇学院の教師の薫がいた。

思いもがけない場所で出会う教師と生徒。

ところが、

（あれ？先生、気がついてないのでは？）

それもそのはず。彼は一目散に新作の1／100ガンダムのプラモの所に向かっていた。

（……なるほど、な）

千桜はメガネを外し、コンタクトを入れて、先生の日常。を守った……のか？

さて、某浦安市のネズミの国に来てたるご一行。

無事ホテルに着いたらしい。

ちなみに、旅費節約（？）のために、ハヤテ、ヒナギク、歩は揃って一部屋。

そして、

「美希達はどこの部屋なの？」

とヒナギクが訊くと、

「ん？そこだが」

と指したその部屋は、

「と、隣の部屋じゃない？！」

ヒナギクが驚く。

ハヤテは嫌な予感がした。すると、

「なぜだか、この部屋は隣の部屋とドアでつながっているな」  
理沙が一言。

「にはは〜?」

泉は笑う。

嫌な予感がした三人だった。

歩は、お風呂に行つて来ます、と先に大浴場に行つて、部屋は2人だけになった。

「なんか、こうやって2人きりで話すの、久しぶりだね」  
ハヤテが言う。

「だね。ここの所、怪我のあと、バタバタしちゃつて、ゆっくり話せなかったしね」

すると、ハヤテが、

「ごめんね、巻き込んだじやつて」  
と謝る。

「謝らないで。……私ね、今回のことで、改めて、ハヤテの背負つてるものの大きさが分かった。……分かってたけど、こんなに重いものだって、思つてなかった」  
ヒナギクは少し俯きながら言う。

「だからね、私、決めたの」  
ヒナギクは顔を上げる。

「もう、一人で背追い込まないで、私にも背負わせて」  
まっすぐにハヤテの目を見る。

「ヒナ……」

ハヤテが何か言おうとするが、

「でないと、……一人でどっか行っちゃいそうなんだもん、ハヤテは」

後ろから抱きしめながら、ぽつんと言った。

「……分かった。」

そう言って、ハヤテは後ろを向いて、ヒナギクをそっと抱きしめた。

その抱きしめ方に、ほっとするヒナギクだった。

その隣の部屋では、三人とも固まっていた。

壁に耳を当てて、かすかに聞こえる2人の会話を盗み聞きしていたのだが、

「ハヤテ、に、ヒナ、だってよ……」

理沙がつぶやく。

「「そこ?!」」

明らかにそこじゃないだろ、とつつこむ2人。

「分かってる、冗談だ」

カラカラ、と笑う理沙。

「……ヒナも、相当本気だな」

美希が言う。

「そう……だね、に、にはは……」

泉はいつもの笑顔が引きつって、泣きそうな顔をしている。

「ん、泉？どうかしたのか？」

理沙が尋ねる。

そういえば、理沙は知らないのか、と思い出す美希。

「う、ううん、何でもないよ、でも……」

泉はそこで切る。

「……でも、何だ？」

理沙はつづきを訊く。

「……ヒナちゃんが、ヒナちゃんに見えなくなって来た、というか、何というか、……」

泉の目からは、ぽろぽろと、水滴が。

何か嫌な予感がする、と美希は感じた。

つづく

「ちょ、ちょっと、私のお風呂はどうなってるのかな？！」

### 03. 一応、この小説、レーティングZじゃないはずだけどな。

取り敢えず、全員、風呂に入ったのち、夕食へ……

「って、こんなにVIP待遇をオプションで予約してはなかった気がするのですが……」  
ハヤテは啞然とする。

「ああ、なに、私がやっておいた。値段は変わらないから安心したまえ」

美希があっさり塩味風に言う。

「え、なんか、すごすぎなんじゃ……ないかな」  
固まった歩。

「まったく、相変わらずね、あなた達は」  
ヒナギクは呆れている。

そんなわけで、豪華絢爛、フルコースでディナーを満喫しているご一行。

そのころ、三千院家本宅では三千院家系列、天王州家系列の全ての家が集合していた。

「今日、わざわざここまで来てもらったのは言うまでもない、遺産のことじゃ」

帝は単刀直入に話を切り出した。

会場が少しざわめく。

「我が三千院家の遺産は、わしの孫の三千院ナギが相続権を持つ。これに関しては、異論は認めない！」  
はつきりと言った。

瞬間、会場はしんとした。

「なお、以後、ナギ、およびその執事の綾崎ハヤテなどナギの近くのものにてを出したものは三千院家追放じゃ。…すなわち、無理やり奪おうとすれば自動的に相続権自体消え失せるのじゃよ」

ちなみに、と言って、

「王族の庭城は遺産に含まんぞ、あれは天王州家のものだ」  
ロイヤル・ガーデン

さて、飯も終わり、早く寝るか、と言う話になって、まだ21…00ではあるが、部屋に向かう三人。

今回は、シングルベッドが3つ。

そんなわけで、窓側から、歩、ハヤテ、ヒナギクの順でベッドを使うことに。

ハヤテは布団にはいると、あっという間に寝入った。歩も寝入ったのを見計らって、ヒナギクはハヤテの布団に潜り込んで、ハヤテをだきながら寝た。



「……やっぱり早く目が覚めちゃったかな、いつもこんなに早く寝ないからかな？」

ベッドサイドの時計には a m 2 : 0 0 と青白く文字が光っていた。

ハヤテ君とか寝てるのかな、とベッドを見て、

（あれ、一人多い……って、ヒナさん?!）

ハヤテを抱くように寝ているヒナギクを見てしまった歩。

（え、こ、これって、＊自主規制＊とか、＊自主規制＊とかしてたわけじゃ、な、ない……かな？）

少し気になって、ふとんをめくって、二人とも服を着てることに安心する歩。

そこで、ふと思いつく歩。

（ちゃっかり、私も、はいっちょおう……かな）

そして、朝。

ハヤテは、朝起きて、自分がなぜかハーレム状態になっていることに驚いていた。

まだ他の2人は寝ている。

（いや、ヒナなら分かるけど、西沢さんまで……流石に西沢さんは戻しておくか）

そして、戻そうとお姫様抱っこして、気がつく。

―西沢さんは、寝巻きがシャツとズボンじゃなくて、……

頑張って目をそらしながら西沢さんを布団に戻して、ハヤテはヒナを起こそうとして、

「なかなか歩君は大胆だな」  
という声にびっくりした。

「は、花菱さん……おはようございます」  
ハヤテは少し腰を抜かしていた。

「いや、ハヤ太君も見ってしまったのだろうか？まさか、その下が『それ以上は言わないでください！』」  
危うく大変な発言を聞くことになりそうだったハヤテ。

「……それにしても、どうして、……やっぱいいや」  
美希はハヤテに何か言おうとして、言わずに帰っていった。

ハヤテは某然と五分ほど立ち尽くしていた。  
(花菱さんは何を言おうとしたのか？)

「ハヤテ、大丈夫かしら」  
アテネは何となしに言ってみる。

「まあ、相変わらず、不幸に巻き込まれてそうですが、ヒナギクさ

んもいますし、大丈夫……だと思いますよ」  
マリアは苦笑いしながら言う。

「はつくしょん！」

「大丈夫、ハヤテ君？」

ヒナギクがハヤテの顔を覗き込む。

「たぶん。誰かが噂でもしたに違いないよ」  
驚異的洞察力。

なんか三千院家別宅からくしゃみが聞こえたような気がするが、あえてスルー。

なぜ君付けになっているのかというと、朝食の時間だからだ。

だが、ハヤテは朝の花菱さんの話が妙に気になってしかたがなかった。

つづく

#### 04. 秋休みってある所とない所があるよね

そんなこんなで、練馬に戻ってきたハヤテたち。

「ただいま戻りましたー」  
屋敷に戻ったハヤテ。

「お帰りなさい、ちゃんと楽しんで来ましたか？」  
マリアが聞く。

「はい、もちろんです」

ヒナギクはデジカメを見ながらにやけ……いや、失礼、微笑んでいた。

今回の旅行で持って行ったカメラ。色々な写真が入っているわけだ。

早く現像しなくては、と思うヒナギク。

ーあ、

「明日から学校じゃないの！」

そもそも、なんで休んでいたか、と言うと、秋休みだったからだ。  
なんで金持ちの学校で、本来、稲刈りのための休みである秋休みがあるかと言うと、

ーそうしないと自主的に秋休みを取り始める人がいるからだ。……  
白皇学院、大丈夫なのか？

「ハヤテ君、明日から学校ですよ」

「あ、そうですね……忘れてた！」

ハヤテもものの見事忘れてた、というオチ。

「そのまま忘れてれば、明日、一緒に休めたのに……」  
ナギが何気なく言うが、マリアは聞き逃さない。

「ナギ」

マリアが燃え上がる。

「マ、マリア、冗談だ、冗談、冗談だぞ！」  
ナギが燃え上がるマリアに恐れて取り繕う。

「ハヤテ、ちゃんと連れてって……いや、連れて行きなさいよ」  
白皇学院理事長ことアテネも言う。

「もちろん……お嬢様、明日はちゃんと行きますよ」

「……」

四面楚歌なナギだった。

そんなわけで、次の日。

「なぜ太陽は……」

「お嬢様、いい加減聞き飽きましたよ、それも」

ハヤテが、ナギがいい終わらないうちに突っ込む。

さて、読者の皆さんも忘れているであろう、5000万円を手にして、改装していたレンタルビデオタチバナ新宿本店では……

「若、今日から学校ですよ」  
サキが言う。

「そういや、そうだったな……行くか」  
ワタルは重い腰を上げて、制服に着替えていた。

内装は綺麗になり、ビデオの本数やレパートリーが増えたためか、客数は増えている。

「もう少し、黒字になったら、バイトでもいれるか」  
そう呟くワタル。

「ハヤ太君にナギちゃん、おはよ〜♪」  
後ろから泉。

「なんだ、お前か」  
「おはようございます、瀬川さん。……あとのお二方は？」  
ナギは相変わらず不機嫌。

「なんか先に行っちゃったみたい……」  
泉がすこししょんぼりする。

「そういうハヤ太君こそ、ヒナちゃんは？」

「ああ、なんだか、マスターに用事があるとかで、どんぐりに寄ってから行くそうなので、久しぶりにお嬢様を……」  
ハヤテが説明する。

「ほほう、てっきり何かあったのかと思ったのに、……つまらん」  
泉の後ろから理沙登場。

「ぎにゃあっ!？」

後ろから出て来た理沙に驚いて妙な奇声を上げて腰を抜かす泉。

「朝風さん、なんですか、つまらないって。ヒナ……ギクさんが聞いたら、おこりますよ!」  
ハヤテが取り合えずつつこむ。

「大丈夫だ」

その自信はどこから来るのか?と疑問に思うハヤテ。

「なにが大丈夫なのかしら? 理沙」  
ハヤテの後ろから、

「ヒナちゃん?!」

泉は気がついたが、腰が抜けていて立てなかった、が、理沙は走り去った。

「ちょっと! 待ちなさい!」  
ヒナギクは理沙を追いかける。

「……朝から騒がしい奴らだ」  
ポツンと呟くナギ。

「ほい、出席とるぞ。……あれ、桂と朝風は？」  
薫が不思議そうな顔をする。

「まだ追っかけてるのかよ……」  
ナギが半ば呆れ気味に呟く。そのとき。

ガラッ。

「すいません、遅れました」  
ヒナギクが汗だくで登場。

「どうした、珍しいな」  
薫が聞く。

「すいません、いろいろと……」

「まあいい。それはそうと、朝風知ってるか？」  
薫が聞く。

「いいえ、なにも聞いてません。（私が探してたのに……）」  
ヒナギクはそう言う。

「はい、ヒナ」

ハヤテがヒナギクにタオルと水筒を渡す。

「あ、ありがとう」

ヒナギクは受け取って、汗を拭きながら、お茶を飲む。

そして、その水筒のお茶をハヤテがその後、普通に飲んで、



「つつ……／＼／＼」

未だに耐性がないヒナギクは赤面。

（しかも、そこ、明らか私が口つけた所……）

そんなわけで、次回に

「どんなわけよ！」

……つづく。

## 05. なんか現実と時間が違う？ 気にしない。それも人生だ。

さて、時は流れ、定期試験もおわり、

「クリスマスだあー！」

叫ぶ生徒会三人娘。

それを聞いて、

（クリスマスかあ……）

そういえば、今年はハヤテと過ごす初めてのクリスマスだな、思  
って赤面するヒナギク。

クリスマス。ハヤテは、その言葉に、去年、親に捨てられ、お嬢様  
に拾われた、あの日のことを思い出した。

（もう、あれから1年もたつのか……）

とハヤテは、少し考え事をしていた。

「そう。お嬢様たちと過ごすべきなのか、ヒナギクと過ごすべきな  
のか。」

その問題は案外簡単に片付いてしまった。

「今年のクリスマスは屋敷で過ごしますから、ヒナギクさんを連れ  
て来ても構いませんよ」  
「 MARIAはさーっと言った。」

一時の沈黙。

「え?! どうしてですか?」

ハヤテが慌てて尋ねる。

その質問に答えようとして、ためらうマリア。

(お爺様にあのことは話すなど言われてますしね……)

まあ、ハヤテ君は鈍いからいいか、と非常に失礼な事を考えて、

「今年はお爺様が出席できないのでやらないそうです」と答えるマリア。

「そうなんですか、分かりました」

とマリアの予想通りの反応をしてくれたハヤテ。

その頃、瀬川家のあるぬいぐるみに埋め尽くされていると言っても過言でない一室。

一人の少女は悩んでいた。

(せ、せっかくのクリスマスだし、ハヤテ君に気持ちを、伝えたい……けどヒナちゃんの彼氏だし……)

「あーもう!……分からないよ……」

ぽすっ、とベッドに倒れ込む泉。

ナギは相変わらず自室の100インチテレビでアニメ鑑賞。

『そんな幻想、まとめて全部ぶっ殺してやる!』

「ふう……千桜に言われて見て見たが、なかなかと、ある魔術のインなんとか、おもしろいな」

ナギはつぶやく。

「お嬢様。そのインなんとか、という表現は著作権に配慮しているのか、ただ単にお嬢様が覚えてないのか、どちらでしょうか」  
ハヤテが問う。

「当然！著作権に配慮しているのに決まっているでないか！鎌池○馬先生に悪いからな」  
ナギが威張り腐る。

「どうやら……外伝で、とある科学の超電○砲と言うのもあるようね」  
後ろから、アテネ登場。

「アーたん！……意外と詳しいね」  
ハヤテが反応に困る。

「ふふっ、ちょっと、ね。生徒に追いつかないと困るからね」  
そんなところは追いつかなくていいのでは、と突っ込みたいハヤテだった。

「お、そういえば、ハヤテ。クリスマスはどうするのだ？」  
ナギが聞く。

「先ほどマリアさんから一応状況は聞きました。ので、今年はヒナギクさんを屋敷に招待して、……と考えたのですが、どうでしょうか？」

「私は大歓迎ね。また、三人で語り合いたいしね」

アテネはすすんで賛同。

ナギは、

「全然構わないが……千桜も誘っていいか？」  
少し照れ臭そうに言う。

それを見て、ハヤテは、微笑。

「いいですよ」

ナギの顔が輝く。

（お嬢様も、やっと分かり合える友達ができたか……）  
と安心するハヤテ。

次の日。

その事をヒナギクに話すハヤテ。

「え?! 本当にいいの?」

念を押すヒナギク。

「もちろん! お嬢様も、アーたんも」

「やった♪ありがとう!」

喜ぶヒナギク。

クラス中の男子は、綾崎、いいな……とところのなかで羨ましがっていた。

そして、

「そうか……それならパーティー断っておけばよかったな……失敗」と言う美希。

どうやら、例年通り三千院家でパーティーをと思っていた模様。

「まあ、言われてもお前たちは入れないがな」  
きっぱりと言い放つナギ。

「そんな……冷たいぞー！」  
理沙はナギに指を突き立てる。

「ほら、泉もなんとか……あれ、泉？」  
そこに泉はいなかった。

「おかしいな、さっきまでいたのにな」  
首を傾げる美希。

それを聞いていたその少女、瀬川泉は、また一人、悲しみに明け暮れていた。

つづく。

## 06. クリスマスはラブコメ。ラブコメはクリスマス。……常識？（前書き）

久しぶりにiPodでなくてパソコンで執筆。

## 06. クリスマスはラブコメ。ラブコメはクリスマス。……常識？

「私なんかが……いいのか？」

千桜はとまどう。

「お嬢様が来てほしいとのことなので。……都合はよろしいでしょうか？」

ハヤテは聞く。

「もちろんいいが、……なんというか、わざわざ綾崎君に頼まなくても、自分から言いにくればいいのに、と思うのだが」  
千桜は苦笑い。

「お嬢様いわく、なんか気恥ずかしいそうなんですよ」  
ハヤテが同じく苦笑い。

「まったく……別に好きな人とかでもなんでもないのに、気恥ずかしいって何だよ、どこの乙女だ」

その言葉に、ハヤテはいろいろ思い出して、夕陽のように顔を紅くする。

「ん？綾崎君？……なるほど、そういうことか。執事はご主人様に似ると言うが……」

千桜は笑う。

（確かに、会長は好きになりそうね……）

おーっと！ハヤテはまた余計なフラグを……



「立ててません!」「そんなんじゃない!」  
はいはい。

その一方、ヒナギクは帰宅してから、一人、喜びに浸っていた。

(どうせ今年も三千院家でパーティーするから無理かな、と思って諦めていたけど、運がいいわね。これも日ごろの行い……)

―その本当の理由も知らずに。

そして、本当の理由を知らない人といえば。ここにも……

(さて、どんなおもてなしをするか……)

ナギはマリアの部屋にいた。

「マリア、本当にハヤテにあのことを言わなくていいのか?」  
ナギは不安そうな顔をする。

「だって、お爺様がそうおっしゃっていますし、……たぶん、そんなこと言ったらハヤテ君は楽しめなくなっちゃいますよ」  
マリアがそういう。

「んー……確かにそうなんだが、な……」  
ナギは首をかしげる。

「考えすぎですよ」

マリアはにっこりと。

さてさて。次の日。

まだクリスマスまで2週間あったりする。そんな、作者もさすがに定期試験終わっていきなりクリスマスにしよう、とは、そうは問屋がおろさない、と。

もちろん、学校もある。

そんなわけで、今日もナギを連れて（というよりは引っ張って）学校に連れて行くハヤテ。

もちろん、隣にはヒナギク。

校門前に着いたご一行。

「なんか、私たちが言うのもあれだけど、この時期、本当にカップルを学内でも多く見かけるよね」

校門から校内を見ただけでも、1組、2組、3組……と。

「ああ、クリスマスでみな浮かれているからな。ベタなラブコメなイベント発生だろう」

またマイナーな表現の仕方をするナギ。

「ベタな、とはまたひどい言い様ね、ナギ？」  
ヒナギクの後ろから炎が。

「い、いや、ヒナギク、私は、そ、そんなつもりでは言って、ない、ぞ、うん、多分、」

とてもあたふたするナギ。

「多分、というのがまた、自信のなさが染み出ているな、ナギ君」  
後ろからインチキおじS……いや、美希の登場。

「インチキおじS……て、あきらかにインチキおじさん、って言うお  
うとしただろ！これはちび○るこちゃんじゃないんだぞ！」

「誰につっこんでいるのですか？」  
ハヤテがいぶかしげに聞く。

「天の声だ！」  
美希が威張る。

どうしやのだろうか、と少々心配になったりする御一行だったり。

「とりあえず、本題に話を戻して、だな、」  
話を戻す美希。

いやいや、話そらそうとしたのはあんただよ、と突っ込みたくなる  
のを必死に抑えるナギ。

「まあ、だがベタであることには変わらないな」  
一切フォローなどしない。

「ちょ、美希！」

さすがのヒナギクも予想外だったようだ。

「まあ、でもベタだからこそいいんじゃないのか？」

一同、沈黙。

すると、

「やつほー！」

突然の猫耳少女……ではなく瀬川泉登場。

「び、びっくりした……」

ハヤテの心臓はバクバクいつている。

「泉……おまえ……ある意味すごいな」  
美希が苦笑い。

「にははー♪、って、ほめられてないよね、それ!？」

「安心しろ、ばかにしている」  
胸を張って言う美希。

「ひどいよー」

泉は早くも撃沈。

まあ、そんなわけで、ベタなラブコメのベタな展開……なのか？

激しい疑問と、ベタなラブコメのベタな展開ってどんなんだっけ？  
と思いながら

次回につづく。

## 07. 不純異性交友、それは犯罪です。……目撃したらどうする？

そんな日の放課後。

「会長、今から会議ですが」  
千桜がヒナギクに言う。

「あ、そうだったね。美希たちは呼んでくれた？」  
ヒナギクが聞く。

「はい。野々原さんが捕まえました」

やっぱり逃げようとしてたか、と呆れるヒナギク。

そんなわけで、今日は生徒会の会議。

「今回の議題は、クリスマスに向けた規律強化および不純異性交友の防止に関することです」  
千桜が書類を読み上げる。

「そうね……この時期になると浮かれて規律がゆるくなったり、クリスマスは毎年、大変だしね。今の内に対策を練っておきましょう」  
ヒナギクが、会長モードに切り替わる。

「そんなに毎年大変なんですか？」  
昨年まで生徒会には、はおろか、白皇学院にすら所属していなかった

たハヤテが聞く。

「去年は特にひどかったね……」  
さすがの泉ですら顔が曇る。

「そうそう。ヒナがまさに行為真っ最中の現場を目撃しちゃってね……」  
美希が遠い目をする。

「そ、そうなのよ……／＼／＼」  
思い出して顔を赤くするヒナギク。

「……そ、それは……／＼／＼」  
ハヤテも赤くなる。

「ま、そう言う訳で、今年は、取り締まりなどを強化しようということね」

ヒナギクが、言う。

「そうだな。でも、なかなか難しくないか？」  
理沙が言う。

「確かにな。あまり取り締まりを強化しすぎて、カップル自体を壊してもいけないしな」  
美希が言う。

「私たちには分からないよ〜♪」  
泉が言う。

「そうですね。そういう経験のある方に聞くのがよろしいのでは、

と」

野々原が真面目な顔で言う。

「そういう経験ね……」

ヒナギクがつぶやく。

「……」

一同、沈黙。

全員、視線をハヤテとヒナギクに。

「……え？」

ヒナギクが気がつく。

「えっと……なんですか？」

ハヤテも気がつく。

「いや、ね……」

美希が言う。

「そういう経験のあるのって……」  
理沙が言う。

「ヒナちゃんたち……だよね」  
泉がさらに言う。

一同、さらに沈黙。

「え、……」



「え……」

「「えええーっ！？」」

生徒会室に響くハヤテとヒナギクの叫び声。

さて、どうする二人？

……  
つつく

## 08. メインヒロイン? さあ、誰でしょう? (前書き)

前回は少々短かったですね。すいません

## 08. メインヒロイン？さあ、誰でしょう？

その日の夜。

「うーん……こまったわね……」

ヒナギクは部屋で悩んでいた。

回想――

「じゃ、そんなわけで、取り締まりの件は二人に任せよ」  
軽く言う理沙。

「ち、ちょっと！」  
顔を真っ赤にして叫ぶヒナギク。

「ですが会長、生徒会の中で付き合っているのはお二人だけですか  
ら」  
と千桜。

「まあ、考える、といっても、どうすれば健全な恋愛の邪魔をせず  
に不健全な男女交際を止めるか、だけですし」  
野々原もさも問題なさげにいう。

――回想終了

（私たちがみたい人たちを邪魔せずに不健全な付き合いを止める方  
法……か）

一方、ハヤテはマリアに聞いていた。

「そうですね……なにかイベントをすることによって、止めることが出来ない訳ではないですが……あまり良くない方法ですね」  
一応マリアも17歳、ピチピチの17歳、まだ17歳ですから。  
大事なので三回言いました。

「なんでですか？」

恋愛経験0（？）だったハヤテには分からないらしい。

「健全、不健全とわず、カップルは自分たち二人きりになりたいですから」

ピチピチの（ryマリアさんが説明する。

「そっか……うーん……」

こちらも相当悩んでいる様子。

次の日。

屋敷の前で待ってたヒナギクと、ハヤテは学校に行く。……もちろん、片手には、ぶつくさ言っているナギ。

「思いついた？」

ヒナギクはハヤテに聞く。

「全然……」

ハヤテはうなだれる。

「だよね……」

ヒナギクもうなだれる。

なんかいい案はないのか、と頭を絞る。

天球の間こと生徒会室。

千桜は下を見下ろしていた。

予想通りうなだれている二人が見えた。

（二人とも、こういうことには疎いからな……）

じゃあお前はどうかんだよ、と突っ込みたくなることを言う千桜。

「なんか言った？」

いいえ、なんでもありません……

「ところでハヤテ、私の出番はないのか？」

ナギが言う。

「ちょっと待ってくださいね、いまからハヤテのごとく、ヒナギク（ryとぐぐってみますから」

しばらくキーボードとマウスの音がつづく。

「あ、出ました。……ないですね」

ハヤテがそう宣言する。

「な、なんだと！」  
ナギが叫ぶ。

「筆者曰く、これは僕とヒナ……ギクさんの物語だそうですから」  
ハヤテが画面を読む。

「そ、そんな！ 畑先生はちゃんとメインヒロインにしてるのに！」  
さて、そんな叫んでいるサブヒロインは置いておいて……

放課後。

「やっぱり浮かばなかったか……」  
千桜は頭を抱える。

「やっぱりってなによ！」  
ヒナギクは少し青筋を立てる。

「いや、経験0の二人には分からないか、とね」  
当然のように言う千桜。

「ぐっ……」  
今の言葉が突き刺さったらしくかおをしかめるハヤテ。

「一番手っ取り早いのは、調査。……もはや疎い云々以前だな。彼ら彼女らは、周りに私たちはカップル、と言えない人たちもいるかな」

……そんなわけで、この仕事は美希に任せることに。

その美希は複雑な心境だった。

（これを見ている泉はどう思ってるんだろうな……）

さて、その泉は……

やはり部屋に。

なにかを決心している様子。

一体なにを？

……つづく

09. クリスマスと縁のない人々。……リア充爆発とか言ってるそうだな。安心！

さて、クリスマスまであと一週間。

街中もカップルで溢れかえっている。

潮見高校の某女子生徒はため息をついた。

……ロマンチックな出会いを求めて。

そんなわけで、

「で、二人はその日どうするの？」

飲んでいたコーヒートを噴き出す二人。

「マスター!!!」

今日はヒナギクとハヤテのバイトの日。

客足も収まったので一息ついていたらところだった。

「その様子だと……一緒にすごすのね」

さすが(?)マスター。指摘が鋭い。

二人は真っ赤になる。

「ま、まあ、二人ですぐすと言っても、ヒナギクさんをお屋敷にお誘いしていただけですけど」

ハヤテがマスターに補足説明する。



「ほう、二人で一晩過ごすのね！」  
どーっ！

ハヤテは自爆した。

そしてヒナギクは誘爆した。

さて、バイトが終わって帰路につく二人。

「まったく、マスターったら……」  
ヒナギクがつぶやく。

「ズバズバつついてくるね……」  
ハヤテもため息混じりに言う。

「まさか、あそこで『もうすでに一緒に何回か一晩過ごしてます』  
なんて……」

「……いえないね」  
二人は見つめ合う。

さて、その頃、レンタルビデオタチバナ新宿本店。

「もうすぐクリスマスかあ……」  
歩がつぶやく。

「おい、なんでお前がいるんだよ！」  
ワタルが久々の出番の頭を取られた、と憤慨している。

「ヒナさん、ハヤテくんと一緒に過ごすんじゃないかな……」  
歩がそうつぶやいて妄想モードに入ろうとする。

「あ、でも、あいつら、また三千院のパーティーに参加するんじゃないの？」  
ワタルが言う。

「今年はないぞ」

自動ドアが開閉する音と一緒に釘m……失礼、ナギの声が聞こえる。

「中の人の名前を言うな！」  
へいへい、失礼しました。

「それはともかく、今年はないから、ヒナギクなら屋敷に誘ったぞ」  
ナギが言う。

「そうなんだ……」  
歩がつぶやく。

「なんだ、ハムスター、まだ未練があるのか？」  
ナギが聞く。

「な、ち、そんなことはないんじゃないかな、」  
慌てふためいて答える。

「ただ、……ハヤテ君との出会いみたいなロマンチックな出会いがないかな？ って思ってみて、少し悲しいかな……って」  
歩がすこし俯きがちに言う。

「……私も同じだぞ、ハムスター」  
ナギも同様に。

「そういえば、ナギとハヤテってどうやって出会ったんだ？ 金に縁がなさそうな元借金執事が金に恵まれてるお前に会うはずがないしな」

ワタルが話題を変える。

「あ、それ、私も聞きたいかな」  
歩もナギに聞く。

「しょうがないな、あれはな、……」  
ナギは去年のクリスマスのことを話し始めた。

「……相変わらずの天然ジゴロだな」  
ワタルが言う。

「そういうことだったんだ……」  
歩は、久しぶりにあった時のことを思い出す。

「じゃあ、あいつは、どうせナギと過ごすか生徒会長さんと過ごすか迷ってたんじゃないのか？」  
ワタルは聞く。

「ああ、マリアがそんなこと言ってたな」  
ナギが思い出すように言う。

「ほんと、天然ジゴロだな」  
ワタルは微笑した。

「ハヤテ君らしいかな」  
歩も微笑む。

「まったく、気にしたいでヒナギクと過ごせばいいのに」  
ナギが頬を赤らめる。

「あの、私、忘れられてませんか？」  
サキがいう。

いえ、あなたは買い物をしている、という設定なのでいませんよ。

「そ、そんなあ……」

そんなことを噂されてたことも知らない当人たちは、

「「くしゅん！」」

（（誰かに噂されてるのかな（かしら）？））

それぞれの帰路にすでについていた。

つづく

**10. ラブコメの急展開の前ってなかなか難しいんだよね……心の声じゃないぞ**

今回は短いです。すみません、勘弁してくださいm（　　）

## 10. ラブコメの急展開の前ってなかなか難しいんだよね……心の声じゃないぞ

さてさて、クリスマスまであと二日。

「これで、白皇学院冬季休業前集会を終了します。楽しい冬休みを過ごしてくださいね」  
壇上でヒナギクが話す。

そう。なぜか知らないが、慣習で、クリスマスの二日前に学校が終わる。

「なお、今年度は、以前お伝えした校内での規律強化に基づきまして、生徒会室以外の教室、正面玄関は、施錠いたしますので、忘れ物のないようにしてください」

そんなわけで、

「やっと終わった、さあ帰ろう、ハヤテ」  
ナギが既に冬休みモードに。

「生徒会の仕事があるので、先に帰ってくださいますか？」

そう言い残して、ハヤテは時計塔ガーデン・ゲートへ向かった。

用事も済ませ、生徒会室にはヒナギクとハヤテだけになる。

「クリスマスの日、どうすればいい？」

「また後で連絡するけど、迎えにいくよ」  
そう言われて、まるでお姫様だな、とヒナギクは思っ  
て顔が赤くなる。

「どうしたの？」  
ハヤテはヒナギクに聞く。

「いや、なんでもない」  
と笑う。

その笑顔に思わずドキッとしたハヤテだった。

そのまま二人は一緒に時計塔ガーデン・ゲートを出る。

そして、仲良く手をつないで帰っていた。

「ただいま帰りました」

「おかえりなさい、ハヤテ君」  
マリアのお出迎え。

（なんか今日はえらく輝いてますね……なるほど、なんかヒナギク  
さんと楽しいことがあったんですね）  
とか思いながら、自分の灰色の青春を悔いるマリア。

（いや、でもまだ17歳、まだ青春は過ぎ去っていないはず……っ  
て、あら、私ってあと数日で18歳！？アメリカでは成人できたり

する……)

となんか頭の中でぐるぐる回るマリア。

「あの……マリアさん？大丈夫ですか？」

ハヤテが心配になって聞く。

「だ「大丈夫だ、問題ない、だそうだ」」

途中からマリアの言葉を奪うナギ。

「お嬢様、パロネタはいい加減やめませんか？」

ハヤテは半ば呆れ気味だ。

「いいじゃないか、この程度なら著作権にひっかからないぞ」  
ナギが威張る。

ぞ、じゃないよ……と思うハヤテ。

ま、そんなことは置いて置いて、いつもよりいい気分で帰ってきた  
ハヤテは気分良く、当社比20倍(?)の仕事ぶりだった。



11. いままでクリスマス何日前、って書いてたけど、ずっとイブの何日前って

そんなこんなで、クリスマス・イブ一日前。すなわち23日。

美希は泉の家に来ていた。

「あれー？理沙ちゃんは？」

「なんだか地域の行事とかなんとかだっさ」

美希がそう答える。

なぜいま美希がここにいるか？遊びに来たに決まっている。

「それじゃあまるで私たちが不真面目な生徒みたいじゃないか！」  
美希が反論する。……真面目な生徒なのか？

まあ、それはともかく、相変わらず美希が泉をいじるといふオチだ  
ったり。

「ち、ちよっとトイレ……」

美希がくすぐりをやめると下半身を押さえて走って行った。

漏らせば面白いのに、とかひどいことを考える美希。

ふと、テーブルの上に一通のかわいい封筒が。

なんだろう、と見てみると、

ハヤ太くんへ

(……まじか、泉)

まだ閉まってない封筒のなかにある便箋を取り出して見てみる。  
すると、それはラブレターだったりとか。

「ふえー、すっきりしたあ、もう、あんなにくすぐるか……」

泉が固まった。

そして、顔が段々と赤く染まる。

「あ、あ、あのね、その、ね、は、は、ハヤ太くんね、その、その、ね、」  
めっちゃくちゃ動揺している泉。

「……でも、泉、これ、渡してどうするのか？」  
美希が問う。

「だって……」  
泉の目からなみ……いや、心の汗が一滴、一滴と流れる。

「ヒナちゃんと付き合ってるけど、あ、諦められないよ……ナギちゃんも、歩ちゃんも、ハヤテくんはその気持ちは知ってるけど、私はっ、……」

そこまで言うと、泉はボロボロと心の汗が。

「でも、いつ渡すんだ？」

美希が改めて問う。

「明日のつもりだけど……」

泉は泣きじゃくりながら答える。

「明日は夕方から、ヒナたち、ナギん家に行くらしいぞ」  
美希は、なんであんたが知ってたんだ、という情報を開示する。

「……じゃあ明後日、ヒナちゃんたちが帰ってからいく」  
泉は涙を拭ってそう言う。

「いいのか？」

美希は再度問う。

「うん。言わないと、私が後悔する」  
決然と言った。

そんなことも知らず、ハリー、……いや失礼、ハヤテは、というと  
「あの、j・k・ロー○ングさんに許可とってからじゃないとダメ  
ですよ」

ハヤテに注意された。

とりあえず、もちろん、泉からラブレター貰うなんて知るわけもなく、明日のことに思いを馳せていた。

「ハヤテくん、顔がにやけてますよ」

マリアさんが指摘する。

「あ、すいません、ちょっと考え事をしています……」  
といいながらもハヤテの顔は未だにやけている。

（よほど楽しみなんですね、……それにしても、ハヤテくんは私の誕生日が明日だってことを覚えてるかしら？）  
マリアがまた終わりのない思考の循環に陥る。

「あの……マリアさん……戻って来てください」  
返事がない。ただの尸のよ……いや、死んでないか。

「ハヤテ、マリアはどうしたのか？」  
横からナギが出てくる。

「それが、円環の理に導かれて……」

「ハヤテ。番組が違うぞ」  
ナギがつっこむ。

「マリア、おいマリア？」  
……返事がない。

「すまん、ハヤテの言う通りだった」  
ナギがそういうと

「勝手に人を殺さないでください」  
やっとマリアが返事した。

さて、桂家では……

ハヤテ同様、ヒナギクもにやけていた。

その様子を部屋のドアの隙間からこっそり覗き見る桂・母。

「青春ね、ヒナちゃん」

「ひゃあっ！……もう、お義母さんったら！」  
顔を真っ赤にして抗議するヒナギク。

「だってねえ、ハヤテくんと撮った写真見ながらにやけているんだもんねえ」

桂・母が意味深な笑いをうかべる。

「もう！怒るよ！」

と言いながらも満更でもない様子。

さて、明日は楽しめるのか？そして泉は？

つづく

## 12. クリスマス・イブ（1）……というか、導入。

クリスマス・イブ当日。

その日は、晴れていた。空には少々の雲。

『今日の練馬区は、午前中は晴れ、午後も晴れ、夕方から雲が覆い始めて、夜は雨か雪が降るでしょう』

えらいピンポイントな天気予報が屋敷のテレビから聞こえて来た。しかもなんか細かい。

……天気が都合が良すぎる？気のせいだ。ほら、地球温暖化とかで異常気象とかなんとかとか、まあ、いろいろあるからな、うん。

そんな天の声のツツコミは置いておいて、さて。

まあ、一般的にカップルの日と呼ばれている（？）この日。例にもれず、ハヤテは朝から……

「おはようございます!!」

眩しかった。

「マリア、ハヤテが眩しいぞ！」

ナギがマリアに言う。

「ま、まあ、やむ終えないのでは？」  
マリアも返答に困る。

すると、  
ピンポーン。

「早いな、千桜」

「まあ、午前中から来て良いって言ってたからな。親の相手するのも疲れたから先に来た」  
苦笑いしながら千桜は言う。

「あ、じゃあ、何か用意して来ますから、お嬢様と部屋でお待ちください」  
といつもの執事モードに切り替わって厨房に向かった。

「ハヤテ、切り替え、早いな……」  
ナギが感心していた。

「まあ、ハヤテくんですから」  
さも当然かのようにマリアは言った。

「紅茶と軽いお菓子です。……つまらないものですが」  
ハヤテがそういつてワゴンを引いてくる。

「つまらないもの、って……これが？」  
千桜は目を見張る。

ワゴンの上には、まるでフランスの貴族のお茶会のように豪華なお菓子が。

「そこは和の美德ですよ」  
マリアが補足説明する。

「フランス様式のお茶会風で和の美德、ね」  
千桜は咲う。

「ま、旨いことには変わらない」  
ナギが最後に付け足す。

「では、」  
と千桜は手にとって食べた。

そのころ、ヒナギクは剣道場にいた。  
毎年、イブだろうと、この日はしっかりとけいこをすることになっている。

さすがヒナギク、稽古中は無心である。

そして、終わって、片付けも終わると、……途端に顔がほころんでいた。

（今日はハヤテと……／＼／＼）  
もはや満面の笑み。

さて、あとは夕方を待つだけ。

つづく。





### 13. ラブコメってよく風呂場で事件が起きるよね。……なんか原作のタイトル

そして、夕方。

ピンポン。

ヒナギクが到着。もう既に夕食の準備はできつつある。ハヤテは厨房でせわしく動いている。

「というわけで、先に入ってくれたとき」  
ナギがヒナギクに言う。

その十数分後。

「できましたよ」

テーブルの上には、もうなんとも言葉で表現できないほど豪華な食事が。

「単に思いつかなかったただけでは？」  
いいえ、そんなことはありません（――；）。

「それにしても、相変わらず、とはいえ、なんかいつもより気合いが入ってますね」  
マリアが感心する。

「ちょっと気合いが入ってしまいました」

ハヤテは照れ臭そうに頭を掻きながら言う。

「まあ、ヒナギクさんも来ますしね」

とマリアが言うと、ハヤテは顔を真っ赤にした。

（あいかわらずいじりがありますね）  
と思うマリア。

その様子をみて、ヒナギクはとても幸せそうな顔をしていた。

そして、二人は目が合うと、お互いに満面の笑みでみつめあった。  
た。

さてさて、ハヤテの腕前はさすが。超一流レストランさえも霞んで  
しまうほどの食事を食べ終わった一同は、それぞれに三々五々、分  
かれて話をしていた。

ナギは千桜と熱烈な議論（？）を交わしていた。

主に、今年話題になった魔法少女ま○か☆マジカの話で、相変わら  
ずストーリー重視とキャラ重視とで議論していた。

マリアはアテネと話をしていた。

……話の内容は、「禁則事（ry）」とのこと。

食器の片付けは、執事長がしていた。さすがベテラン、ハヤテに劣  
らぬスピードで片付けていた。

さて、そのハヤテは、ヒナギクと話していた。  
いろいろなたわいもない話しても、二人はとても幸せそうに話して  
いた。

議論も少し落ち着いた千桜は、ふとハヤテとヒナギクの方を見て、とても幸せそうな二人をみて、思わず、  
「なんか、とても幸せそうだな」と。

「ああ。あの二人はいろいろあったから、絆はそんじょそこらの即席カップルとは比べ物にならないぞ」  
ナギは誇らしげに言う。

「……自分はそれでいいのか？」  
千桜はそう言う。

すると、ナギは、  
「昔は、今のヒナギクの位置に自分がいるだろうことを当然と思っていた。でもな、ハヤテがそれで幸せになれないなら、意味がないんだよ」  
と、少し悲しそうにつぶやく。

「……詳しい事情は知らないけど、納得してるんだな」  
「もちろんだ。……たまにさみしくなるけどな」  
ナギはそうつぶやく。

すると、千桜はふふつ、と笑って、  
「話し相手は、ここにもいるだろ？」  
と自分をさす。

この出来事は、ナギの将来に大きな影響を与えたのは、また別の話。

「では、そろそろお風呂にでもしますが？」

マリアが言う。

「そうですね。……じゃあ、先にお嬢様たちが入ってください。僕は最後に入ります」

ハヤテは提案する。

「まあ、私とナギが一番最初にはいったほうが良さそうですね」  
マリアが言う。

「そ、そうですね……」

さて、女性諸君が入り終わったと千桜に聞いて、風呂場に向かうハヤテ。

ところが、千桜は、まだヒナギクが入っていることを知らなかった！  
そんなことも知らず、ハヤテは、さて、風呂にはいるか、と風呂場のドアを開ける。

ヒナギクはそろそろ出ようかな、と思った時、風呂場のドアが開いた。

（誰かな？千桜が忘れ物でもしたのかしら？それともマリアさん？……まさかハヤテくんな訳ないよね）

そして、ハヤテも、湯けむり越しに誰かが入ってるな、と思った。

（あれ、さつき、春風さん、女性諸君は出た、って言ってたよな…  
…またタマか執事長か？）

ここで思い返して欲しい。三千院家の風呂場はとても広い。すぐにお互いが気がつくはずがない。

というわけで、普通にハヤテは風呂に入った。

そして、誰かな、と思ったヒナギクもそちらの方に風呂のなかを移動した。

そして、

「ひ、ヒナ?!」

ハヤテが先に気が付いた。

その声に、

「ま、まさか、は、は、ハヤテ？」

「そ、そう、だけど、なぜ？」

とその時、目の前にヒナギクがいた。

お互いに裸の男女。

ヒナギクはのぼせて、沈んだ。

「ひ、ヒナ?!」

つづく

#### 14. これ、イラストで書いたり、ていうかコミカライズの地点で多分公共の場

気がつくと、横になっていて、心地よい風が当たっていた。そして、なんか柔らかいような、硬いような、ちょうど太もものような感触が頭に……

「あ、気が付いた？」

上からハヤテの声が降ってきた。

ん、まで、どういう状況？ 落ち着けヒナギク……

そうヒナギクは自分に言い聞かせること10秒、やっと状況を把握した。

自分はハヤテの膝枕で横になっていて、ハヤテはうちわでヒナギクを扇いでいて、そして、ヒナギクは浴衣姿。……あれ、風呂に入っていたよね、私。

「ちょ、え、な、なにがどうなってこうなってるの?!」

ヒナギクはさらに混乱した模様。

「ヒナ、の、のぼせたじゃん」

ハヤテが顔をそらして言う。その顔は赤い。

ヒナギクの脳内ビデオは巻き戻しされ、そして、  
ー思い出した。

(そうだ、私、ハヤテの……／／／)  
思い出して真っ赤になるヒナギク。



「あ、あれっ、でも、私、何で浴衣着てるの？」

ヒナギクは誤魔化そうと取り敢えず最も不思議な点を聞く。

と、ハヤテは耳まで真っ赤になる。

……まさか、と思うヒナギク。

ハヤテ回想―

のぼせて風呂に沈みかけたところを抱きかかえたハヤテ。しかしヒナギクは裸。でも放っておくわけにもいかない。……というわけでハヤテは、

（と、とりあえず、理性を保ちながら脱衣所へ……）

一応ハヤテも男。例えどんなに外見が女の子でも男。ナギのようにまだ年下の明らかに子供ならまだしも、同級生の、しかも彼女の……となれば話は別だ。

とりあえず、脱衣所へ抱えて行った方がいいが、

（このままだと風邪ひいちゃう……）

そう。ヒナギクはまだ水が体から滴っている。

……考えること1分。

「えーいつ、もうどうにでもなれっ！」

ハヤテはタオルを持ってきて、ヒナギクの体を拭きましたとき。

ーハヤテ回想終了

ハヤテはとっでもしどろもどろになりながらも、こんな感じだと説明したりしなかったり。

ヒナギクは思わずそのときの事を想像してしまい、

……また気絶した。

まあ、当然だろう。

で、この出来事の元凶、春風千桜は、ナギとモンスター○ンター3rdをしていた。

もちろん、こんな事が起きてる事など知らない。

そして、家政婦は見た！的な感じで、マリアは事の顛末を垣間見ってしまった。ちょうど、ハヤテがヒナギクを拭いている時だった。

（い、いったい何が起きてるのでしょうか？あとで問いたさないとですね）

ただ、なんとなく、本当になんとなく、なぜだが自分がした感じと同じような気がするマリアだった。

さらに一時間後。今度はハヤテの部屋だった。気絶したためか、少し落ち着いたようだ。

「ごめんね……」  
ハヤテが謝る。

「べ、別に、いいわよ。ハヤテは何も悪くないし」  
ヒナギクはそういいながら、ちよつと気になってた事をさりげなく聞いて見た。

「あのさ、その、……やっぱり、私って、その……平ら、だった？」  
顔を赤らめながら聞くが、ずっとコンプレックスだったから、この流れで聞いてしまえ！と何を考えたのかハヤテに聞く。

「あ、えっと……そ、そんなこと、無いと、思うよ。ちゃんと、あ、あったし……」  
ハヤテも耳まで赤くしながら言う。

そして、そのまま二人は身体と身体を……  
「「んなわけ無いでしょ！！！」」  
すいません、悪ふざけがすぎました。

ここぞ思い出して欲しい。今日はマリアさんの誕生日なのだ。  
もちろん、天然ジゴロこと綾崎ハヤテや、才色兼備、完璧な生徒会長こと桂ヒナギクが忘れているわけが無い。

「なんだか、僕の例がとっても嫌な例のような気がするのですが、……」  
気のせいです。

もちろん、二人はあらかじめマリアへのプレゼントは用意してある。

というわけで、二人は大広間へ向かう。

もちろん、そこにはマリアがいて、二人はプレゼントをわたす。

……マリアは忘れられてなかったことに安堵していた。

さて、そしてみな、それぞれ就寝準備……といいながらも、ナギと千桜はおそらくオールするのではないかと。

さて、ハヤテとヒナギクは、毎度おなじみ、ハヤテの部屋で一緒に寝る事になりそうだと。

つづく

## 15. タイトルが思い浮かばない……

「マリアさん、どうしようかしら？あの二人、まだげーむしてますよ」

「大丈夫ですよ。明日はお休みですし、起こしておきましょう」  
マリアとアテネがそんな会話をしているころ。

ハヤテとヒナギクはハヤテの部屋にいた。

「もう、クリスマスかぁ……」

時が経つのは早いものね、とヒナギクは言う。

「だね。……ちょうど、去年の今日、親に捨てられたんだ……って思うと、なんかこの一年間がとってもいろいろあったな、と」とハヤテはつぶやく。

「そうか……確かに大貧乏からなんだか大富豪に拾われてそんな生活になるわけだしね」

ヒナギクは続ける。

「ただ、……今でも、あの時の僕の判断は、正しかったのかな、って疑問に思う時があるさ」

ハヤテはすこし辛そうな顔をする。

すると、ヒナギクはハヤテを後ろから包む。

「大丈夫。自身持って」

そのまま、頬に唇が触れたのはふたりだけの秘密。

さて、そんなことも知らない泉は、瀬川家のパーティーに参加していた。

そして、こっそりと、明日の事に心を馳せていると、ガシッ。

「うにゃあっ！……なんだ、美希ちゃん……」  
いきなり肩を掴まれて、まるで、

「猫みたいな反応だな」  
私のセリフを取らないでください。

「「いや、知らないよ」」

「ま、それはともかく、だ。なに考えてたんだ？」  
美希がするどくつつく。

「ふえ？……何でわかったの？」  
泉はなんで分かったの？と言わんばかりの顔をする。

「何時にも増して、顔がにやけてるぞ」  
美希がズバリ指摘する。

「に”やっ!!」」  
顔をみるみる真っ赤にする泉。

「に、に、にやけてなんか、にやいっ！」

噛んだ。

（噛んだな……凶星か）

とてもわかりやすい反応を示される泉。

「大丈夫だ、問題だらけだ」

美希がなんかどっかのCMのパクリっぽく言う。

「もおり！！美希ちゃん！」

泉が耳まで真っ赤にする。

「いや、すまんすまん、泉の反応が楽しくてつい  
さりげなくひどい事を言う美希。」

「美希ちゃん、あのさ、その、ち、ち、ち……チュウとかさ、しち  
やだめかな、ハヤ太君に」

体から湯気が出るくらい赤くなって言う。

「いいんじゃないか？」

美希がいう。

するとさらに真っ赤になる。

（こんなに、な……でも絶対報われないんだよな……）

そう考えると、なんかとても悲しくなる美希だった。

そして、ハヤテの部屋。

二人は布団に入っていた。

「すこし寒いね」

ヒナギクがいう。

「なら……」

といって、ハヤテはヒナギクを抱きしめる。

「ひゃっ！……あったかい……」

気がつくとお互いの顔が至近距離に。

ヒナギクは顔を赤くすると、ハヤテは赤い柔らかい唇を重ねた。

そのまま何分間だろうか、ずっとつながっていた。

唇をはなすと、ハヤテは自分のした事にいまさらながらかおを赤くしていた。

それを見て、ヒナギクはくすつ、と笑う。

そして、今度はヒナギクから……

そんなで、そのうち二人も寝静まった。

ただ、途中で今日の風呂の事を思い出して、一人勝手に妄想してドキドキしてたりしたヒナギクだったが、その事は秘密だったり。

つづく



## 16. そしてクリスマス

そして、次の日。

「……凄いですね」

思わずハヤテはつぶやく。

居間の大画面、200インチテレビの前でしかばn……いや、爆睡するナギと千桜。

テレビは、省エネ機能で自動的に電源がきれたようだ。地球に優しい三千院家です。

そして、二人の手元には、p○pが。

「……千桜って、こういうところも、あるのね」

ヒナギクは、副会長の別の顔を知った。

その一時間後、マリアさんも起き、さらにその一時間後、マリアはナギと千桜を起こしに行く。

朝食の席に並んだ一同。

ナギと千桜は眠そうな目をこすりながら座っていた。

「ハヤテー、眠いぞ、あれ、入れてくれないか？」

ナギはハヤテに頼む。

「あ、はい、分かりました」  
と言って厨房に向かう。

そして数分後、ハヤテがワゴンを引いて厨房から出てきた。

「これは○○○といって、眠気や疲れにいいですよ。千桜さんも飲みますか？」

ハヤテはそういいながら、ポットを傾けティーカップに注ぐ。

作者は紅茶には詳しくないので、ここでは、○○○とさせていただきますが、あしからず。

「あ、じゃあ、一杯、いただこうかな」  
すっかりなじんだ千桜であった。

昼ごろには……ということになっていたので、二人は帰る支度をし  
て、三千院家の玄関の前に。

「じゃあ、ナギ、新学期、ちゃんと学校来るのよ！」  
ヒナギクはそう言い残して帰った。

千桜は、また正月ごろに来るらしい。

「嵐が去ったようでしたね……」  
マリアはそうつぶやいた。

「そうですか？ なかなか楽しかったですよ」  
ハヤテはそう言い返す。

「そうだぞ、マリア。……ただ、眠いぞ、ハヤテ」  
ナギは大きな欠伸をする。

「……まさかとは思いますが、お嬢様、今から午睡を取る、とか、

そんなではありませんよね？」

「何を言っているのだ、ハヤテ」

その言葉に、一瞬期待をしたハヤテだったが、

「寝るに決まっているであろう」

と小さな胸を張って「うるさい！」寝室へ行ってしまった。

「……こちらはこちらで、嵐ですね」

ハヤテは、ナギにとっては微妙な形で、嵐だったことを肯定した。

そのころ。瀬川邸。

「準備いいの？」

美希が聞く。

「うん……行ってくる」

続く

**17. さて、どんな話だったっけ？（前書き）**

お久しぶりです！

ちょっと、テスト明けで、調子がでないので、今回は短めに。言い訳？許してください（――；）

## 17. さて、どんな話だったっけ？

「なあ、ハヤテ」

「なんでしょうか？」

「一週間近く間が空いて、どんな話か忘れてしまったぞ」

「僕に言われましても……」

といいながらハヤテは作者の方を見る。

いや、私に言われましても……どちらかというと、文句は日本の教育制度に……

「ハヤテ、ここにダメ人間がいるぞ」

お嬢様には言われたく無いのでは？と思うハヤテであった。

なにはともあれ、12月25日、午後。

ナギは、午前中まで散々騒いでいたこともあり、寝る、と一言言おうと、ベッドで爆睡。

やっぱりか、と思うハヤテ。

まあ、ハヤテが、疲れたか寝る、なんてことはある訳もなく、掃除をしていた。

「では、私はなくなった食料を買ってきますね」  
マリアさんはそういつて買い物に。

そんなわけで、まあ、約二匹と一人(?) 余計なのはいるとはいえ、  
実質、ハヤテ一人。

あ、余計な一人ってのは神父さんですよ。

ナギは寝ているのでカウントしない方向で。

「屋敷が静かだなあ」  
とつぶやいて見たり。

すると、  
ピンポン

「あれ、誰だろうか？」

警備室にいたSPの報告だと、泉だ、ということだった。

「なら、中に通してください」

「こんにちは、瀬川さん」

「や、やつほー、ハヤ太君！」

声は少し震えているが、ハヤテは気がつかない。

「取り敢えず、客間へどうぞ」

ハヤテはてつきりナギに用事があるのかと思ったらしい。

「どうぞ」

紅茶を差し出す。

「いまお嬢様は睡眠中ですので、もう少しお待ちください」  
ハヤテはそう言う。

「ふえ?!、あ、あのね、ハヤ太君に用事があって……」  
泉は顔を少し赤くしながら言う。

「え、そうなんですか？」

ハヤテは意外そうに首を傾げる。

「う、うん……」

泉はそういうと、深呼吸して、

「これ……」

といって、一通の便箋をだして、ハヤテに渡した。

「あ、はい……」

ハヤテが受け取ると、途端に恥ずかしさと、結果を聞くことへの恐怖で、逃げ出した。

「せ、瀬川さん?!」

(どうしよう、わたし、ヒナちゃんがハヤ太君と付き合ってるの知



ってるのに、知ってたのに……)

泣きながら走り去る泉だった。

短いけど、続く

## 18. サイコメトラー？いいえ、通りすがりのメイドです。

ハヤテは困っていた。とっても困っていた。

(ど、ど、ど、どうしよう……)

背中から嫌な汗が流れていた。

さて、何があったのか？

遡って約30分前……

泉が渡してそのまま逃げ去ってから、手紙を見る。

(封筒には、お互いの名前しかない……まあ、当たり前か。)

そして、封筒を開けて、中身を開ける

そして、中に入っていた一枚の便箋を開く。

……そこには、泉らしい丸っこい字で書かれていた。  
何がって？

ラブレターだった。

さて、ハヤテはなにで困っているのか？

決してOKしようかしないかで迷っているわけではない。何といえ  
ばいいか、で迷っているのである。

そういえば、こんなこともあったな、とふと歩の事を思い出すハヤ  
テ。

「くしゅん！」

風邪引いたかな、と思う歩。

歩は、銀杏商店街を歩いていた。いまからバイトに行くところと言  
うわけだ。

（クリスマスにバイトって、私の青春はなんなのかな？）  
と怪しい事をかんがえる歩。  
すると、

「あれ、歩？」

ふと前を見ると、

「あれ、ヒナさん?!」

おかしいな、ハヤテ君の家にいるんじゃないかな?と首を傾げ  
る歩。

「いまからどんぐり行くところなんだけど、歩は？」

「あ、私ですけど、……ハヤテ君はいいんですか？」  
歩が聞く。

「え?! あ、昨日だよ」

一瞬、なんの事かと思ってから答える。

「そうなんだ……いーなあー」

歩は遠い目をする。

「「こんにちはー!」」

「あらいらっしやい、今日もよろしくね」

バイト先についた二人。元気な挨拶をすると、二人とも仕事モードになる。

そのころ。マリアは買い物を終えて、帰路についた時。

ぴちゃっ。

(……あぶなかったですわね)

マリアの目の前には鳥の糞。

なにか嫌な予感がするな、と思うマリア。相変わらず洞察力が鋭い。

(ハヤテ君が巻き込みそうな不幸といえば……やはり女性関係ですかね? クリスマスですし)

もはやあなたはエスパーかというレベルの洞察力。

(まさか、ラブレターなんてもらってませんよ……ね?)

前言撤回。エスパーですね、はい。

そんなことを思いながら、屋敷の門をあけ、扉を開ける。

「ただいま帰りました」

……返事が無い。

（まさかとは思いますが、予感が当たってませんよね……）

居間に行ったが誰もいない。しかし、そこにな一通の手紙が。

ーハヤ太君へ　いいんちよさんより

（……）

それを見たマリアは、自分の洞察力を恨んだそうな。

つづく

## 19. ファミマカフェって高いよね……話とは何も関係ないな、このタイトル。

ある一部屋で、青髪の少年は悩んでいた。

すると、

コンコン

「ハヤテ君、いますか？」

マリアだった。

どうしたんだろうな、と思って、ドアを開けると、マリアの手にはあの手紙。

しまった、と思うが、当然だがもう遅い。

「説明していただけますか？」

……なんだか丁度一年前も自分で墓穴掘ってこんな事になったな、と思うハヤテだった。

「さて、時に理沙」

「なんだ、美希」

「私たちには出番はないのか？」

「作者に頼むしかないだろ」

無理です。

「……なあ、理沙、作者、ぼこっていいかな？」

「いいんじゃない？」

さて、そんな策r y（殴

取り敢えず……

「そういう事ですか……」

マリアが珍しく頭を抱える。

「どうしましょう？何て言って断れば……」

ハヤテも頭を抱える。

その時、屋敷の電話になる。

「はい、三千院。……はい。……わかりました。」

電話が終わると、

「ハヤテ君、返事はいいそうですよ」  
マリアがそう言う。

「へ?!」

ハヤテが驚く。

「いま電話がありましたよ」  
そういいながら、なんか展開にデジャヴを感じるマリアとハヤテだった。

「くしゅっ！」

風邪引いたかな、と噂されてくしゃみが出た歩は勘違いする。

「相変わらず閑散としてるわね、この店」

ヒナギクが自分たちの分のコーヒーを淹れながらつぶやく。

「ですね。……私たちのバイト代、合計収入こえてるんじゃないかな？」

さりげなく、それはまずいだろう、という事をつぶやく。

その時。

カランカラン

「いらっしやいま……なんだ、お姉ちゃんか」

ヒナギクが半ば呆れ顔になる。

「ヒナ、お金か」

「貸しません！」

いい終わる前に言う。

「えー！いいじゃん！ほんの一万円くらい！」

ほんのってなんだ！という値段を提示する雪路。

「あれ？でも白皇学院の先生って給料高いんじゃないのかな？」



歩が首を傾げる。

「だいたい月50万くらいだったよね……」  
ヒナギクが計算する。

「ええええっ！なんで足りなくなるのかな？！おかしいんじゃないかな？！」

歩が叫ぶ。

「まあ、主にお酒とかお酒とかお酒とかに消えるからね」  
呆れ顔というヒナギク。

ここにダメ人間がいる、と思った歩。

「ち、ちょっと、いま『ダメ人間がいる』と思ったでしょ！ダメ人間じゃないのよ！テレビとன்றら変わらない趣味なのよ！ハビット！わかる？！」

まくしたてる雪路。

ああ、完全にダメ人間だ、と思うヒナギクと歩だった。

つづく

20. そろそろタイトルのネタがきれてきたな、どうしようか。あ、これタイトル

「本当にいいのか、泉？」

美希は聞く。

「だって、答えは分かるもん。伝えられればいい」と言う。

ただ、心の内ではハヤテが自分に振り向かないかな、と期待していたりするが、そんなことは言えない。

さて、喫茶どんぐりでは、ダメン……もとい、雪路が帰り、再び二人きりになる。

すると、電話になる。

「はい、こちら喫茶どんぐり」

ヒナギクが受け取る。

そして、ヒナギクは話を聞きながら、徐々に顔が曇る。

受話器をおくとうなだれた。

「ちよ、ヒナさん、どうしちゃったのかな?!」

歩が心配する。

「ハヤテが……泉に告白されたって」

まるで世界の終わりのような顔をするヒナギク。

「え、それは、ハヤテ君がそれにOKしたってことかな?!」  
歩がまさかと思って聞く。

「ううん、答えは言わなくていい、って言われたんだって」  
その言葉になんかとても覚えがあった日、デジャヴを感じたりする  
歩。

「でも、なら大丈夫じゃないのかな? ハヤテ君なら」  
デジャヴとか振り切りながら言う。

「なんで?」

「だって、ハヤテくんはいつも一筋ですから」  
笑顔でいう。

「だって、昔だって、10年近くもずっと同じ人を好きになってた  
人ですよ」  
少し悔しいですけどね、と小声で付け足す。

「そ、そうかな?」  
そんなこと言われて少し気恥ずかしいヒナギク。

「明日確かめに行ったらいいんじゃないかな?」  
歩はそう言った。

さて、明日、ハヤテの未来は?

「なんですか、まるで僕が死ぬみたいじゃないですか！  
違うんですか？」

## 21. ダメ人間と忘れられているであろう人物について。……どうしようか

雪路は町をとぼとぼ歩いていた。

「くっそー、ヒナの意地悪っ、いーじゃん、ほんの一万くらい」  
ダメ人間の発想である。

取り敢えず、給料の半分を使い切ってしまった雪時は宿直室に戻ったようだ。

「あー、出番、久しぶりだなあ」

「そうですね、なかなか私たちは出してもらえませんでしたからね……」

そう言ってこちらを睨むワタルとサキ。

まあ、取り敢えず、現在PM8…20。店も閉じ、のんびりお茶を飲んでいる二人。

「それにしても、お客さん、増えましたね……」

今日だけでレンタル本数は、以前の一ヶ月分くらいだ。

「やっぱり、バイト、入れるか」  
ワタルはため息をつく。

その時、店の電話になる。

「はい、レンタルビデオタチバナしんす『ねえねえ、バイトとか募集してたりとかしてないかな?!』」  
歩だった。人の話は聞くつもりはないらしい。

なんだこのタイミングの良さというか悪さというか……と思うワタル。

「その代わり時給一円な」

『ちょ、ちよつとそれはひどいんじゃないかな?!』  
当然である。どんなに頑張っても一ヶ月で千円いかないだろう。

「冗談だ。暇な時来い。要相談だ」  
苦笑いしながら答えるワタル。

『やった!』

とでかい声で叫んだかと思ったら、ガチャン、と電話が切れた。

しばらくワタルは耳が痛く、うずくまっていたが、とりなおして、

「という訳で、バイトはいるからな」  
とサキに言った。

わかりました、と言いながら、サキはなぜかイヤな予感がしたが、その正体は分からなかった。

そしてハヤテとヒナギクは……

つづく

「ちよっ、また引っ張られるんですか!？」

## 2.2. 第四章完結……と思ってたけど終わらなかった

そして次の日。

朝五時。

（もう朝五時……起きますか）

マリアは体内時計で起きて厨房に向かう。

すると、すでにいい匂いが。

多分、ハヤテ君でしょう、と思いながら覗くと、やはりそうだった。

「おはようございます、ハヤテ君」

マリアが挨拶する。

「あ、おはようございます、マリアさん」

相変わらず朝早いですね、と言おうとして、……うつすらと目の下に隈があるのが見えた。

そうか、と納得するマリア。

昨日、ハヤテは寝ていない。

……もとい、ハヤテは寝られなかった。

あんなラブレター見せられて、正直、動揺した。



そして、動揺している自分に動揺した。

自分はヒナギクの事が好きはずなのに、他人からのラブレターに動揺してしまった。

……だからといって、ヒナギクから泉にするか、というのは別問題だが。

そんな昼。

ピンポーン

「あら、だれでしょう？」

マリアが警備室に向かう。

そこに映ってのは、ヒナギクだった。

ハヤテは、掃除も終わり、部屋に戻ると、何時の間にか寝ていた。

起きたら既に昼だった。ハヤテには珍しい事だった。

さて、寝不足の分も寝たんだし、シャキツとしなくては、と思って起き上がると、

……ヒナギクがいた。

ハヤテが驚いてベッドから落っこちてヒナギクを押し倒した上に…

：という騒動が一段落してから、二人は椅子に並んで座っていた。  
暫く沈黙が続く。

そして、

「ハ、ハヤテ、あのさ」「ヒ、ヒナ、あの、」

同タイミングだった。

そして思わず二人は吹き出す。

空気が穏やかになった。

そして、お互いに頷く。何かを確かめるように。

それだけでわかった。……あえて確認する必要もない、と。

来た時よりもいくばかか顔がほころんだヒナギクを見ながら、マリ  
アはほっとしていた。

今日の朝、ハヤテの様子を見て、ヒナギクに電話をかけた事をとて  
も悔やんだが、それが逆に功を奏したかな、と思っていた。

そして、

私も、こんな風に心を許せる男性が欲しいな、と人生において始め  
て思うのだった。

「くしゅっ！」

その頃、恋をしたいな、と思っていた、至って普通の女の子、……  
ある意味普通じゃない乙女、が、くしゃみをした。

（なんか最近、くしゃみ多いんじゃないかな?! 風邪かな？）  
いいえ噂です。

「取り敢えず、バファ○ンでも飲んで寝ようかな……」  
そっぴいながら、台所に向かう歩だった

続く

### 23. 泉の可愛さはまたヒナギクと違っていいよね、って言ってる人がいた

泉ら三人組は泉の部屋にいた。

「で、なんでいつも以上にニコニコしてるんだ？」

なにも状況を知らない理沙は不思議な顔をしていた。

そんなつもりはなかった泉は

「ふえっ?!」

と顔を真っ赤にして、撃沈していた。

その頃、ナギは相変わらず自室の120インチテレビでアニメを見ていた。

『わけがわからないよ』

「やはり、魔法少女ま○か☆マギカは神アニメだな」と隣にいる千桜に言う。

「ああ、そうだな」

と言いながら黒が基調のDVDパッケージを見て、

「こっちは作画崩壊してて見る気なくしたかな」

と千桜にしては珍しくストーリー以外で評価する。

「よし、ま○かスレでもたてるか」

と言ってナギはIntelのモンスターパソコンを出す。

ここにダメ人間が、と思いながら、モンスターパソコンっていくらだっけ？と思う千桜だった。

泉は二人が帰ってから、布団の中で一人、悶絶していた。

そして、虚しくなった。

（でも、ハヤ太君には自分の気持ちに気がついてもらえたし、いいよね？）

と思う泉だった。

まさか、ファーストキスの相手がハヤテだった、とは思っていないだろう。いや、覚えていないだろう。

レンタルビデオオタチバナ新宿本店は、定休日、と書かれた札がおりていた。

その頃、中では、一ヶ月分の決算を行っていた。

全てのビデオの領収書をパソコンに取り込み、Excelで打ち出し、そして実際の金額を計数する。

すると……

「純利益が支出と同額……だど?!」

すなわち、ビデオの購入費などの二倍の収入があった、と言うわけだ。

まあ、それもそうだ。ここからちよつと行くと、青地に黄色いTのレンタルビデオチェーンがあるのだが、ビデオ本数や、新作の入荷の早さ、そして重複購入することによって、より多くの人に行き渡る、そして、予約制度により、レンタルビデオタチバナは勢力を伸ばした。

「この調子で、チェーン、戻せたらいいですね」  
サキは言う。

「それはもつと第一号店を大きくしてからだ」  
と慎重な姿勢を取るのだった。

#### 第四章・完

01. 正月といえ、おせちだよね！……え、食べない、だど？！（前書き）

第五章です。ついにここまで来ました……！

楽しみになんかしてくれていたらとっても嬉しいです。

水曜日は休載してすいませんm（　　）m

**01. 正月といえば、おせちだよね!……え、食べない、だと?!**

「写真撮るか!」

ナギが突然言う。

「お嬢様、そんなどアップで顔を出されてどうかなさいましたか?」

「ハヤテ、写真撮るぞ!」

ハヤテは後ろを向くと、漫画をもった MARIA が苦笑い。タイトルは「銀○少年」。

なるほど、と納得して同じく苦笑い。

そして、アテネも苦笑い。

いま、あれ? アテネなんていたっけ? って人。

……消されますわよ、だそうですよ。

さて、冗談に見せかけた事実は置いておいて、一行はナギを追いかけた。

「もうすぐ正月だな」

「そうですね、若。稼ぎどきですね!」

レンタルビデオタチバナ新宿本店。

正月は、くだらないバラエティーを見たく無い人がレンタルビデオ屋に殺到するのだ。



「え、じゃあ、もしかして、お正月もバイトなのかな?!」  
歩が聞く。

「当たり前だ。その代わり、バイト代くらい、すこしまけてやる」  
ワタルは言う。

「ああ、おせち……」  
歩は泣きそうな顔をする。

「おせちなら……わたしが作りましょうか？」  
サキが言う。

「え?! 本当?!」  
歩の目が輝く。

「おい、サキ、いいのか？」

「いいんですよ、それに、大勢で食べた方が、作りがいがありますし」

サキも目を輝かす。

「……ならいいか」  
と言いながらも、ワタルも楽しみなのであった。

「おせち、作りますか？」  
ハヤテはマリアに聞く。

「そうですね……作りますか」

「腕がなりますわ」

腕を回しながら、最近出番なかったし、これで、と気合いを入れる。

「なら咲と伊澄も呼ぶか」

後ろからナギが言う。

「そうですね」

マリアが言う。

さて、それぞれの正月はどうなるのか？

つづく

**01. 正月といえば、おせちだよね!……え、食べない、だと?! (後書き)**

ブログでいろいろ、この小説についても書いてます。ぜひ見てください。

<http://brackcat.o-o-i.net/>

## 02. 作者がぶっ飛ばされた……え、なんだって？何が起きた？って言う回だっ

そのころ。桂家では……

「お正月くらい雪ちゃんも戻ってらっしゃい」

と、なぜか登場する度に若返っていく桂・母が言ったこともあり、家族で過ごすことが決定していた。

その桂・母の言葉には裏があったのだが、それはまだだれも知らない。

さて、彼女がいるのに相変わらずの天然ジゴロのハヤテは

「なんですかこの紹介は！！」

……なんか叫んでいるけど気のせい、だな。

まあ、続けるとしよう。

ハヤテは、おせちの準備のために買い物に行っている。

高級食材？確かに使うが、それ以外のものもあるからな。

とまあ、スーパーに入ると、

「あ、ハヤテ！」

もう買い物が終わらせたのか、大量の荷物をもったヒナギクがいた。

「ヒナ！正月の買い物？」

パツと見えた荷物で判断する。

「そうだよ！……あ、早く戻らなきゃ！じゃ、またね！」  
何やら忙しいらしい。

もう少し話したかったな、と心の中で思うハヤテ。

そして、買い物してると、

「ハヤテじゃねーか！」

振り向くと、チビの男の子一人と、メイド服。

「チビとはなんだ！チビとは！」

「あ、ワタル君にサキさん、こんにちは」

「おい、この作者、ぶっ飛ばしていいか？」  
ワタルが言う、

「僕も賛成ですね」  
ハヤテも睨む。

……まあ、取り敢えずスルー「「するなっ！」」

＊暫く音声と爽やかな映像でお待ちください＊

「さて、作者をぶっ飛ばしたところでつと、話戻すか」

ふとハヤテがワタルたちの引いていたカートの中の食材の量を見て、

「……二人で食べるにしては、とても多くないですか？」  
ハヤテが首をかしげる。

「あのストーキング姉弟の姉の方が、正月のバイトの後に食いた  
って言うからさ……」

どこかの団地からくしゃみの音がする。

「あ、西沢さん、レンタルビデオタチバナでもバイトしてるん  
ですか？」

ハヤテが聞く。

「ああ、そうだ。こっちも、猫の手を借りたくなるくらい忙しく  
なるからな」

ため息の出るワタル。

「まあ、正月はくだらないバラエティーとか駅伝しかやってい  
ないですしね」

「さすが、わかっていらっしやいますね」  
サキが感心する。

「ま、そんな訳だ」  
というワタル。

「頑張ってくださいね」  
とハヤテ。

「ああ。ハヤテも来いよ」  
と誘う。

「多分お嬢様が借りたがると思うので」と苦笑いした。

帰ると、ナギとアテネが目には涙を浮かべていた。

「な、何があったんですか?!」  
と聞くと、

「ロウ〇ゆうぶの第二話に感動したのだ!」  
と言うナギ。

居間を見ると、テレビはパソコンにつながれていて、上のブラウザのタイトルバーには

『ニコニコ動画（原宿）』

……なるほど、と思うハヤテだった。

つづく

### 03. 二日連続は大変だった……

「え?! 喫茶店でおせちは……」

ヒナギクがマスターにいう。

「でも新しくて斬新じゃない?」

ヒナギクはバイトにきていた。

そこで、昨日のおせちの話をしたら、こんな話になった。

「でも、常連さんしかいないのに、利益あるんですか?」

「それもそうね……」

まあ、当然の流れですな、と。

そのころ、アテネは上機嫌だった。

「日本の正月は楽しんだことがないですしね」

「あ、そっか、日本にいた時も《王族の庭城―ロイヤル・ガーデン》だから時間の流れが違うしね」  
ハヤテも納得する。

「なら、本気、出しますわね」  
マリアが腕を回す。



「ですね」

ハヤテも腕を回す。

「な、なんだか、ハヤテとマリアからオーラが……」  
ナギが後ずさりする。

「まあ、いいやないか」  
後ろから関西弁が聞こえる。

「おお、咲、来てたのか」  
どうやら来てたことに気がつかなかったらしい。

「当たり前や。ハヤテはんとマリアはんが本気出すいうとったからな」

咲夜が目を輝かす。

「にしても、なぜかうちの出番がいつも少ないような気がするんだけど、気のせいかな？」

咲夜が怪訝そうに首を傾げる。

「それなら、『関西人じゃないし、関西弁書きづらい』って作者が言ってたぞ」

ナギが暴露する。

あれ……言っていないぞ、そんなこと。

「あほかぁ！」

＊暫く（ry＊

なんか非常にデジャヴな感じは置いておいて、

「にしても、咲、泊まっていくなのか？」  
ナギが聞く。

「もちろんや！」  
さも当然かの様に言う。

「ところで、ハヤテ、ヒナギクはいいのか？」  
ナギが聞く。

「正月くらいは家族で過ごすのが風習ですよ」  
ハヤテは言う。

「その面では、最近の若者はわかってないわね」  
アテネも教育現場の人間として言う。

「そ、そうなのか？ マリア？」  
ナギが聞く。

「私もその点に関してはあまりよく知りませんが、そうなんではないのですか？」

マリアとナギはそもそも最初から日本にいた訳でもないし、生粋の日本人でもない。

「まあ、なら心配ないか」  
ナギが言う。

さて、どうなるのか？

う  
う  
へ

#### 04. そして、晦日（前書き）

頼りにしていた、フリースポットが死んでしまったため、金曜日は投稿できませんでした。すいません。

#### 04. そして、晦日

そして、晦日。

ハヤテは、台所で大忙しだった。主に、おせち作り。

「ハヤテ君、そろそろ休んでもいいですよ」  
マリアが言う。

「え、あ、はい、わかりました」  
といってハヤテは厨房を出る。

すると、ハヤテの携帯がなった。

表示をみると、

ー桂ヒナギク

すぐに電話を取る。

「もしもし？」

『あ、ハヤテ？』

すこし嬉しそうな声が聞こえる。

『あ、あのさ、一緒に、その、初詣、行かない？』

てなわけで大晦日。

「で、なんでこんなに大勢いるのー!」  
ナギが言う。

ハヤテたちはもちろん、桂家、生徒会三人娘、そして、咲夜、伊澄、千桜。

「ま、こんなことになるだろうとは思ってましたけどね」  
マリアもつぶやく。

「ですね」  
とハヤテも半分呆れている。

「楽しいからいいやないか」  
と咲夜も上機嫌。

きっかけは、ヒナギクの電話だった。

あの電話の後、マリアにそのことを報告していると……

「ふっふっふ、私たちは、いま、偶然、そう、偶然聞いてしまったのだ!」

「だ!」

「大事だから二回いったぞ」

「」「というわけで……」「」

（本当に神出鬼没だな……）

と生徒会三人組にすこし恐怖を感じるハヤテ。

そんなわけで、楽しい大晦日となりそうだ。

つづく

## 05. 人生、山あり谷あり（前書き）

少し重めの話ですが、大事な話ですので、読んでください m  
し m



## 05. 人生、山あり谷あり

さて、その頃、三千院家本宅。

「報告しますか？」

一人が尋ねる。

「いや、……しなくて……よい」

弱々しい声が聞こえる。

「いや、ですが、」

さらにもう一人が言う。

「いま、あいつらは、いろいろ楽しく年末を過ごしているだろう、だから正月明けでいい」

その老人はさらに言う。

「そうですか……分かりました」

外から除夜の鐘が聞こえる。

「108個の煩惱が救われるんだっけな……わしは煩惱でできてる様なものだったからなあ」

まどの外を見る老人。

ゴーン……

ゴーン……

その頃、三千院家別宅では、  
……みな起きていた。

「除夜の鐘だねー♪」  
泉がはしゃぐ。

「除夜の鐘には、108の煩悩を救うと言われてるんですよ」  
ハヤテが解説する。

「ナギは煩惱だらけだからな」  
と何気にひどい事を言う美希。

「そ、そんなことは、な……い、よな？ マリア？」  
言われてあさっての方向をみるマリア。

「ま、頑張れ」  
肩に手をかける千桜。

みな、楽しく談笑していた。

そして、最後の一回がなったとき……

「これで、思い残すことも、ないな……」

そうつぶやいて、数秒後、

ピーーーーーー

老人の隣においてあった、機械が、最期を告げた。

老人……、いや、

三千院 帝は、息を引き取った。

## 06. お久しぶりです！と作者が申しております。（前書き）

本当に皆さんお久しぶりです。元気になってましたか？

実は、作者は夏バテで脳みそが死んでました（――；）

そんなわけで、連載再開ですが、実は、

来年の電撃文庫大賞に応募するためのオリジナルを書き始める関係で、少し更新頻度が落ちます。許してください。一週間に一本は書きたいと思います。

## 06. お久しぶりです！と作者が申しております。

そろそろおじいさまにご挨拶にいきましょう、とマリアも言ったので、三千院家別宅の人間一同は本宅へ向かう。

「それにしても、ハヤテ」

「はい、どうかしましたか、お嬢様？」

「あまりにも出番が久しぶりすぎて少し戸惑うぞ」と不機嫌そうにつぶやく。

「ああ、それでしたら、どうやら作者が課題と夏風邪と画面の中の世界に追われていて、とても筆を持てなかったらしいですよ」さらにと内部事情を漏らすアテネ。

「最後のはなんなのだ！最後のは！」  
叫ぶナギ。

「まあまあ、作者も登場人物もダメ人間だからしょうがないじゃないですか」  
とマリアはナギの方を向く。

じーっ

全員の目がナギを見る。

「な、なんなのだ！皆して、私が、ダメ人間みたいな目でみて

「！」  
狼狽する。

いや、当たり前だろ、という目で一同は苦笑い。

「いいかげん行くぞ！ そうしないと……」

「はいはい、分かりましたよ、行きましょう」

というわけで、自家用ヘリで一同は本宅へ向かう。まさか、そこに待っているのは、生きている帝でない事も知らずに……

そのころ、レンタルビデオタチバナ新宿本店では……

「三が日の過酷営業が終わって、店のシャッターには「年始休業日」と。」

そして、中では、

三人が川の字で寝ていた。サキ、ワタル、歩と。

まあ、連日深夜まで営業だったから、当然ですね。

……ん？ 未成年の深夜の就業は禁止されてるって？ 大丈夫、某ジャンルのゲームみたくだにテロップで※18歳以上です、みたいに出てるはずだから。

まず起きたのは、サキ。AM7…30。執事とメイドの朝は早いのですよ。

（二人は……まあ、仲良く寝てますし、放っておきますか）  
と、台所に。

……仲良く？と疑問に思った読者さんは鋭いですね。

そう、まるで姉が弟を包み込むように、二人は寝ていた。

やはり、年齢差があることから、どう考えても姉弟が寝てるようにしか見えない。おそらく、歩も、ワタルも気がついていないだろう。

先に起きたのは歩だった。起きて、自分のしてたことに盛大に赤面しながらそっとワタルを離れた。

よって、ワタルは何があったか知らない。知らない方が平和であろう。

「ところで、理沙、私たちは出番はないようだな」

「だな。まったく、しばらく書かなかったから、私たちのことも忘れたか？」

「ひどい話だ。劇場版でも一時的にいないことにされてたからな」

ーつづく

「あの、花菱さん、まだ見ていない方もいらっしやいますから、ネタバレはやめてください」





## 07. 帝、ナギ、そして……

本宅へ向かう一同。マリアが首を傾げる。

（おかしいですわね。何時もなら、本宅に電話をかけるとおじいさまに繋ぐのに、一体何が……？）

本宅へつくと、執事が迎えに来た。

「メイドの方々はどちらに？」  
ハヤテが聞くと、

「そのことに関しては、この後お話しします」と、客間に通される。

そこで聞かされたのは、驚愕の事実だった。読者には説明する必要はなからう。

「すなわち、じじいは死んで、私が当代当主になる、ということだな？」

全ての説明が終わると、ナギは聞いた。

「そこで、お嬢様、今後のことですが……」  
本宅執事長は顔を曇らす。

「大丈夫だ。とりあえずはじじいに言われたようにしておけ。私は練馬に戻って、天王州と話す。」

ナギはきっぱり言い切った。

ハヤテとマリアは気がついた。ああ、動揺しているな、と。

「ほんまか！ほー……ナギは大変やな」  
マリアから事情を説明される咲夜。

「ま、こちらは関係ないな」  
昨夜はきっぱりと言い切る。

「まあ、そうですね……ただ、ナギは常識をあまり知りませんから、  
教えてあげてくださいね」

「じゃあ、ワタルくん、私は帰るね」

「あ、まで、これ、給料だ」  
ワタルは封筒に入った金を渡す。

「あ、ありがと……え、こ、こんなにもらってもいいのかな？！」  
歩はその厚さに驚いたらしい。

「安心しろ、労働基準法に基づいて夜間手当と早朝手当を当てたら、  
分厚くなっただけだ」  
ワタルがそういいながら明細を渡す。

「へー、ワタルくんって頭いいんじゃないかな？」  
歩がそう笑いかける。

「そ、そんなことねーよ、店長として当然だろ」  
ワタルは照れたのか、顔が少し赤くなる。

「あつ、ワタルくん、照れてるんじゃないかな？ 顔赤いんじゃないかな？」

歩がいじる。

「う、うるさい、早く帰れ！」

顔が真っ赤になる。

「ふふっ、じゃあね」

そういつて、笑いかけて去って行った。

ワタルは、その歩の屈託のない純粹な笑顔に思わずドキツとした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6216o/>

---

ハヤテのごとく、ヒナギクのごとく～Super Combat Butler Story?～

2011年9月6日22時13分発行